

長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡
発掘調査報告書

1979・3

日本国有鉄道岐阜工事局長野工事事務所
長野県東筑摩郡明科町教育委員会

長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡
発掘調査報告書

1979・3

日本国有鉄道岐阜工事局長野工事事務所
長野県東筑摩郡明科町教育委員会

序

今回発掘調査を行なったこや城遺跡は、明科町のほぼ中央、中川手地区の能念寺山の北麓にある绳文期から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地です。

遺跡の存在は早くから知られていましたが、地元の人達には長い間城山公園として、春は花見の場所として親しまれてきたところです。

このたび、国鉄篠ノ井線の複線化に伴う路線変更の工事区域として、遺跡の西北端が削り取られることになったため、その範囲を対象に緊急発掘調査を行ない、記録保存を計ることが必要となりました。そこで明科町教育委員会では県文化課の指導を受け、国鉄岐阜工事局との間に委託契約を結び、こや城遺跡発掘調査会を組織し、調査の実施にあたることになりました。

調査團長は当初より相談に与っていた松本市の原臺藤氏を團長にお願いし、中信考古学会の方々の協力を得て、昭和52年1月22日に團を結成、引き続き調査にはいりました。

幸いなことに調査中天候に恵まれたものの、予想外に多様な遺構・遺物が検出されたため、期間延長のやむ無きに至り、発掘調査を1月22日から2月12日まで、こや城城郭の測量調査を翌53年2月15日から8月7日までの42日間にわたり実施しました。

その結果は本文中に説明のありますとおり、貴重な多くの資料を収めることができたわけですが、それにもまして今回の発掘は、明科町にとって、不明な点の多い古代の人々の生活状況を知る上での手がかりを得るものであり、現在進められている町史編纂事業との係わりからも、又、町民の埋蔵文化財への関心を高めるためにも、極めて意義深い調査であったと思います。

終わりに、この調査を行なうにあたり種々ご指導、ご配慮いただいた県文化課、及び国鉄岐阜工事局の担当官、ご多忙中ご尽力を願いました調査団の各位、地元のみなさんを始め京都佛教大学考古学研究会のみなさん、信州大学考古学研究会のみなさん、その他関係者各位のご協力に心からの感謝を申し上げます。

昭和54年8月8日

長野県東筑摩郡明科町教育委員会教育長
長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査会長 北条章一

発刊によせて

明科町中川手こや城遺跡の緊急発掘調査報告書がここに刊行される運びとなりました。

県の二大経済圏の中心地である松本市と長野市を結ぶ国鉄篠ノ井線は、同時に筑北地域町村民にとっては通学・通勤のための不可欠な路線であります。

現在、明科へ西条間の複線化工事が行なわれていますが、それに伴う路線変更計画の中にこや城遺跡が一部含まれていることから、記録保存のための緊急発掘調査が国鉄当局により行なわれることになり、その実施について町に依頼がありました。そこで当町教育委員会がその担当者となり、調査を実施し、その報告書が調査団により編纂され、出版される次第となったのであります。

本町における考古学的な発掘調査は、さきに明科廃寺跡の調査（古代）、緑ヶ丘遺跡（弥生）の調査が行なわれており、今回は8回目でしたが、このたびの行政的緊急発掘調査により、はからずも本町の古代・中世の遺跡の実態の一部が明らかにされてきましたことは、現在町史編纂に着手している明科町にとって、願ってもないしあわせであります。

ここに関係各方面の協力により、調査が無事終了し、このような立派な報告書が刊行されることについて心から御礼申し上げます。

なお、本報告書が学会のため、研究者のため、また町民各位の文化財理解のために活用されますことを願って、一言感謝のご挨拶を申し上げます。

昭和54年3月31日

長野県東筑摩郡明科町長 小林一富

例　　言

1. 本書は国鉄篠ノ井線複線化工事に伴い行なわれた、長野県東筑摩郡明科町大字中川手4,617番地に所在する、城山遺跡（こや城址）の調査報告書である。
2. 発掘調査は、国鉄岐阜工事局・委託を受けた明科町教育委員会が調査会を組織して実施した。
3. 本書の執筆は発掘及び整理担当者が行ない、文末に執筆者名を記して文責を明らかにした。
4. 本書に挿入した図版等は、主として各執筆者の責任において作製したが、山本紀之君の絶大なる協力を得た。
5. 写真は主として大沢が撮影したが、一部矢花勝春氏の援助を得た。
6. 本書の編集には、原団長と大沢が当たったが、やはり山本紀之君の協力を得た。
7. 本遺跡の資料は明科町教育委員会の責任において保管され、一部、町民俗資料館に展示されている。

目 次

<p>目 次</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 序 文 北条 章一 3 ○ 発刊の辞 小林 一富 4 ○ 例 言 5 ○ 目 次 6 ○ 第 1 章 調査 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 節 発掘調査に至るまでの経過 8 第 2 節 調査日誌 10 ○ 第 2 章 地学的調査 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 節 位置と地形 13 第 2 節 地質と層序 15 第 3 節 地質構造 17 第 4 節 地形の形成 18 第 5 節 遺跡の名 23 第 6 節 まとめ 23 ○ 第 3 章 考古学的調査 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 節 遺跡の環境 25 <ul style="list-style-type: none"> 1. 自然環境 25 2. 歴史的環境 27 第 2 節 調査概要 29 <ul style="list-style-type: none"> 1. 繩文式遺構 88 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 号住居址 第 2 号住居址 第 3 号住居址 第 4 号住居址 4 号住居址上部集石 2. 繩文式遺物 	<ul style="list-style-type: none"> ①土器および土製品 38 ②石器 49 3. 古代・中世遺構 76 <ul style="list-style-type: none"> ○ 南段状遺構 ○ 落ち込み・豊穴遺構 4. 古代・中世遺物 78 <ul style="list-style-type: none"> ○ 土器 ○ その他の遺物 ○ 第 4 章 調査の総括 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 節 遺跡調査の総括 <ul style="list-style-type: none"> 1. 自然的調査 85 2. 考古学的調査 86 3. 中世城砦の調査 87 ○ あとがき 90
<h3>挿 図 目 次</h3>	
<ul style="list-style-type: none"> 第 1 図 城山公園付近の地質 (1:6000) 第 2 図 会田川の河岸段丘面 (1:20000) 第 3 図 明科町遺跡分布図 (1:5000) 第 4 図 こや城址付近の城壁分布図 (1:75000) 第 5 図 城山遺跡グリッド設定図 (1:400) 第 6 図 東地区遺構配置図 (1:200) 第 7 図 西地区遺構配置図 (1:200) 第 8 図 第 1 号住居址 (1:40) 第 9 図 第 2・3 号住居址 (1:40) 第 10 図 第 4 号住居址 (1:40) 第 11 図 第 1・2・3 号住居址出土土器 (1:4) 第 12 図 第 8 号住居址出土土器 (1:8) 第 13 図 第 4 号住居址・第 4 号住居址上部の集石出土土器 (1:8) 第 14 図 第 4 号住居址上部の集石出土土器 (1:8) 	

- 第 15 図 第 4 号住居址上部の集石出土土器
(1:8)
- 第 16 図 その他の地区からの出土土器 (1:8)
- 第 17 図 土製品 (1:8)
- 第 18 図 第 1・2 号住居址出土石器 (1:8)
- 第 19 図 第 8 号住居址出土土器 (1:8)
- 第 20 図 第 4 号住居址出土土器 (1:8)
- 第 21 図 第 4 号住居址出土土器 (1:8)
- 第 22 図 第 4 号住居址・階段状遺構付近出土石器 (1:8)
- 第 23 図 D-101・L-P-2~6 グリット出土石器 (1:8)
- 第 24 図 L-P-2~6 グリット出土石器 (1:8)
- 第 25 図 L-P-2~6 グリット出土石器 (1:8)
- 第 26 図 L-P-2~6・各住居址周辺グリット出土石器 (1:8)
- 第 27 図 第 4 号住居址周辺 Q-8・D-4 グリット出土石器 (1:8)
- 第 28 図 石皿および蜂ノ巣石 (1:5)
- 第 29 図 石棒様石器 (1:8)
- 第 30 図 出土石器分布図
- 第 31 図 打製石斧分類図
- 第 32 図 磨耗痕の範囲
- 第 33 図 打製石斧の大きさ
- 第 34 図 打製石斧の厚さ
- 第 35 図 打製石斧の側縁磨耗模式図
- 第 36 図 打製石斧欠損模式図
- 第 37 図 西地区 C トレンチセクション (1:60)
- 第 38 図 階段状石組遺構 (1:60)
- 第 39 図 C・D トレンチ 101・102 区方形竪穴遺構 (1:60)
- 第 40 図 M・N トレンチ 5・6 区不定形竪穴遺構 (1:60)
- 第 41 図 中世土器 (その 1) (1:8)
- 第 42 図 中世土器 (その 2) (1:8)
- 第 43 図 中世土器 (その 3) (1:8)
- 第 44 図 石 白 (1:4)
- 付 こや城址全体測量図 (1:400)

表 目 次

- 第 1 表 届序表
- 第 2 表 高位段丘面の対比
- 第 3 表 河岸段丘面の対比
- 第 4 表 出土石器一覧表

挿 図 目 次

- 図版 1 遺跡全景
- 図版 2 遺跡近景及び塔ノ原城址遠景
- 図版 3 東地区遺構及び 1 号址
- 図版 4 2 号址
- 図版 5 3 号址
- 図版 6 4 号址
- 図版 7 4 号址立石
- 図版 8 4 号址上部集石
- 図版 9 西地区遺構
- 図版 10 西地区縁辺部石垣
- 図版 11 東地区中世落込み
- 図版 12 各遺構出土土器
- 図版 13 土製品及び石器 (その 1)
- 図版 14 石器 (その 2)
- 図版 15 石器 (その 3)
- 図版 16 中世遺物

第1章 調査

第1節 発掘調査に至るまでの経過

現在、松本平と長野を結ぶ幹線である国鉄篠ノ井線の複線化工事が着々と進行しているが、当明科駅と本城村西条駅間の工事においては大幅な路線変更及び大規模のトンネル掘削工事をその内容としている。そのためこのこや城遺跡の西北端が工事対象地域として破壊されることになり危機、遺跡の発掘並びに城郭全体の測量調査を行ない記録保存を計ることが必要となった。

そこで国鉄の依頼を受けた明科町教育委員会では、長野県教育委員会の指導の下、国鉄岐阜工事局との間に委託契約を結びこや城遺跡の緊急発掘・測量調査を実施することとした。

調査会及び調査団の編成にあたっては、明科町教育委員会教育長を会長とする調査会と信濃史学会常任理事・原嘉藤氏を団長とし、中信考古学会の会員を団員とする調査団を下記のように構成。昭和52年1月22日調査を開始した。

記

城山遺跡（こや城跡）発掘調査会組織

調査会長	明科町教育委員会教育長	北条 章一
副会長	明科町文化財調査委員会委員長	鶴岐 忠
会計幹事	明科町収入役	塩原 英雄
理事	明科町議会文教委員長	平林 忠吉
◆	明科町教育委員	久保田 博
◆	◆	神 正博
◆	◆	上条 清隆
◆	明科町文化財調査委員	宮川 一人
◆	◆	幅 尚徳
◆	◆	山下 賢隆
事務局	明科町教育委員会事務局	
顧問	明科町長	小林 一富
◆	明科町議会議長	山崎 徳義
◆	明科町教育委員長	内川 友三郎

城山遺跡(こや城趾)発掘調査団組織

調査団長 原嘉藤

調査委員	(地学) 太田守夫 (考古) 小林康男 (・) 大久保知己 (・) 大沢哲 (・) 山越正義 (歴史) 原嘉藤	(考古) 中嶋豊晴 (・) 神沢昌二郎 (・) 小松虎 (・) 三村肇 (・) 浅輪俊行 (歴史) 宮川一人
------	--	---

調査補助員

京都佛教大学	小山繁夫 角井康晃	北田栄造
信州大学	竹内稔 直井雅直 石上周藏 宮坂亨	小林秀行 藤原伸一郎 米庭泰 三井玲子
日本大学	中野実佐雄	

調査員

明科町	○下里勝之助 内川規矩子 遠藤公義 柳勝造 二村和子 丸山けさみ 山崎七五三市	○三沢浪春 内川みどり 大木徳代 柴田悟 降幡すみみ 宮川シナ子 山崎長男
松本県ヶ丘高校OB	太田富晴	

測量班

調査委員 大沢哲

調査補助員	京都佛教大学	小山繁夫 藏後力 角井康晃	古園哲朗 十河稔郁 木村貞夫
-------	--------	---------------------	----------------------

高慶 孝 上野 俊雄
金沢大学 鳥羽 嘉彦 専修大学 山本 紀之
日本大学 中野 実佐雄 青山学院大学 宮島 章

(事務局)

第2節 調査日誌

1. 発掘調査

11月22日(火) 曇ときどき雨

原団長、調査委員 太田・神沢・宮川・大沢、協力員 9名。

午前9時より現場にて結団式を行なう。

午前10時作業開始。桑畑の桑の刈り立てとグリット設定。午後4時作業終了。

11月23日(水) 曇

調査委員 中島・太田・神沢・山越・三村・浅輪・大沢、補助員 小山、協力員 9名。

本日より本格的な調査にはいる。Nから0トレンチの8~10にかけて敷石発見。

11月24日(木) 晴

調査委員 中島・小林・大沢、補助員 小山・竹内・小林・直井・藤原、協力員 11名。

昨日発見された敷石の拡張を行なう。PとRトレンチでは集石がみられた。本日より全体測量をはじめた。夕方原団長の視察あり。

11月25日(金) 晴

委員 神沢・小林・大沢、補助員 小山・竹内・小林・米窪、協力員 12名。

敷石と実石の範囲確認を行なう。多数の土器、石器の出土をみた。本日調査会副会長 間岐 忠氏視察。

11月26日(土) 曇

委員 神沢・小林・浅輪・宮川・大沢、補助員 小山・中野・竹内・直井・藤原、協力員 14名。

Mトレンチの2~4で、落ち込みらしきもの発見。石器多数出土。MからTの8~10にかけて集石は一面のひろがりを見せた。

測量は、西側斜面を行なう。

11月27日(日) 晴

原団長、委員 大久保・神沢・山越・三村・浅輪・宮川・大沢、補助員 小山・中野・直井・石上、協力員 18名。

Mの5・6に落ち込み発見。集石はほぼ全貌を現わす。RS5~7にかけて集石、あたかも投げこまれたように掌大の石の中に土器、石器、骨片がかなりみられる。本日より西地区の調査を始める。

測量はひきつづき西側斜面を行なったが、けい斜が強く困難をきわめる。

11月28日(月) 曇のち時雨

委員 小林・宮川・大沢、補助員 小山・中野・北田・竹内・小林・直井・米庭、協力員 14名。

M N 5・6の落ち込み精査。須恵器・中世陶器出土。N 0の8~10の敷石精査。あるいは敷石住居址かもしれない。S T の9~10精査。T 9に炉らしきものがあり、これもまた住居址らしい。

原団長午前中視察。

11月29日(火)

委員 大久保・神沢・宮川・大沢、補助員 小山・北田・中野・竹内・小林・藤原・石上・米庭、協力員 18名。

C~101・102の落ち込みの精査を行なったところ多量の炭火灰を発見した。Q R S の集石は、縄文中期末の土器片や打製石斧・石鉄等が多量に出土しており、興味深い。

11月30日(水) 晴

委員 太田・小松・宮川・大沢、補助員 小山・北田・竹内・小林・藤原・石上、協力員 17
西地区では、CD 105から107にかけて土壘とおぼしき集石がみられ中から中世の土器が出土している。M N 5・6の落ち込みはほぼ1m×2mのほぼ長方形のプランになることがわかった。P 5で磨製石包丁出土。本日で全体測量は終了。

12月1日(木) 晴

原団長、委員 太田・宮川・大沢、補助員 小山・北田・中野・竹内・小林・直井、協力員 16名。

本日、現地説明会を行なった。小中学校の先生10名、新聞記者、文化財調査委員等多数見学にのぞむ。

西地区と東地区Q R S 5~7の集石に集中。

西地区では、石組みの範囲確認のために拡張を続ける。縄文時代の遺物も集石の中に多くまじっている。

12月2日(金) 曇ときどき雪

委員 大久保・宮川、補助員 小山・角井・中野・米庭、協力員 9名。

西地区集石の範囲確認を行なう。DからEの104~106にかけて集石の南端が出る。

荒天のため作業がはからなかった。

12月3日(土) 晴

委員 三村・宮川、補助員 小山・角井・中野・竹内・小林・直井・藤原・米庭、協力員 12名。
東地区的各セクションベルトの取りはずし。

北側の小テラスおよび石垣の精査を行なった。

12月4日(日) 晴

委員 大久保・山越・三村・浅輪・宮川、補助員 小山・角井・中野・三井、協力員 12名。

西地区は、引き続き集石の検出につとめる。集石は階段状を呈している。0-8で埋廻発見。

中央道調査員高桑氏見学に訪ずれる。

12月5日(月) 晴

委員 小林・中島・宮川、補助員 小山・角井・中野・三井・竹内・小林・米庭・藤原、協力員 18名。

西地区ではB-1~101にかけて溝状造構の範囲を確認する。

東地区は全体の精査。発見された三軒の敷石住居址を西より1号・2号・3号と名づける。西側斜面の石垣は本日精査完了。

本日、明北小学校の先生および生徒の見学があった。

12月6日(火) 晴ときどき曇

委員 中島・大久保・宮川、補助員 小山・角井・三井、協力員 14名。

西地区で溝状造構の精査と階段状集石の精査を行なう。

東地区は測量と写真撮影を行なう。2号址炉内より土器片出土。

12月7日(水) 晴

委員 大久保・宮川、補助員 小山・角井、協力員 15名。

西地区精査完了。各造構の検出終わる。

東地区ひき続き写真撮影と実測。

12月8日(木) 晴

顧団長。委員 宮川、補助員 小山・角井・三井、協力員 18名。

西地区は写真撮影および実測。

東地区。1~8号の住居址の敷石を水洗いする。8号址で埋廻発見。P Q R Tで集石をとり除いたところ立石を持つ敷石住居址を発見した。

12月9日(金) 晴

委員 太田・大久保、補助員 小山・角井、協力員 14名。

東地区 昨日発見された住居址を4号址と名づけ精査を行なう。4号址は直径約4m程の円形の掘り込みの中に、一辺約2.5mの方形の敷石を持つ、敷石のコーナーには立石を配してあり敷石を使われている石は他の8軒の住居址が板状の砂岩を使っているのに対し、ここでは安山岩を使用している。床面から石器多數発見される。

12月10日(土) 晴

委員 太田・三村・浅輪・宮川、補助員 小山・角井・中野・小林・直井・宮坂、協力員 18名。

西地区 溝状造構の精査。C101で精査を行なったところ、大形土偶1点出土。

東地区 4号住の精査を行なう。午後、信大の西沢先生が見学にみえ4号址出土の骨片について助言を受ける。

12月11日(日) 晴

委員 小松・小林・三村・浅輪・宮川、補助員 角井・中野・竹内・小林・直井・宮坂、協力員
18名。

東地区 4号址は写真撮影と実測。1号址と3号址の埋甕をとりあげる。

西地区 石垣の写真撮影を行なった。

12月12日(月) 晴

原団長、委員 太田・大久保・小林・三村、補助員 中野・小林。

全地区遺物のとりあげと実測。

西地区 大量の炭化した小麦が出土。

本日も信大の西沢先生がみえられた。4号址出土の骨片は日本シカであるというお話をあった。

本日をもって今回の発掘調査はすべて終了した。

2. 測量調査

こや城址の全体測量調査は、大沢委員が中心となって佛教大学学生をはじめ12名の学生によって昭和53年2月15日より3月4日まで18日間にわたって行なった。

3. 遺物整理

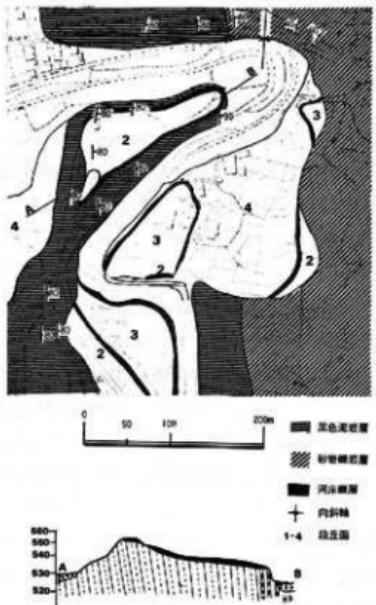
土器洗いについては、1月14日から16日に明科中学校生徒等の協力を得て行なった。

土器の復元作業については、測量調査期間中に夜間を利用しておこない、拓本および実測図の作成に当たっては、信州大学教養部考古学研究会と山本紀之、鳥羽嘉彦両君の協力を受けた。

(大沢 哲)

第2章 地学的調査

第1節 位置と地形



第1図 城山公園附近の地質 (1:6,000)

は高さ 20m・傾斜 80° 以上の崖となっている。また北東端の稻荷社の周辺は、北及び南東からの側方浸食により、下段面との間にくびれができる。

上段の平坦面はこの山の最高部に当り、面積およそ 70m²で人工が加わっていると考えられる。西側には高さ 70cm 程度の城の石垣と考えられる石積みが存在する。下段面は上段面との高度差は 7m,

こや城跡は、国鉄明科駅北東 500m に当たる、平地との比高 25m 程の山上（海拔 552m）にある。城跡の山頂は割合広い平坦面をもっている。平坦面は二段になっていて、上段は城の主郭部、下段は副郭部と考えられている。

城山公園とも呼ばれるこの山の地形は、大体三角形をなしている。すなわち、西側はおよそ 210m・N 10° E の方向、北側は 165m・N 45° E の方向で、北側に開いた台状の地形である。（以下城山公園台地と呼ぶ）南東側と北側は会田川の蛇行によって侵食され、山脚から山上の平坦面までは、北側で高さ 15m・傾斜ほぼ 90°、南東側で高さ 17~80m・傾斜ほぼ 90° の断崖となっている。西側は南の部分で高さ 25m・傾斜 80° 以上、北の部分で高さ 10m・傾斜 45° で、山脚は崖錐状の堆積を示し、更に会田川によると考えられる小段丘面によって囲まれている。ただ南端の県道と上段面との間 8.5m 程は、やせ尾根となり、東側は高さ 20m・傾斜 90° の断崖をもって会田川に臨んでいる。西側

北～北東に $\frac{8}{1000} \sim \frac{12}{1000}$ の傾斜で広がっていて、面積はおよそ 600 m²、今回の縄文期遺跡の発掘場所である。やはり西側及び北西部に人工の石積みが残されている。この部分の傾斜は一般に 45° 前後である。

もともとこの山は、長峰（海拔 988.5 m）や能念寺山（同 702 m）から続く山稜で、地形的にも地質的にも同じものである。県道の開通によって断ち切られた格好が、独立した地形のように見えるに過ぎない。

これらの平坦面は会田川の浸食によるものであるが、その形成については後で述べる。

第2節 地質と層序

城山公園の台地は、第三紀層の黒色泥岩と砂岩疊岩、更にこれを覆う河床礫から成り立っている。

1. 黒色泥岩層

城山公園の台地の基盤をつくっている岩石で、公園入口や寄せ尾根・切り通し等に見られるものである。

この岩石は有機物に富み、風化作用を受けるとかっ色か灰色に変わる。表面に酸化鉄の皮膜がつくと赤かっ色となりやすい。この岩石の地層は一般に割目が多いので、角ばった小塊になり崩れやすい。植生を欠くと、はげ山になったり、崖錐状の地形をつくりやすい。また公園入口や切り通しでは、黒色泥岩層中に岩脈状の砂岩が発達している。粗粒・中粒の硬い砂岩で、層厚は 80 cm 内外で走向に規則性がない。恐らく黒色泥岩生成後の割目に入ったものであろう。また砂岩と互層する泥岩中には砂岩の团塊が入ることもある。化石として軟体動物・魚鱗（りん）・有孔虫が豊富であるが、切り通しでは Cyclammina などの有孔虫が、田中邦雄・関全寿氏によって報告（松本市北方の第三紀層 1966）されている。

2. 砂質疊岩層

次に台地の北東端、稻荷社の下には会田川に臨んで、砂岩疊岩層（層厚 1.5 m）の露出が見られる。砂岩・疊岩・泥岩の互層に見えるが、疊岩はレンズ状あるいは團塊状で、古生層起源のチャート・硬砂岩・粘板岩からなる、大きさ 1 ~ 5 cm の円礫を含んでいる。砂岩は硬く粗粒で、石英・チャート・安山岩・泥岩の小片を含み、淡かっ色や灰白色である。泥岩は部分的にはさまれた恰好である。この地層は会田川によっていったん切られ、黒色泥岩層と同様に対岸に再び姿を現す。

3. 黒色泥岩層と砂岩疊岩層の層序

黒色泥岩層と砂岩疊岩層ともこの台地にあっては、走向 N-S。傾斜 80° ~ 90° で、ほとんど地層は直立した状態を示している。両層は前者を下層とし、互に整合関係にある。

この両層は前に述べたように、いずれも第三紀層に属し、田中・関氏（前掲）によって次のように時代区分されている地層である。すなわち黒色泥岩層は別所累層（田沢黒色泥岩層）、砂岩疊岩層は別所累層に統く青木累層の最下部層（白牧砂岩疊岩層）に層し、整合関係にあるとされている。

時代	部	層名	層厚	岩相
第三紀	青木累層	北山砂質泥岩 砂岩互層	820m	暗灰色泥岩と砂岩の互層。泥岩には円礫が含まれているのが特徴であり、軟体動物の化石を多く産する。乱堆積が多い。
		白牧砂岩礫石 層	260m	黒色泥岩から漸移する円礫を含んだ砂質泥岩の薄層を経て粗粒の砂岩や礫岩になる。
	別所累層	田沢黒色泥岩 層	980m	黒色泥岩が主体、下部は火山拠出物を含み、上部は岩脈状砂岩が発達し砂岩との互層が優勢になる。軟体動物・魚鱗・有孔虫の化石が豊富である。
	内村累層	刈谷原凝灰質 砂岩層	420m	粗粒砂岩を主とし、裏灰角礫岩をはさむ。上部は砂岩泥岩の類互層から火山礫岩または泥岩に変化する。

第1表 層序表

(田中邦雄・関全寿 松本市北方の第三紀層 1966より)

4. 河床礫層

二段の平坦面には、薄い表土の下に前記の基盤岩層を覆った1~2mの河床礫層がある。場所によつては2.5mに及ぶところもある。上段面では1m以内の薄い堆積で、ほとんど表土を欠く状態で存在する。下段面では表土が上段面に近い程厚く、縁辺部薄いので、縄文期遺跡の敷石や積み石との境界が不明となっている。一般に今回発掘した場所は、表土30cm、遺物・住居跡の出土塔30~60cm、その下は河床礫層に移行している。河床礫層は基盤岩層との関係が不整合であるから、ある時階に会田川によって段丘面として、浸食形成されその上に堆積したと考えられる。

河床礫の種類は、安山岩・玢岩・砂岩・礫岩・花崗岩・指頭大の古生層起源の円礫(チャート珪質岩・硬砂岩・粘板岩等)である。

礫の大きさは、指頭大の古生層起源の円礫の外は、5×5cm~40×80cmで、中心は5×5cm, 10×10cmの亜円礫~亜角礫である。いずれも会田川によって運ばれたもので、上流の地層の岩石と一致している。

安山岩の礫

内村累層に存在するガラス質安山岩で、斑晶が少なく黒色あるいは青色をしている。ち密堅硬なので、明科町の人びとはかな石と呼んでいる。河床礫としては大きい方に属する。

玢岩の礫

(1)内村累層を貫く戸谷峯型と呼ばれるもので、普通輝石・普通角閃石からなる細粒の閃綠岩質の岩石である。

(2)青木累層・別所累層を貫くもので、斜長石・普通輝石・普通角閃石からなり、斑状組織がはっきりしている。

(1)・(2)の砂石とも礫としては、比較的扁平な亜円礫として存在する。安山岩礫とともに遺跡の炉石や、小さいものは敷石のつめに使用されている。

砂岩の礫

第三紀層に属するもので、黄かっ色・中粒～粗粒な砂岩である。石英・斜長石・チャート・安山岩・泥岩の小片を含む。河床礫中で最も軟らかい岩石で、遺跡では敷石として、また一部炉石として使用されている。

花崗岩の礫

古生層起源のもので、上流の山地にかつて運ばれたものが、再び会田川によって移動させられたものである。 $10 \times 10 \sim 80 \times 80$ などわずかであるが、礫層中に散在する。

礫岩の礫

珪質な礫岩は数が少ない。内部にチャート・硬砂岩・粘板岩等からなる亜角～亜円礫を含んでいる。

古生層起源の小円礫

チャート・珪質岩・硬砂岩・粘板岩等の指頭大の円礫で、かつて飛驒山脈の古生層から運ばれ、海岸で洗われたものが、第三紀層中に礫岩として取りこまれたものである。後にこの礫岩がくずれて、再び円礫として河床礫中に入ったものである。遺跡中でも時々発見される。

第3節 地質構造

城山公園の台地は、長峰・能念寺山の山稜の一支脈であり、地形的にも地質的にも同じ構造をもっていることは前に述べた。

この山稜は松本市城山から光城山・長峰と連なるもので、山頂の海拔 $800 \sim 900\text{m}$ は一般に平坦な地形を示している。またその西側は、奈良井川断層による断崖をもって松本盆地に臨み、崖下には崖錐状の地形が顕著である。

地質は第三紀層（中新世）に属し、南から内村累層・別所累層・青木累層と呼ばれる層序の堆積をなしている。これらの累層の走向は、 $N-S \sim N 20^\circ W \sim N 20^\circ E$ などを示し一般に南北性である。傾斜は一般に東傾斜で、 60° を越えることが多く、特に岸川擾乱帯に入る明科町周辺では、 80° を越えて直立するなど、極めて複雑な構造となっている。

城山公園の台地は、前に述べたように別所累層の黒色泥岩がほとんどで、極めてわずか青木累層の砂岩礫岩を載せている。しかし地質図に記載したように、走向N-S・傾斜80°から直立の状態であるから、載っているというよりも平行に立っているといえる。もともと水平層として堆積したものが直立した状態となることは、極めて大きな変動が記録されたことを現わしている。すなわちこの台地は、犀川擾乱帯内にあって、奈良井川断層・中山断層・明科-宇留賀断層・施行田断層等の断層活動や、恋道向斜・吐中背斜等の褶曲運動の影響を強く受けているといえる。（田中・関 前掲）

この堆積層は堆積後褶曲運動により陸化し、更に第三紀末から洪積世初期にかけての多くの断層活動のため、複雑な構造をもつ地形となった。この断層活動は今日にもつながっている。また第三紀末には準平原化作用を受けたので、山頂に平坦な地形面とケスター地形を残した。現在海拔800~900mに残されている平坦面である。一方松本盆地の構造運動は、河川による堆積と浸食の復活をおこし、河岸段丘を形成することになった。

城山公園の台地も同じ経過をたどったもので、比高20~25mは犀川や会田川との、相対的な隆起浸食の量の結果と考えられる。

第4節 地形の形成

明科町周辺には、高位段丘面や河岸段丘など多くの地形面が見られる。城山公園の台地も段丘面の一つであるから、これらの地形面の成り立ちやその時期を調べることは、城山公園の段丘面の成り立ちを知ることになる。そのためには、(1)段丘面の対比(海拔高度・比高)、(2)開析の程度、(3)堆積物の状況(種類・厚さ・岩相・風化程度)、(4)特定の時代や環境を示す物質等を調べる必要がある。特に(4)は、 C^{14} による年代測定、火山噴出物(火山灰・泥流など)を用いての繊年を行う方法(テフロクロノジー)によって、絶対年代を知ることができる。

明科町周辺や会田川流域は、残念なことに松本盆地南部・飛騨山脈の山麓・大町周辺にあるかっ色火山灰層(ローム層)を欠いている地域である。しかし極めて貴重なことは吐中の吐中層が、その出土物の C^{14} による年代測定の結果が報告されていることである。また段丘堆植物は、露出が不十分であったり、犀川・会田川など異なる影響の堆植物であるため、その対比がむずかしい。従っていきおい地形面の対比が重点にならざるを得ない。

1. 高位段丘

これらの条件によって、明科町周辺の段丘面を整理すると、大きく高位段丘面(氷期に対比される高位段丘面でない。高位置にある段丘面の意味である。むしろ氷期に対しては低位段丘面となる。)と河岸段丘面に分けられる。これらの段丘面が最も模式的に発達しているのは、犀川右岸の生坂村上生坂と左岸の草尾である。平林照雄氏は右岸の段丘面を5段とし、上位1(比高150~200m)、2(比高100m)段丘面を洪積世の形成としている。(「北安曇谷自然誌」1971)上生坂の万平や草尾上野上位面は高位段丘面に当り、いずれも現河床からの比高150mを越え、河床礫を載せている。草尾上野の上位面はローム層に覆われていて、洪積世のものと考えられる。以下、上生坂には細かく

みると7段の段丘面が見られ、比高を異にしているとともに、形式の時期を示している。

また中山山地の南端に当る明科町七貴の押野山（海拔695m、サテライト局）東斜面・上野・塩川原の地籍に、数段の河床疊をもつ地形面が発達していて、旧河床疊・洪積層と報告されている。（本間不二男・信濃中部地質誌及び地質図。1981、平林照雄・北安巻誌自然篇地質図。1971）その最上部は万平・草尾上位面に相当するものと考えられる。犀川右岸の能念寺山（海拔702m）には犀川の河床疊がみられ、これも同様の高位段丘面である。今筆者の調査と合わせてこれらの状況を整理してみると、次の表のようになると考えられる。

1 高 位 段 丘 面 2	海 抬 1 2	比高（現河床より）	
		1	2
犀川左岸			m
たなんてら（日岐）	699.2 (680~700)	180	
七貴上野①	600~620 650~680		140 185~165
七貴上野②	680~650		115~185
犀川右岸			
上生坂万平	640	170~180	
上生坂②	600		140
明賀	650~700	150~200	
能念寺山	680~700	165~185	
会田川			
吐 中	570~600	70~80	
清 水	680~680		90~140
出 水	700~750	180~180	
齊田原	700~780	120~150	

第2表 高位段丘面の対比

※ 塩川原上位面の最上段は高位段丘面に入ると考えられる。

※ 高位段丘は氷期に対比される高位、中位、低位ではなく、高位置にあるという意味。

2. 河床段丘

平林氏の第3・4・5段丘に当たるもので、平林氏は第5は比高20m・傾斜は現河床にほとんどおなじであり、第4は比高30~40m・傾斜は現河床より小さい。いずれも現河床に平行に形成されたものである。第3は比高70m、現河床に沿って閉塞曲流の河谷の分布と異なると述べている。平

(平林照雄・前掲 1971)

以下筆者の明科周辺の観察と合わせてみたのが次の表である。

犀川流域

段丘面	海拔	現河床よりの比高	段丘面の発達した地域	平林
4	520 m ~580	m 4~6~8	(左岸)下押野、荒井、荻原、中村 (右岸)明科	
8	580 ~550	20	(左岸)七貴上野(5)、塙川原下、神谷、小泉下。(草尾) (右岸)塔ノ原下(小中学校のる面)、下生野下、 上生坂(5)、原	5
2	540 ~600	80~40	(左岸)七貴上野(4)、木戸橋西の残丘、中村公園、小泉中 (右岸)塔ノ原上(崖錐被覆)、城山公園、下生野上、 上生坂(4)	4
1	540 ~620	70	(左岸)七貴上野(3)、塙川原上の(2)、笛原、小泉上、 (草尾上野下)、上生坂(3) (右岸)	3
			高位段丘面	2 1

第3表 河岸段丘面の対比

会田川流域

段丘面	海拔	現河床よりの比高	段丘面の発達した地域
4	520 m ~580	4 m	明科、潮
8	580 ~540	8	施行田の集落、ごみ焼却場、施行田東南、577 m高地下
2	540 ~550	12~82	城山公園、施行田南の残丘、東の段丘、ごみ焼却場上、吐中街道下、 577 m高地中
(2)	570 ~680	70 ~140	(高位段丘面)吐中、清水、577 m高地上(地形面)
(1)	680 ~780	100 ~150	能念寺山、出水、齊田原

3. 地形面の形成

前に述べたように資料の条件が不十分のため、結論的なことは出しにくいが、以上の観察や考察により、地形面の形成と対比について概観したい。まず第三紀層の堆積(中新世)後、地殻変動により隆起し山地が形成された。(飛騨山地など古生層の山地はすべて存在していた。)ついで第三紀末の

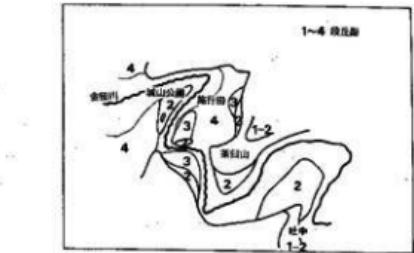
準平原化作用により準平原面ができた。東山山地の800～900mの平坦面はこの時の準平原面で、虚空巖山、大峯山は硬いために残ったケスタ地形である。

準平原面形成後（第三紀末～洪積世初期）の造構造運動が、フォツサマグナ西縁の地溝的構造に大きな変動を及ぼし、断層活動の復活により松本盆地の形成となった。山地は隆起し地溝は沈降した。（相対的隆起ともいわれている）隆起した山地から沈降した地溝へ、平衡に達するまで砂礫を堆積した。旧層状地疊層である。これは松本盆地の砂疊層の堆積の基礎をなすものである。断層崖下の扇状地は、特に犀川・高瀬川によって発達した。今日、高位置にある段丘の疊層はこれに属する。先にあげた能念寺・押野山周辺・万平・草尾上野上位面・日岐のたなんてら・吐中・清水・齊田原はこれに当る。

引き続く飛騨山脈や中信山地の隆起、断層活動は、旧層状地疊層（洪積層状地）を覆ったり、浸食の復活は側方浸食から下流浸食に移り、開析して段丘面と段丘崖を発達させることになった。これが前に述べた河岸段丘である。この前後に火山噴出物（火山灰）の降下があって、広く扇状地層を覆った。これがローム層である。ローム層の堆積の有無は年代決定の鍵である。ローム層の堆積後も、断層活動は引き続いたものと見られ、更に新扇状を堆積する一方、先の扇状地を開析し幾段かの河岸段丘を形成していく。これが今日みる沖積扇状地や沖積段丘面である。前に掲げた犀川流域の第1・2・3・4、会田川流域の第2・3・4がこの段丘面である。

4. 城山公園の地形図

能念寺面の河床疊は犀川のもので、城山公園のものは会田川のものであることは前に述べた。また城山公園面の形成時は第2段丘面に当たるよう解釈した。これを更に会田川下流の地形面に対比してみると第2図のようになる。すなわち、能念寺面の河床疊はローム層に覆われていないが、すでに押野山周辺の面（七貴上野1～2）、万平面・たなんてら面・草尾上野上位面に対比されている。押野山周辺面はすでに平林氏により、大町周辺の中島面に対比されていて、ローム層堆積前の面とされている。



第2図 会田川の河岸段丘面 (1:20,000)

また草尾上野面にはロームがあることにより、その年代が推定される。このロームに対比される押川扇状地の波田ロームの年代がB-P27800±1800され、その下限はおよそ洪積世と沖積世の境界近くと推定されているのが参考になる。

吐中層はすでに小林国夫氏により、その出土物のC¹⁴による年代測定がなされ、B-P15750±390となっている。ベニヤ疊・木片やオオツノジカ・コメツガ・ヒメバラモミ・トウヒ・チ・ウセ

ンゴヨウなどの化石により、ウルム氷期の低位段丘に対比されている。(針葉樹林層・寒冷期の気候)

清水・出水・齊田原等の高位段丘面と城山公園面が属する第2段丘面との比高は50~70m、第2と第3、第3と第4段丘面との比高はそれぞれ10m内外、10~20mであって、高位段丘面と第2段丘面間の浸食量は大きい。高位段丘面と現河床までは、上流でおよそ90~150m、下流でおよそ168~180mである。また第二段丘以下の段丘面は、会田川の曲流に対して平行した形で存在することが観察されるところから、高位段丘面と成立時期や性格を異にしていると考えられる。第2・3・4の段丘は、城山公園で見られるように、いずれも基盤に2m程度のベニヤの礫層を載せてゐるに過ぎない。従って会田川の河岸段丘に対する働きは、浸食段丘の性格を帯びていたものと考えられる。吐中層の河床礫は一般に小さいが、下位の段丘の河床礫は現河床と大差がない。下位の段丘の浸食傾向は同じものと考えられる。

現河床の平均傾斜は $\frac{1}{1000}$ (下流域 $\frac{8}{1000}$)である。高瀬川 $\frac{8}{1000}$ (最下流部)、犀川 $\frac{2}{1000}$ (明科周辺 $\frac{1}{1000}$)に比較すると急域であることには違いない。ただ先行河性のある会田川は、曲流をしながら硬軟の岩層を浸食しているので、遷移(遷急)点をつくり、また移動させることによって、浸食を続けているものと思われる。もちろん洪積世初期からはじまる東山山地の隆起と、犀川流域の沈降との相対的運動や、犀川の河床低下による浸食の復活はその影響を無視できない。

城山公園の地形は、こうした曲流の側方浸食や、河流の移動によって、二段の段丘面をつくった。河流(曲流)の移動は北東方向に進んだことが地形面の傾斜から知ることができる。浸食段丘(岩石段丘)の性格をもった河川は、薄い砂礫の層を堆積した。下方浸食の復活は、段丘崖をつくり、更にその曲流はこの段丘崖を攻撃斜面とすることにより、今日の20mに及ぶ断崖を東南~北~北西へ形成した。西側のものについては犀川の影響を考慮にいれる必要があろう。

この段丘面の形成時期は、鍵層となるものがないので、専ら段丘面の対比によらざるを得ない。前に掲げた段丘面の対比表の犀川の第2・3・4面と、会田川の第2・3・4面とは必ずしも一致しない。会田川の第3は下流では犀川の第4に近く、また会田川の第2も場所によって、犀川の第3に近いようにも観察される。城山公園面は、こうした接近した存在のように考えられる。ただ会田川の河岸段丘の形成状況よりみると、第2に属させた方がよいと考えられる。塔ノ原面は広く崖壁に覆われているので、基盤や礫層を確かめられないが、まわりに上位面が存在するとすれば、城山公園と対比が可能になるであろう。

次に段丘面の形成時期であるが、塔ノ原面と対比される犀川左岸の七貴上野面(5)や塩川原下位面は、高瀬川段丘の館ノ内面に対比されている。この関係が許されるならば、館ノ内面は犀川段丘の上海渡に相当するとされているので、形成は沖積世初期の面と考えられる。従って城山公園面の形成は、上海渡面を少しきかのぼる時点に求められることになる。その年代は吐中層のB-P15750±1800を考慮にいれて、一万年前のころと考えるのが現在の段階である。木戸橋西や中村公園の残丘も同様に取り扱えるであろう。上下二段の面は、河流の移動によるものか、構造運動によるものか、いずれかであるが、多分直接的には前者であろう。二面の間に長い時間的間隔はないと思われる。

第5節 遺跡の石

1. 縄文期遺跡の石

遺跡に使用されている石は、ほとんど河床疊である。現河床の疊や基盤を覆っている河床疊層の疊（亜角疊～亜円疊）と、種類・大きさ・割り合いもほとんど同じである。その起源は会田川流域である。安山岩・玢岩は一般に硬く大きいので、炉石に使用されているが、小さいものは詰め石に使用している。玢岩の扁平なものは敷石に利用されている。砂岩（第三紀層）は敷石に使用されている。その扁平なものは、直接地層からいだものか、河床のものを利用したのであろう。また炉石に詰められているものもある。その他、花崗岩・古生層起源の小疊は、補助的な詰め石に利用されている。石の種類の割り合いは、安山岩・玢岩が $\frac{2}{3}$ に対し、他の岩石は $\frac{1}{3}$ に過ぎない。これらの石はいずれも容易に手に入るもので、会田川の河床や段丘崖の疊層に求めたと思われる。ただ石斧の緑色凝灰岩や矢じりのチャート、黒曜石、特殊な対象物と見られる輝緑凝灰岩の物体は、この付近にない岩石である。

2. 城跡の石

石がきに利用されている石は、安山岩・玢岩が $\frac{2}{3}$ を占め、残り $\frac{1}{3}$ が花崗岩・砂岩・珪質疊岩である。いずれも会田川の現河床や段丘面の河床疊層で見られるものである。大きさは $40 \times 30 \text{ cm}$ 程度で、現河床・河床疊層にあるいずれも最大のものと同じである。従ってこれらの石は付近で集められたものであろう。

まとめ

以上を総括すると、次のようにまとめることができよう。

1. 城山公園の台地は、長峰から続く山稜の一部で、地形・地質上同じである。
2. 基盤は第三紀中新世の別所累層に属する黒色泥岩で、ほとんど直立した層をなしている。走向 N-S。
3. 基盤を覆った河床疊層は基盤と不整合の関係にある。
4. 台地は一部のやせ尾根の外に広い二段の平坦面をもっている。
5. この平坦面は会田川が犀川の合流点（出口）につくった、浸食段丘（岩石段丘）である。
6. この段丘面の形成時期は、犀川の河岸段丘や会田川の浸食段丘との対比や形成状況から見て、犀川段丘の上海段面を少しきかのぼるであろう。
7. 縄文期遺跡は、表土が一般に薄いので、段丘面の河床疊に直接接している場所と、表土の一部を間においている場所がある。
8. 縄文期遺跡に使用されている石は、会田川流域のもので、城山公園面の河床疊、現河床に存在するものである。

種類は安山岩・玢岩・砂岩・花崗岩・疊岩の亜角疊～亜円疊と古生層起源の小円疊である。種類・大きさ・割り合いとも同じであるので、近くのものを利用したと考えられる。

9. 城は浸食段丘の平坦面と段丘崖を巧みに利用したものである。石垣に利用されている石は8と同様で、河床疊中で硬く大きい安山岩・玢岩を主とし、砂岩・花崗岩・珪質疊岩の $40 \times 80\text{cm}$ 大である。利用の割合は安山岩・玢岩が $\frac{2}{3}$ を占める。
10. 河流は、繩文期においては現河床より高く利用しやすい位置にあったと思われるが、城の時代には今日と大差はなかったであろう。

文 献

1. 「東筑摩郡松本市誌自然編」 1957
「南安曇郡誌自然編」 1956
「北安曇誌自然編」 1971
2. 田中邦雄・関全寿「松本市北方の第三紀層」 1966
3. 田中邦雄・平林照雄「犀川流域の地質」 1964
・関全寿氏(明科町出身丘中学校教諭)からは貴重な意見と指導をいただいた。

(太田守夫)

第3章 考古学的調査

第1節 遺跡の環境

1. 自然環境

この件については、自然班を分担した太田守夫委員が地形・地質を中心に詳説しているので、これにゆずるが、なお、その他の点について若干附記する。すなわち植生の関係である。台地上の平坦部、縄文時代から人々の居住した地帯は余り高くなく、平地面から比高30m余の地で、縄文人の住居にも防風上好適の地であるので、すでに小規模ながら集落として開かれたと推定できる。その頃特別な植生はなかったであろうが、台地の後辺はどのようであつたであろうか。台地上にはローム層の堆積はみられず、したがって早く植物は繁茂したであろうか。地域の狭小さから、余り大した林叢はなかったであろう。

中世となってからのものとして注意すべきは、台地の東部面会田川面のクマザサと西部面断崖部のクマザサである。これは中世城郭に多くみられるもので、壁をよじ登る敵兵を防ぐに。また北面断崖にはフジの繁茂をみ、台上の南部主郭の北にあたって、ヤダケ・ハチクの植生を見る。その他櫻・梅・スルデ・栗・胡桃などがみられるが、これはすべて台地の縁辺と断崖を主とし、松が台地上にはない。要するにこの地方における通常の植生であるとみられる。桜(ソメイヨシノ)の木が植えられたのは現代のことであり(公園となってから)、副郭部の平面が桜園となったのも明治以降現代のことである。

この台地が会田川の屈曲した流れに近く、また犀川の合流点に近いことは、平素において魚類をとることができる上に、鮭・鱒の産卵期には、犀川という大河の支流であるため、多くの魚群がこれをさかのぼり、その捕獲には便利であったであろう。鹿・猿・猪等の野獸も多く棲んでいたことは、遺跡地上流の大足部落出土の猪の頭部の骨、井戸遺跡出土の多くの獸骨片、近くはこの台地北岸の明北小学校々地から猪・鹿の骨を縄文中期の土器と伴出し。今次調査においても、第4号敷石仕居跡から鹿骨を伴出したことでもわかる。この遺跡周辺の長峯山中及び町内、四賀村の山々は700m以下の浅い山々で、現在も各所々に中世末以来の集落を残しているが、これらの地帯には、櫻・梅・胡桃・栗等の果実をもつ自然林を今も残してあり、この林野中は棲息する野獸・山禽も多いので、食料採取の面でも好適な地であったのであろう。今次調査中にも、連日川辺には白鷺の姿をみ、東部川沿いの断崖面からは雉子の鳴き声、山鳩の姿を見聞きしている。

なお気候的にもこの会田川々口の地は無風温和な地で、松本平北部の寒風も前後の山によって防がれ、午後の西陽も長くさし、また西方の眺望もよいため、古代から中世に通じて人々の住居するため

の適地と考えられる。

水の問題は、河辺に下れば足り、また西麓の寺堂近く湧水の井戸もあって、不便はない。



第3図 明科町遺跡分布図 (1 : 50,000)

1. 上手屋敷(縄～中世)
2. 上郷(縄)
3. 上郷古墳
4. 石堂(明科廃寺址)
5. 栄町(工師)
6. 能念寺古墳
7. 城山
8. 大足ふす平古墳(2基)
9. お經塚古墳
10. 金山塚古墳
11. 塩田若宮(縄)
12. 大久保(工師)
13. 上手屋敷古墳
14. 城平(縄)
15. みどりヶ丘(亦)
16. 伊勢宮(縄)
17. 荒井(縄)
18. 宮原(窯)
19. 宮の前(縄)
20. 中村京塚(縄)
21. 北竹原(縄 工師)
22. 薩海道(縄 工師)
23. 井刈(縄)
- A. 吐中(化石出土地)

2. 歴史的環境

歴史的には、この地をめぐって多くの遺跡が分布している。

まず最も古いものとして、明科町吐中（大足部落）の吐中遺跡からは洪積期のオオツノシカの化石出土地があり、上流約1.5kmの井戸遺跡（縄文中期末～後期の集石遺跡）。明科町東川手の塩田若宮遺跡（縄文中期）、明科町塔ノ原の上手屋敷遺跡（縄文前期～中期）、明科町塩川原の塩河原遺跡（弥生中期）。古代のものとして、明科町大足の「ス平古墳」（2基）、明科町明科の能念寺山古墳、明科町東川手潮の金山塚古墳。明科町明科の明科廃寺跡等があり、中世遺跡としては前出塔ノ原城跡、塔ノ原氏居館跡を中心に、生板谷、四賀村五常方面に対し山城、小堀の跡か遺構・地名として多く残っているが、これを略す。

明治初年までこの地域は明科村有とみられるが、のち個人有となり、昭和初年には公園として桜を植え、四阿屋・児童遊園地としてにり台など設けられている。その間、養蚕の好況時以後は桑園がいとなまれたが、今は全く放置されている。

台地上東北部の突端にある城山櫛荷は、社殿鳥居等を存し、今も信仰をつづけられているが、これはこの地に城館が置かれた頃から奉祀されたものと思われる。

いまこや山城、または城山公園と呼ばれるこの地は、大手（正面）を西において、虎の口を台地西北部に設け、これを経て副郭（二の丸）に入るよう小径がつくられているが、西面には、なお副郭（帯曲輪）の二条が台地の麓にあり、水田とされている。石垣はいわゆる鉢巻形で、台地の上線部近くに築かれているが、これは西面部と西北端の虎の口に残り、また主郭部の西部に一部残っている。この石垣は全くの河原の碑石をあげた粗雑な石垣であるが、注意して保護すべきものである。今墳調査の主体の副郭部は、別図の様に最も広く、ここに屋敷・倉庫その他の施設が置かれ、主郭部は狭少ながら、最高部にあるので、ここに望楼的な建物があったであろうが、ここは調査の対象とならなかった。しかし、数個の土台石状の平石が露出していることから、何らかの建造物があったことが想像される。副郭部には縁辺に土居が築かれただろうが、西面にのみこれをみる。これは発掘によってその心となる集石部の発見によってわかる。土居・石垣が一方に限られているのは、地形上の理由で、この方面のみが、防壁上断崖も浅く不備であるためである。他の山城に多い空濠はこの城砦には三条のみで、南方尾根続きの部分にあり、急峻なやせ尾根を割ってその痕跡は歴然と残っており、今後保存を要する。この空濠を通る小径はそのまま主郭の上に通じるが、これは中世以前は今のような県道ではなく、会田城からの古道はこの時点では川の北岸を通ったので、この道は本城塔ノ原城との連絡路、全くの軍用路であったのである。つまり、この城砦跡は、本城塔ノ原城の一支砦であるので、この支砦のあり方は、本城塔ノ原城、またこれを領した塔ノ原氏の研究に必要な城砦跡資料といえる。

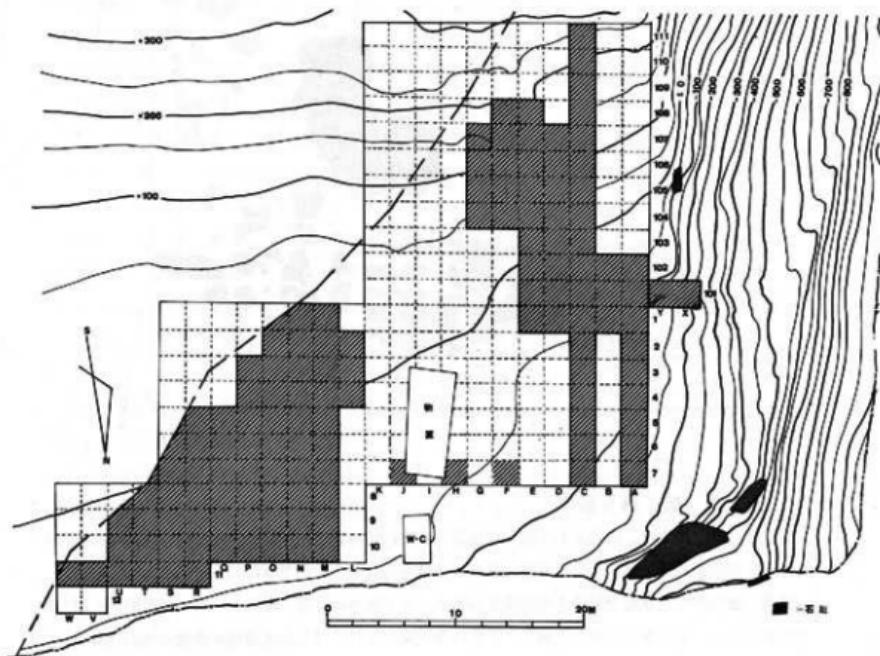


第4図 こや城址付近の城砦分布図 (1 : 75,000)

1. 光城 2. 上手屋敷 3. 塔ノ原城 4. こや城 5. 笹城 6. 笹城 7. 雨鳥屋城
 8. 佐々野城 9. 三峯(旭)城 10. 花見城 11. 高見砦 12. 押野城 13. 甚平山砦
 14. 狐城 15. 荻原(塩川原)城 16. 中村城 17. 田ノ入城 18. 東久保砦
 19. 川狭間城 20. 中野山城 21. 小池城 22. 高松薬師城 23. 猿か城 24. ねずみ砦
- (所在の明らかなもののみ示し、そのうち呼称のわかるもののみ番号を符した。)

戦国期松本小笠原長時の代に武田信玄の侵略にあい、小笠原代は松本を退転。塔ノ原氏は武田氏に本城を焼かれて降参し、これに属したが、天正10年(1582)小笠原貞慶が旧領を回復すると、また小笠原氏に復帰してその部将となり、当時の部将塔ノ原三河守は、生坂の丸山氏攻略にも加わっている。しかしながら、小笠原氏ににらまれ落城し城主は滅亡している。この時の戦争でこのこや山城も破却されたのである。塔ノ原氏の関係の遺跡としては、明科町塔ノ原の居館跡近く神寺の靈童寺があり、これが菩提寺とされ、また祈願寺との伝承のあるものに、四賀村五常の真福寺、明科町塔ノ原の法音寺、同大足清水の光久寺等があるが、信すべき記録資料はない。(原 嘉藤)

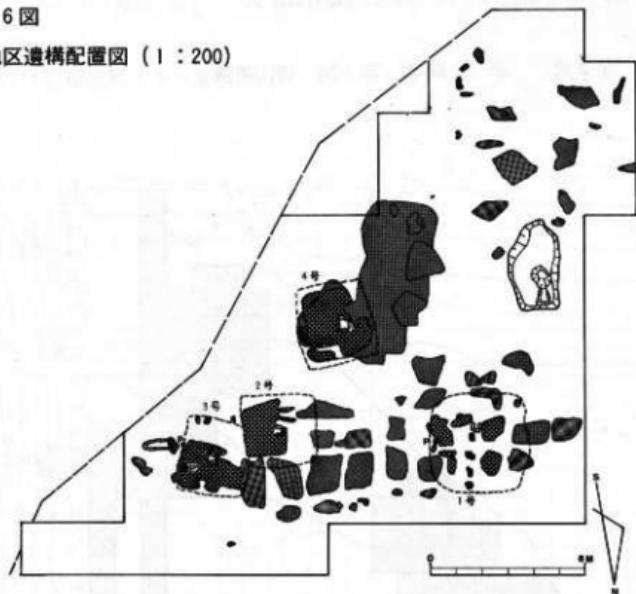
第2節 調査概要 第5図 城山遺跡グリッド設定図 (1:400)



今回の調査は、第5図に示すようにグリッドを設定した。丘陵上の西北側斜面頂上端部を限界として、一辺2mの方角単位で、東方へA～Wの各列を、南北に1～12、101～111の区に、計298区に細別し設定した。そして、調査の進行にあたっては、便宜的にL列とK列のセンターを中心として、それぞれ東地区、西地区とに大別した。以後、すべての記載方法は、これにそって表現する。以下、各地区的概要は次の通りである。

第6図

東地区遺構配置図 (1:200)



1. 東地区(第6図)

東地区的発掘調査は、原則として遺構の確認をもとに随時周辺部に拡張する方法で進行したわけであるが、調査範囲は、結果としてほぼ当地区の全域を行なうことができた。

遺構・遺物の出土状況と層序との関係をみると、まず層序は、第一層表土、第二層黒褐色土層(砂岩粒を含む)、第三層ベースへと続く。この内第一層からは、ほとんど遺構・遺物の検出はなかつたが、第二層では、今回出土の遺構・遺物のはほとんどを出土した包含層である。がしかし、柔の移植並びに抜根により、激しく攪乱されており、本来ならば分層できるであろう土層を、時期的に細分することは不可能であった。ただ、当層でも比較的下方に位置する敷石住居址群(縄文中期後半～末)の

壁面の立上り等を確認できなかったことを除けば、M～N-5～6で中世遺物を検出した不定形土括や、無遺物ではあったが、0～P-3で検出した土括などは、内部の黒褐色土層中に流山を示すものもあった。

次に、遺物の出土状態について述べるならば、全地区から縄文式土器は勿論、石器では、凹石、磨石、打製石斧、磨製石斧、石ビ、石棒、石錐、環状石斧にいたるまで多岐にわたって出土したが、これ等の遺物の全ては、当地区のほぼ全域にわたって分布する集石址、なかでも特に北側に集中する集石内に含有された形で出土している。この集石址については、縄文式時代中期後半～末の遺物のほかに縄文式時代早期の橢円形押型文土器片一点（N-3）や弥生時代の磨製石包丁片一点（P-5）、そして若干ではあるが、各グリッドより須恵器、土師器、内耳土器、天目茶碗、灰釉陶器等の破片ではあるが比較的新しい遺物を含有している。従って、憶測ではあるが、こやの城郭を構築する際に排出した瓦礫を東地区でも、特に北側に廃棄したものと思われる。そして後に、桑の移植抜根により碁盤目状に変化したものであろう。この事は、集石址の様相が、至極自然的であることからも認めることができる。

さて次に遺構について記すと、住居址では、縄文中期後半～末の堅穴式敷石住居址4軒を確認した。以下簡単に列記すると、

1号住、N～O-8～10、敷石、方形プラン（？）、方形石畳炉、埋甕。

2号住、R～S-8～9、敷石、方形プラン、方形石畳炉。

3号住、S～T-8～9、敷石、方形プラン、方形石畳炉、埋甕2個体。

4号住、Q～R-6～7、敷石隅丸方形プラン、方形石畳炉、四端立石、骨片、焼土多数含有である。その他の遺構としては、層序で記した不定形ピットの他には遺構として明確に把握できるものは存在しなかった。

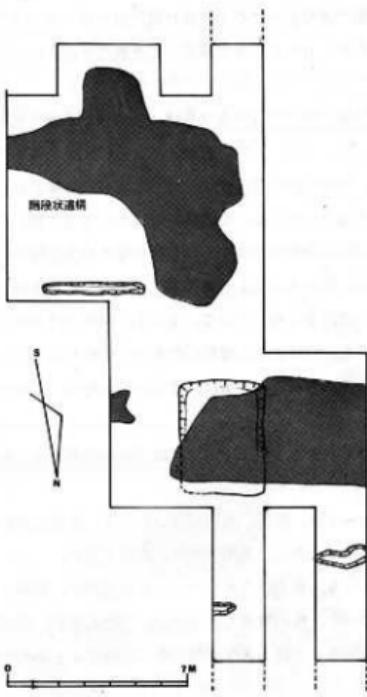
以上東地区を総括すれば、1つは、集石址の存在性、2つに、各敷石住居の敷石の石質の相異性ならびに4号住の立石の性格に代表されるであろう。

まず、集石址の存在性については、前記の通り、ほぼ、城郭構築の結果として北側に集中し、後に変化したことは、ほぼ正しいであろう。

次の各住居に使用された敷石の相異性については、1～3号住までは、砂岩性の板石を使用している。中でも2号住は各敷石のすき間を小石により非常に丁寧なメバリをほどこし整形している。これに対して4号住では、人類大の扁平な河原石を使用している。なおかつ、四端立石の遺構を有することは、他の住居址（1・3号住）の埋甕遺構に相対する宗教的因素を表現したものと思われる。

2. 西 地 区（第7図）

西地区は、東地区と同様の調査方法に基づき作業を進めた。当地区の主たる目的としては、まず第1に、西側斜面の頂端部付近に点在する石垣の存在より、小谷城址に関係する遺構の検出を期待し、第2に、東地区検出の東西方向にのびる住居址群の限界の確認にあたった。



第7図 西地区遺構配置図 (1:200)

まず、調査はA・C～1～7を試掘し、A・C-1周囲に東地区と同様な集石を確認した(梯状遺構)。南側に隨時グリッドを拡張し、ほぼ集石の範囲確認を行なった。結果として南北方向に伸びることを認めた。(階段状遺構) また住居址群のづみりについては、F・H・J-7を試掘したが、確認には至らなかった。

まず初めに遺構、遺物の出土状況と層序との関係をみると、大別して、第1層表土(黄褐色土層)、第2層(茶褐色土層、黒褐色土層を含む)、第3層ベースへと続くが、部分的に第2層と第3層の間で東地区に積存する黒褐色土層を認めた。(E-107)。このうち、第1層内からは、遺構、遺物の検出ではなく、第2層に於てその大半を検出したことは、土質の相違を除けば、東地区とまったく同様の結果であった。ただここに於て、前述したE-107に見る第3層の黒褐色土層が東地区の第2層に見れる(部分的)ことは、当遺跡の土層堆積が東地区的第2層に始まり、その後西地区を中心になった。

従ってこの第3層は東西両地区で縄文以降の堆積であろう。

次に、遺物の出土状態について述べるならば、東地区とはほぼ同様に、当地区の南側中心に広がる集石内より、縄文期、と中世の遺物を同一レベル上にて検出した。主なものには、石皿、打製石斧が多く、加えて灰釉・内耳、須恵器の各土器片がめだつ。その他では、C-101～102にかけての集石精査中に、内部より多量の麦状炭化物を石臼半個体分と共に検出した。またA-102の第2層中より土偶の胴体部を検出した。

次に遺構の出土状態であるが、当地区では溝状遺構、階段状遺構、方形賢穴遺構が検出された。まず溝状遺構であるが、A～D-1～101の表土を排除した段階で巾4mで東西に広がる集石を確認した。掘り下げの結果、遺構上面より10cm～20cm深さで東より西に流れを示す溝跡であった。この遺構は、上面及び内部に多数の小石、礫石を含み、若干の石器、土器を包含していた。またこの溝跡と西側斜面に現存する凹状地形としての小沢との関係を知る為に、X～Y-101～102を掘り下げた結果、底面に黒色土の堆積が見られたが、排水用の溝の可能性がある。なまこの集石の掘り下げ中、C～D-1～102にかけて、長辺4.5m、短辺3.3mの長方形落ち込みを検出した。内部より木質炭化物2片（長さ45cm、巾15cm、長さ150cm、巾45cm）と麦状炭化物を検出した。時期としては、内部より内耳土器片の出土より、溝状遺構の一部と思われる。

階段状遺構は、C～G-104～108に集中した小石より人頭大までの石が集まった遺構である。この遺構の特色としては、第1に階段状であり、第2に南より北に下向し、第3に階段を構成する石材の多色である。まず1については、大きく6段構成であるが、全体的にくずれ状にして北側で部分的に不規則に散在する。2については、本丸と二ノ丸とを結ぶ通路的用途に供したものであろう。また3については、城山集落に不歸に存在する石材を使用し、石器、土器等の遺物も、階段の構成をなすけている。

以上、これ等3つの要素を総括すると、少なくとも小谷城に関連する遺構であると断定してよいであろうが、直北の溝状遺構との関連性は、今一つ不明である。

さて最後に三条の小溝状遺構であるが、A-1～2、C-3～4、E～G-104に於いて検出されたが、それぞれ第2層を掘り込んでいる。しかし、時期及び用途等は不明であった。

（小山繁夫）

第3節 遺構及び遺物

1. 縄文時代の遺構

第1号住居址（第8回）

本址は道路の北辺に位置し、規模、プランとも明確ではないが、第三紀層の板状砂岩を敷きつめた敷石住居址である。

敷石の範囲は東西約3m、南北約3.5mの方形に近い形を示しているが、プランははっきりしないながらも、住居址全面に敷石がしきつめられていたとは思えない。周壁は床面が表土より約

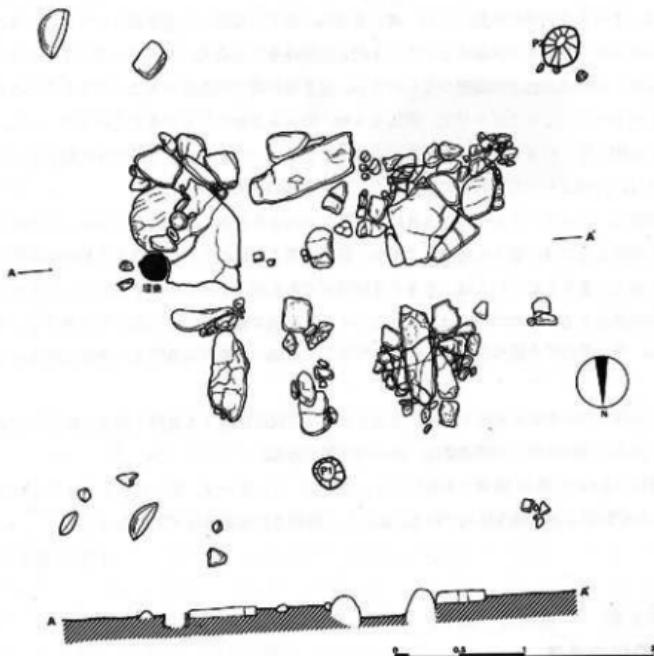
5cmと浅いこともあり検出されなかった。

敷石住宅地内にはP.1(径25cm, 深さ16cm), P.2(径30cm, 深さ15cm)の2つのピットがみられた。炉址は石開炉で、北側部分の石のみが抜き取られ、西側の炉石は石皿の残欠品を使用している。炉床までの深さは約23cmあり、焼土は余り顯著でない。炉石には安山岩を使用している。

床面はやや東に傾斜しており、その敷石東端に埋甕(第11図、1)がある。埋甕設置にあたっては、敷石の第三紀層砂岩を埋甕の口縁に合わせて削り取り、胴の張った形態の埋甕がすっぽりと納まるようになされていた。床面からは石錐、石鏟、スクレバー、凹石等が出土している。

なお覆土中よりは縄文中期終末に位置する土器片および石器が出土している。

(神沢昌二郎)



第8図 第1号住居址 (1:40)

第2号住居址

本地は第1号住居址より東へ5m程離れた位置にあり、また第3号住居址の南西側と接している。

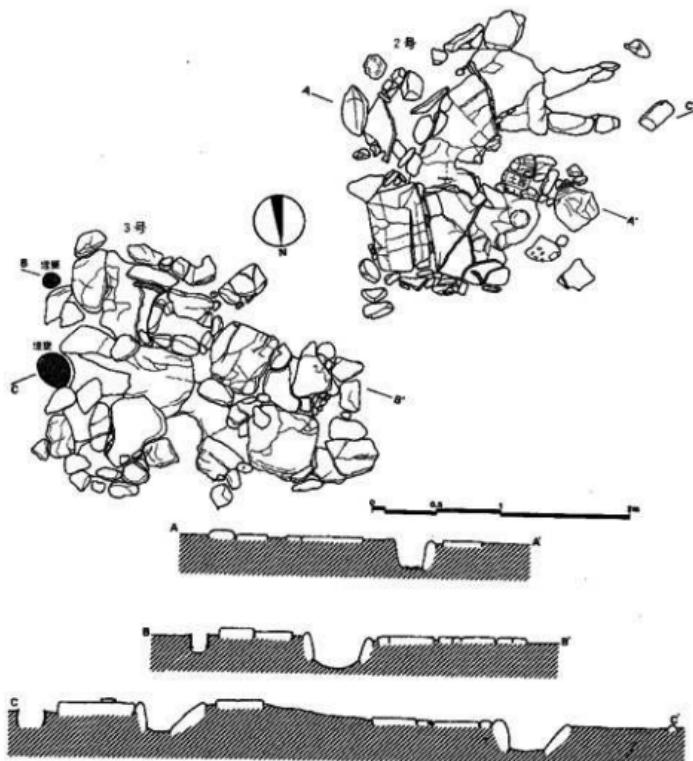
本址も第1号住宅地と同様に、規模、プランは明確でないが、第三紀層の砂岩を主として敷石を使用している。敷石のすきまは、安山岩、ヒン岩の小石をつめており、極めて丁寧な作りである。この住居址も全面的に敷石が施されていたか不明である。

敷石の範囲は、東西約2.5m、南北約2mで、周壁、柱穴はともに検出されなかった。

敷石中央よりに31cm×36cmの石圓炉があり、炉床までの深さは20cmを計る。炉内からは一括土器(第11図、2)が出土した。炉石はヒン岩および安山岩が使用されていた。

床面はほぼ水平で、敷石の西側には40~50cm大の礫が散在している。なお敷石面より、打製石斧、横刃型石器などが出土した。

(神沢昌二郎)



第9図 第2、第3号住居址 (1:40)

第3号住居址(第9図)

本址はS、T 8～9区に位置し、2号址と南西部を切り合う形で発見された。

本址も1、2号址と同様に規模、プランともに明確ではないが、第三紀層の平板な砂岩を敷石に使用し、周囲には安山岩を用いている。本址は比較的敷石部の残存状態はよいが、全面に敷石がなされていたかは不明である。

敷石の範囲は、東西約2.5m、南北約2mで、床面はほぼ水平、周壁、柱穴は発見されなかった。

敷石部南側中央に50cm×40cmの石圓炉があり、炉床までは深さ約26cmを計る。炉石には安山岩が、周辺部同様に使用されている。

本址は、敷石東側に2個の埋甕を持ち、(第12図1.2.)内ひとつは1号址同様、砂岩を埋甕に合わせるように削り取ってあり、用いられた土器も1号址と同様の器形で、1号址のものと比較するとやや胴部の張りが少なく、口縁部が長く、両耳の把手とともに欠損している。

また、本址では、炉址付近から、輝緑凝灰岩製の石棒が特筆すべき遺物としてあげられる。その他、石鍬3、打製石斧12、等多くの石器が出土している。

(大沢 哲)

第4号住居址(第10図)

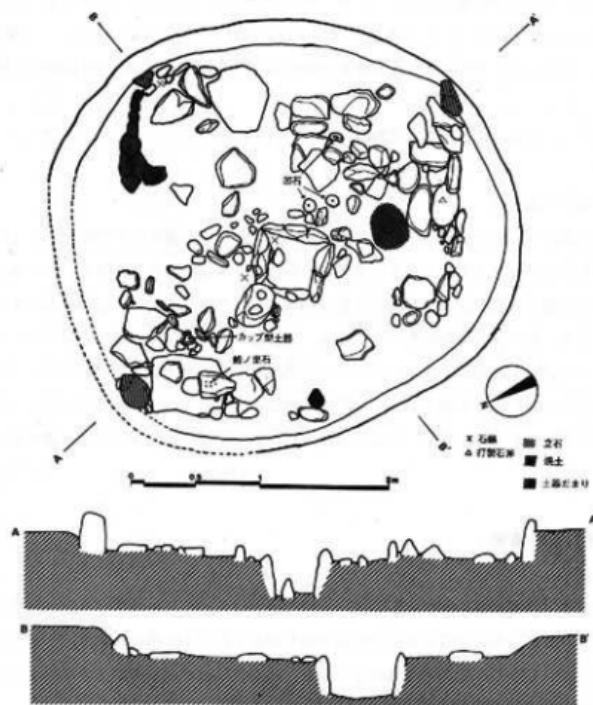
4号敷石住居址はQ、R-6・7グリットを中心に確認された。したがって今回検出された4つの敷石住居址中最も奥部に位置することになり、1号址より4m、2号址より2mの地点に存する。

住居址は褐色土層を2.5cm前後掘り込んで作られている。壁は、北壁部分が一部不明の他は良好に残存し、壁高は20～30cmを計り、ほぼ垂直をなしている。

敷石は一辺2.5mの正方形を呈し、その東・北・南の3隅に立石があり、この各立石を直線的に結んだ範囲に敷石がなされている。なお西隅には立石が見当らないが、西南隅には一列に側石が配されていることなどを考慮に入れれば、西隅にも立石が存した可能性もある。もしそうだとすれば、四隅に立石を配し、その立石間を直線で結んだ正方形の範囲に石を敷きつめた住居址だったといえる。

敷石は中央部というより、むしろ周辺部、特に立石周辺に比較的良く残っている。大形の板石は立石寄りの部分に敷かれ、炉周辺は小形の石が使用されている。特に北隅の立石に接する敷石は大きく、長60cm、短50cmあり、しかも高さも他の敷石より高くなってしまっており、あたかも立石に伴う祭壇を思わせるようであった。またこの板石の上および付近から、蜂ノ巣石(図28-2)や台付土器(図13-3)が出土しており、この感を一層深くした。敷石に使用された石材は、大形の石はその大部分が質安山岩を使用し、小形のものはヒン岩を使用している。1～3号址はその殆どが第3紀層砂岩を敷石の用材として利用しており、4号址とは石材の使用が非常に対照的である。時間差、使用差等当遺跡における本住居址の性格を考えるうえで何らかの参考となろう。

立石は北隅のものが最も大きく、径30×20cmの梢円形で、床面上に出ている部分は29cm、床面下に埋められていた部分は34cm、総長63cmという大きなものであった。立石上端は故意に打ち欠かれた状態で、上面は平坦となっている。この立石の両脇に長さ17cm、巾6cmの細長い石を刺す



第10図 第4号住居址 (1:40)

ようになつてあつた。

東隅の立石は一辺15cmほどの三角形を呈し、床面上にでている部分21cm、床面下に埋められている部分21cmで総長42cmを計る。上端はやはり打ち欠かれているが、平坦にはなつていない。壁面に一部接するようにして立てられている。

南隅の立石は15×30cmの橢円形で、床面上27cm、床面下32cm、総長59cmである。壁に一部くい込んで立てられ、前面には34cm×14cmの板石が置かれている。

これらの立石には全て安山岩が使用されており、敷石に使われた石材も変わりがみられず、立石だけ特別の石を使用するというようなことは見られなかつた。

炉址は、敷石中央に大形の河原石4ヶを用いて構築されている。55×50cmのほぼ正方形で、炉石上端は敷石面より7cm前後高くなっている。炉石は焼けてボロボロになっており、幾つかにヒビ割れている。炉床までの深さは、44cmあり、炉底には大形の土器片が散かれていた。また炉内からは土器の把手、打製石斧が上から落ちたような状態で出土した。なお底面には焼土が堆積し、骨粉が若干認められた。

この他、柱穴、周溝、埋甕等の内部施設は認められなかった。

(小林康男)

第4号住居址上部集石

次に敷石上層について少し触れておきたい。敷石上層には堅穴掘り込みの範囲とほぼ同じ範囲に入頭大から拳大の石が投げ込まれたような状態で30~40cmほどの厚さに堆積している。この集石中からは多量の土器、石器が出土し、特に打製石斧は28本という多出を示している。またシカの骨片も多く検出され、特に炉址南側の敷石上面では、土器とシカの骨が折り重なるようにして検出された。この周囲からは完形土器が出土していること、ほとんど敷石上面まで骨と土器が積み重なっている点、あるいは炉址内からも骨粉が出土していることなどを考えあわせれば、他の出土品とは同列に扱えない性格を有しているかもしれない。むしろ本住居址の使用状況の一端を示す出土遺物といえよう。

(小林康男)

2. 繩文時代の遺物

① 土器

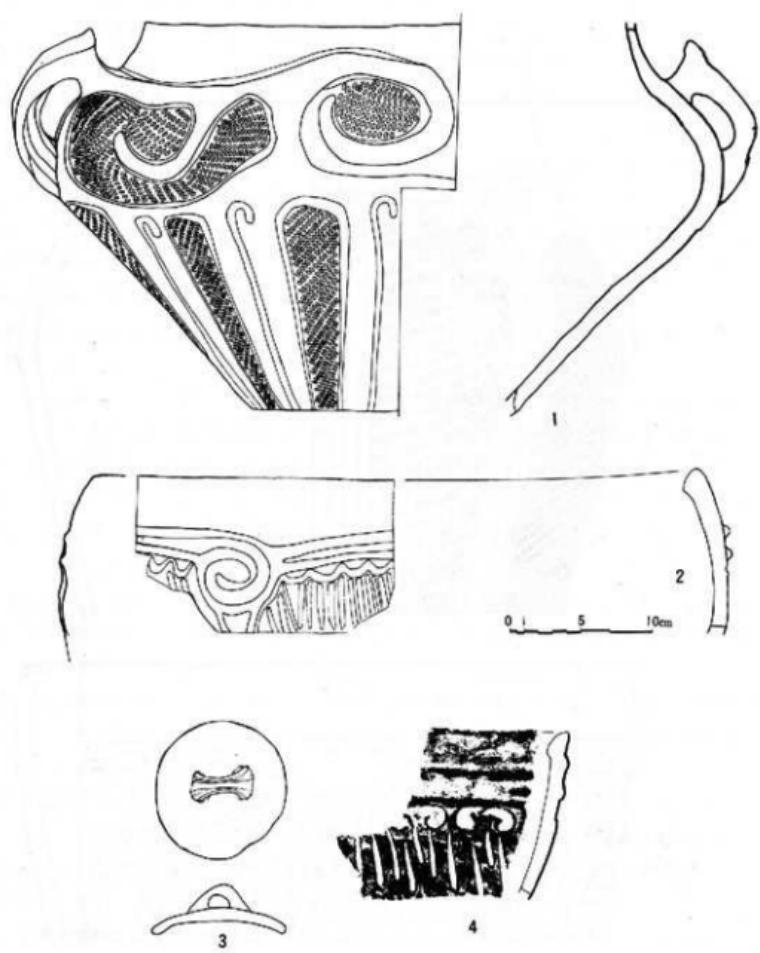
本遺跡では縄文中期遺跡の例にたがわず、土器の出土はまことに多量で、リング箱で20箱を超えるほどである。このうちほぼ復元可能で器形を知り得るものが10例ほどあり、一部器形を知り得るものも少なくない。しかし、その大半は破片である。時期的には、縄文中期後半に属するが、わずか縄文早期の土器が検出されている。

しかしながら、遺物の量が多いために、未だ詳細な整理が行なえなかったため、ここでは主として造構伴出の土器を中心に説明を加えたい。

第1号住居址出土土器(第11図1・3)

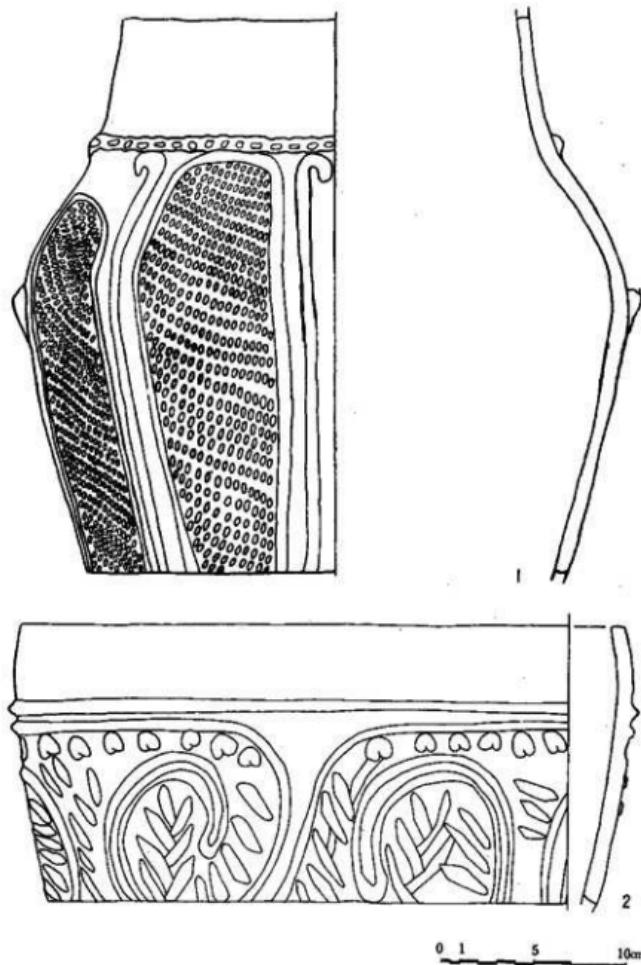
本址は塵乱が著しく、明確に本址に属すると思われるものは埋甕と調査終了後発見された土器の蓋のみである。第11図1は両耳の甕型土器で口径約35cm、高さ約30cm、胴部最大径50cmを計り器形は胴上部が内彎し、その下が、急にすぼまっている。施文は、口縁部に無文帶を配し、胴上部は、渦巻状の隆線によって区画し、その中に縄文を施している。胴下部は、逆U字形の沈線で区画し、その中に縄文を施し、各区画間には、わらび手状の沈線を垂下させている。胎土には細砂と雲母を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。

3は調査終了後、1号址炉址から発見されたもので、鉈手土器等の蓋だと思われる。直径9.5cm、不整形の円形で、縁辺部の一部を欠くもののほぼ完形である。中央に把手(つまみ)を持ち、把手の



第II図 第1, 2, 3号住居址出土土器 (1 : 4)

(1, 3, 1号住, 2, 2号住, 4, 3号住)



第12図 第3号住居址出土土器 (1 : 3)

中央は竹管等による整形のためか、一条の溝となる。整形は手ひねりで行なったらしく、指痕が生々しい。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は茶褐色、一部は2次焼成によるものか、黒色に変色している。

第2号住居址出土土器(第11図2)

本址では炉址出土の土器のみが、本址に属すると考えられる。

2は、器面に2次焼成の痕が認められ、推定の直径約4.4cmを計る深鉢形土器の口縁部である。小破片のため、全体の形状等は判然としない。文様構成は、口縁部の無文帶の下に2条の太い隆帯をめぐらし、その下に波状の沈線をめぐらし、区画の中を太い沈線で施文している。胎土、焼成とも良好、色調は黄褐色を示す。

第3号住居址出土土器(第11図4、第12図1、2)

本址も攪乱を受けていたが、埋廻2つと、炉内に土器方を敷いてあり、それらは本址に属するものと判断できる。

第12図1は埋廻として用いられた両耳の壺型土器で、口径約2.2cm、高さ3.0cm、胴部最大径約3.2cmを計り、器形は胴上部がゆるやかに内彎し、その下が、ゆるやかにすぼまっている。口縁部は7cm程で、文様はない。頸部は粘土帶を貼付し、その上に刺突を施してあり、胴部は第11図1と同様に逆U字形の沈線で区画し、その中に縦文を施し、各区画間には、わらび手状の沈線を垂下させてある。なお、両耳ともに欠損。胎工に粗い砂粒を含み、色調は黄灰色、焼成は悪くボロボロしている。

第12図2は埋廻として用いられた深鉢形土器の口縁部である。口径は約3.3cmを計る。口縁部の下に一条の隆帯をめぐらし、曲線的な隆帯で区画した中に、太い沈線による、まがむ模様、綾杉状の文様を施してある。胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

第11図4は炉内より出土した、器面に2次焼成の痕跡が認められる。口縁部は、内側にやや張り出しており、第12図2と同様に隆帯で文様帶を構成し、区画の中に、まがむ模様、縦位の沈線を施してある。色調等も2と同様である。

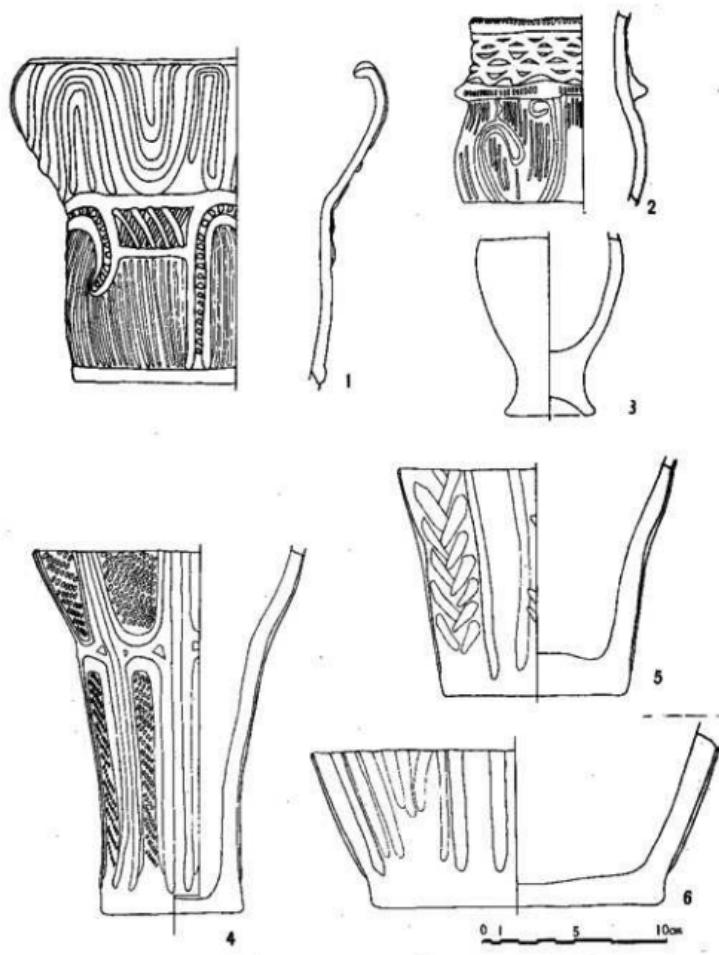
第4号住居址出土土器(第13、14、15図)

本址とその上面の集石中からは本遺跡出土土器の半数以上のものが出土している。いずれの遺構に属するものか判然としないが、集石に属するものと本址に属するものと2つのグループが存在するようである。

イ、4号址に属するもの(第13図1~3)

1はキャリバー型の深鉢で、口径1.8cm、現在高1.7cmを計り、胴下部を欠く。口縁部は粘土紐貼付の曲線文を配し、胴部は、縦の沈線を地文とし、太い隆帯を曲線的にめぐらし、隆帯の間に刺突を施してある。胎土に雲母を含み、色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

2は口縁と底部を欠く小型の壺型土器である。口径8cm、現在高1.0cmを計る。文様構成は、胴上部には横位の2本の隆帯で区画した中に粘土紐を櫛曲状に貼付してある。また隆帯にはきざみをいれ



第13図 第4号住居址及び第4号住居址上部集石出土土器（1：3）
(1～3、4号住、4～6、集石)



第14図 第4号住居址上部集石出土土器 (1:3)



第15図 第4号住居址上部集石出土土器 (1:3)

である。胴下部は継位の細かな沈線を地文とし、曲線的な隆帶を重ねてある。胎土は雲母と砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成はあまりよくなくボロボロしている。

3は小型のカップ形土器である。口縁部を欠き、現在高約10cm、高台部は高さ約3.5cm、径約5cmを測る。胎土は細砂を含み色調は赤みの強い褐色である。焼成は悪く表面は、付着した土とともにボロボロと剥げ落ち、文様は判然としない。

四、4号址上部の集石に属するもの（第13図4～6、14、15図）

第13図4は小型の深鉢形土器で、口縁部を欠くものの現在高20cmを計る。文様構成は、胴上部にU字形の沈線で、胴下部は逆U字の沈線で区画し、いずれも中に繩文を施している。そして各画面の間に隆帶を垂下させている。胎土、焼成ともに良好、色調は黄茶色を呈す。

第13図5は胴下半を残す深鉢形土器である。文様は、太い隆帶を垂下させその間に1つおきに太い沈線による綾文を施している。胎土は砂粒を多量に含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良い方である。

第14図 1～7は第13図5.6と同様の施文方法で、太い沈線と、太い沈線による曲線文、まがむ模様、ほぼ継位の沈線を施してある。

第14図 8～14もやはり同様の文様構成で、太い沈線で区画された中に繩文を施してある。

第15図 1～6は曲線的な隆帶とやや細めの綾状沈線を施してある。

第15図 7～14は隆帶で区画した中に細い斜位の沈線を施してある。

第15図 15～18は細い沈線を垂下させ区画した間に細かい繩文を施している。

その他の地区の出土土器（第16図）

N-4～5の集石からは、明確に遺構はつかめなかったが、本遺跡では極めて特異な土器が出土している。

第8～13は隆線による筒巻文と連続刺突文の組み合わせによる文様を特徴としている。7は複合口縁で口縁内側に突起を持ち、口縁の下は細い沈線文が継位に施してある。

1はM-2で出土した小形の深鉢で4号住居址出土のもの、（第13図2）と極めて類似した文様構成である。

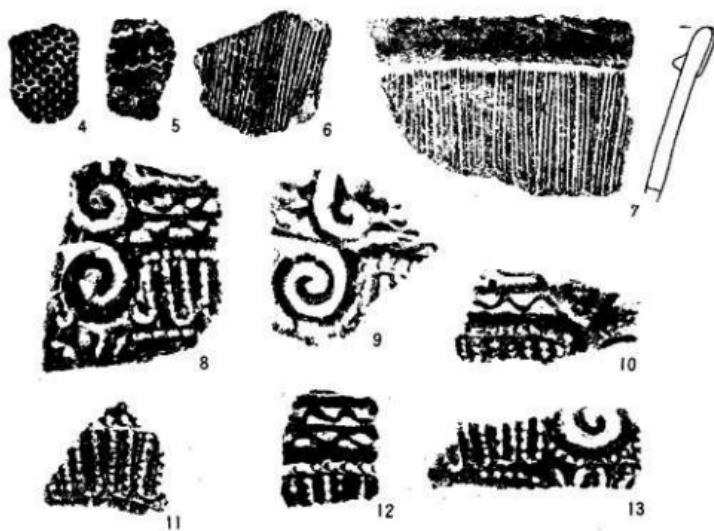
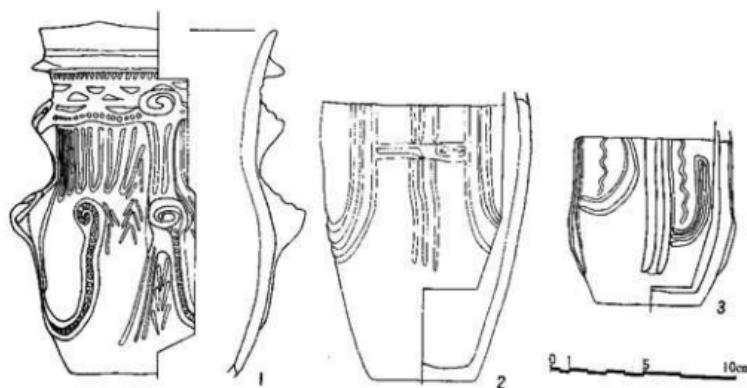
4、5は、N-3出土の押型文土器で、本遺跡中最も古い土器である。4は胎土に雲母をわずかに含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈し、器厚は0.5cmで、器面に橢円押型文を施してある。

5は胎土、焼成ともに粗く、色調は黄褐色を呈し、器面にはほぼ4条の山形文を施してあるが、磨もうか若しくはっきりしない。この種の押型文は他に数片ある。

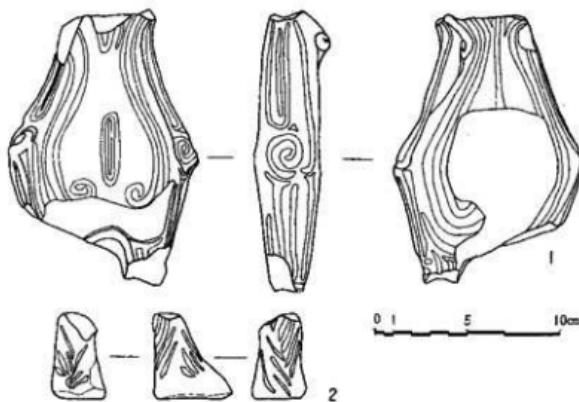
土製品（第17図）

本遺跡では土製品として、土偶頭部1体と脚部がひとつ発見されたのみである。

1は、C-101区出土の大型土偶で、頭部と脚を欠いている。沈線か表裏ともにシンメトリーに施され、その先端はわらび手状となっている。色調は赤褐色、胎土、焼成ともに良好である。現存高16cm、体幅10cmである。



第16図 その他の地区からの出土土器 (1 : 3)

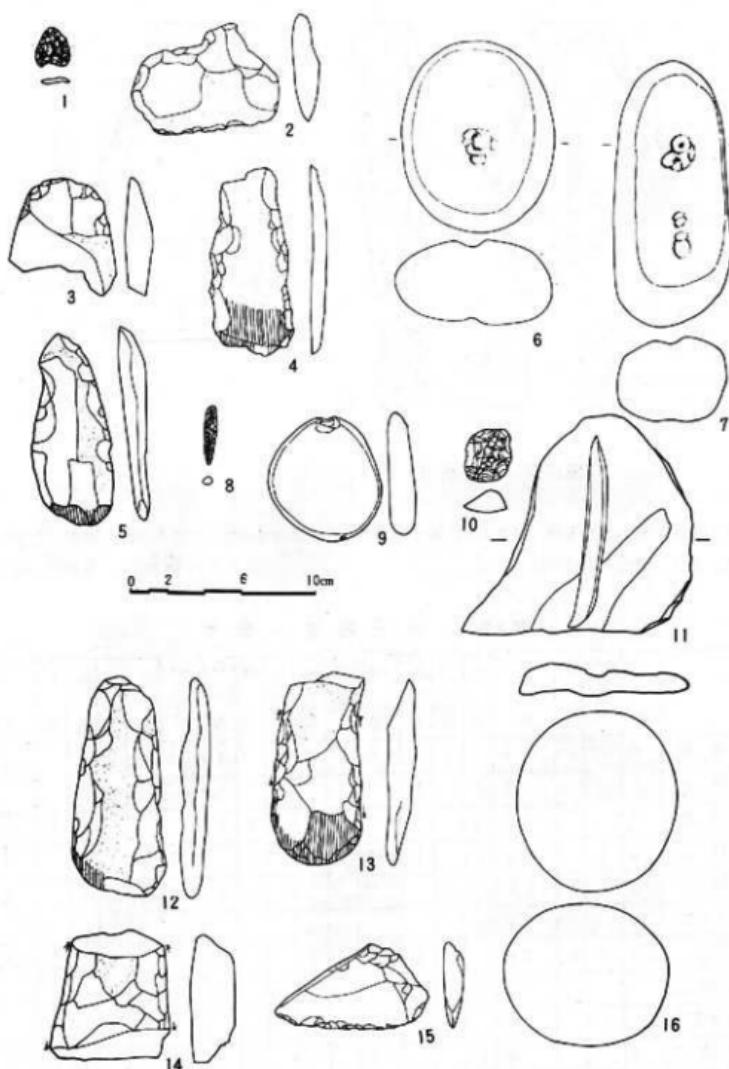


第17図 土製品 (1 : 3)

2は土偶の脚で高さ5cm、長さ4cm、幅3cmを測る。文様は綾杉状の沈線を施してあり、色調は赤褐色、胎土、焼成とともに良好である。
 (浅輪俊行、大沢哲)

第4表 出土石器一覧表

	石 鎌	ボ イ ント 頭 状 匙	石 斧	打 斧	横 刃	石 刀	磨 石	凹 石	蝶 ノ 巣 石	碧 岩 圓 石	碧 岩 圓 石	磨 斧	石 錐	ス ク レ バ ー	石 錐	石 包 丁	石 砥	石 棒	合 計	
1号址	1	1		3		1				1	1	1	1	1	1	1	1		1	12
2号址					3	1		1												5
3号址	3				1	2	3						1	1				1	1	21
4号址	2	1		3	7	1		1	2	1					2					47
階段状	2	1			7		1							1	2		1		1	15
D-101	1					1														2
L-P ~2-6	1	2	2	1	2	8	1	2	8	2			1	3	1	1	1	1	1	62
1号周辺						1	1													2
2・3号周辺			1			2								1						4
4号周辺	2				8	1		1				1		2						15
O-3 D-4	1					1							1							3
合計	24	5	2	10	2	8	3	4	11	1	3	1	3	4	11	1	1	2	2	188



第18図 第1・2号住居址出土石器 (1 : 3)

(1~11・1号住、12~16・2号住)

② 石 器

本遺跡から出土した石器は、総数187点を数え。この内、4軒の敷石住居址に係わるものが84点を占め、他の103点が遺構外の出土であった。この詳細な内訳は第4表に示すとおりである。

ここではまず敷石住居址に伴う石器類を記述し、次に各グリット出土の石器をみていきたい。なお、石器が住居址から出土する場合、それ等の石器がその住居址と関係があると断定するには様々な問題があるが、本稿では便宜上、敷石住居址床面上出土のものと覆土中より出土したものとを含めて述べておきたい。

第1号住居址(第18図1~11)

1号址からは覆土中より打製石斧2(4, 5)、敷石上から石鎌1、石匙1、打製石斧1、石皿1、凹石兼磨石1、叩石兼凹石1、石錐1、石鍬1、スクレバー1、砥石1の計12点が出土したのみである。1号址は台地縁辺にあったためか覆土が少なく、それゆえ耕作時に破壊される度合も大きく、遺物の遺存状態も悪かった。

石鎌(第18図-1)は、チャート製の完形品でずんぐりした形態を持ち、作りは薄く精巧である。石匙(2)は横型のもので、母岩から1回の打撃で剥片を使用し、裏面は殆んど加工することなく使用している。表面は大きく原石面を残し、つまみ部を刃部に粗い加工を施している。(ヒン岩製)

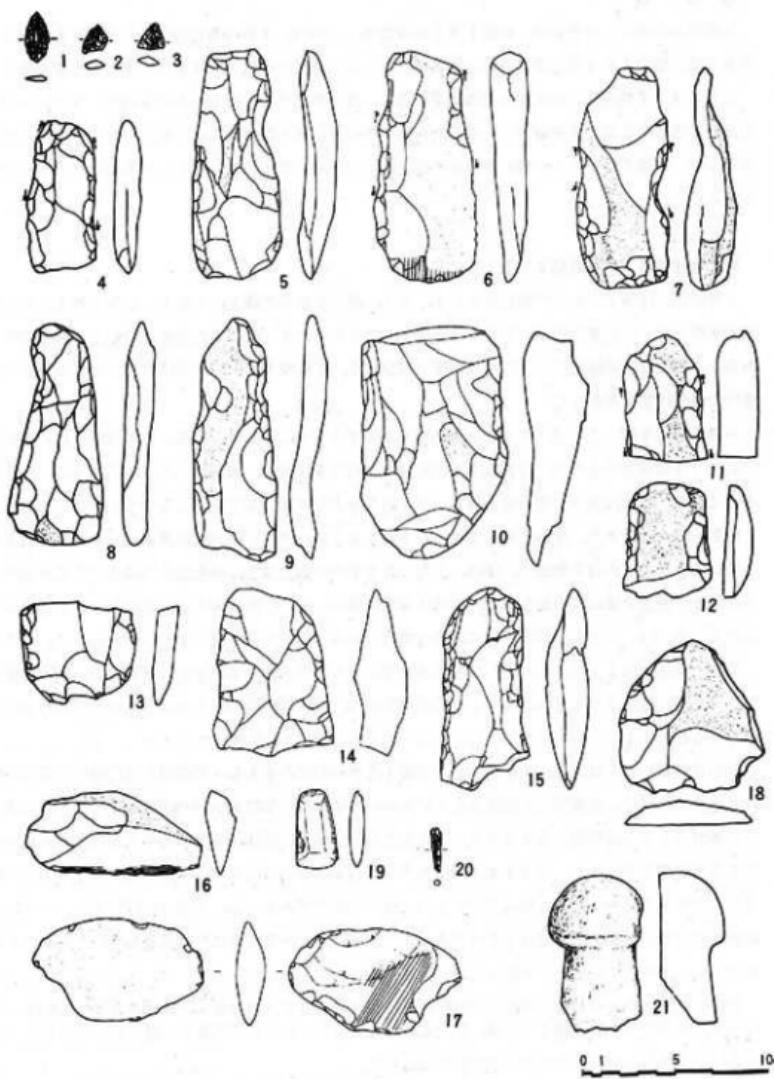
打製石斧は3点あり、床面上から出土したもの(3)は、頭部のみで、表裏面に大きく原石面を残している。他の2点は完形品で、(4)は、刃部付近がやや巾広となり、両側辺にはゆるいえぐり込みがみられる。表面全体に原石面を残し、厚味は非常に薄い。(5)は、丸味のある刃部を持ち、頭部は尖頭状に尖る。(4, 5)とも刃部表裏面に顕著な磨耗痕を残している。3点ともヒン岩製。

石皿(第28図1)は、炉石として使用されていたものである。1部欠損しているが、橢円形を呈し、一面にのみ巾9~10cm、深さ1cmの磨面を持つ。磨面は帯状で、もっぱらこの上で磨石を前後運動することによって使用されていたことがわかる。(安山岩製)

凹石兼磨石(6)は、ほぼ円形を示し、表裏1孔づつの凹みをもち、表の凹みは打痕状で深く、裏はロート状に深い。表裏面とも研磨されているが、火にあたったためかボロボロしている。(ヒン岩製)叩石兼凹石(7)は埋甕に接するようにして出土し、しかも、直径20cmほどの丸石に立てかけられたような状態で出土した。長さ14.3、巾6.5、厚さ4.5cmで、凹みは表に3ヶ所、裏に4ヶ所あり表の1ヶ所がやや深い凹みとなっている他は、浅く不鮮明である。上、下両端に打痕がみられる。打痕の長さは上端が2.5cm、下端は1.7cmであった。手を持ってみると実に握り具合が良い。先述の丸石を台とし、その上で何かを叩き割ったのだろうか。(砂岩製)

石錐(8)はチャート製で非常に丁寧な作りの完形品。つまみ部ではなく、錐部のみで、長さ3.2cm。今回の調査で唯一の石錐(9)は、敷石上面から出土し、ヒン岩の円錐の一端に打ち欠きによって切り込みを作り、他端には打痕がわずか認められる。

スクレバー(10)はチャートの部厚い剥片に粗い剝離によって円形状の刃部を作り出したものである。



第19図 第3号住居址出土石器 (1 : 3)

砥石(11)は、先述した叩石兼凹石が立てかけられてあった丸石の南側から出土した。厚さ1cm前後の砂岩の表面に巾1.5cm、深さ3mm、長さ10.5cmの研磨痕がある。研磨面は貫通せず、先端は尖っている。

第2号住居址(第18図12~16)

2号址から出土した石器はわずか5点にすぎない。2号址と接して存在する3号址が多くの石器を出土したとの対照的な状態を示している。床面上から打製石斧2、横刃型石器1、磨石1の4点が、覆土から打製石斧1(14)が得られている。

打製石斧の完形品は1点(12)で、他は13が頭部、(14)は刃部および頭部をそれぞれ欠損している。当遺跡の打製石斧は原石面を大きく残すものが多いが、本址出土のものも全部表面中央部に原石面を残している。(12、13)とも丸味をもつ刃部をもち、(12)は刃部付近が巾広になり、(13)は側面にわずかのえぐりを持つ。両方とも刃部に磨耗痕がみられる。(13、14)は側面に磨痕があるとともにヒン岩製。

横刃型石器(15)は一辺に直線的な刃をもち、左辺に原石面を残している。裏面は原石より剥がしただけで何ら手を加えず。表面は、周辺を粗く加工し形を整えている。原石から薄い剝片を剥ぎ取り、その縁辺の脱い刃を効果的に利用している。(硬砂岩製)

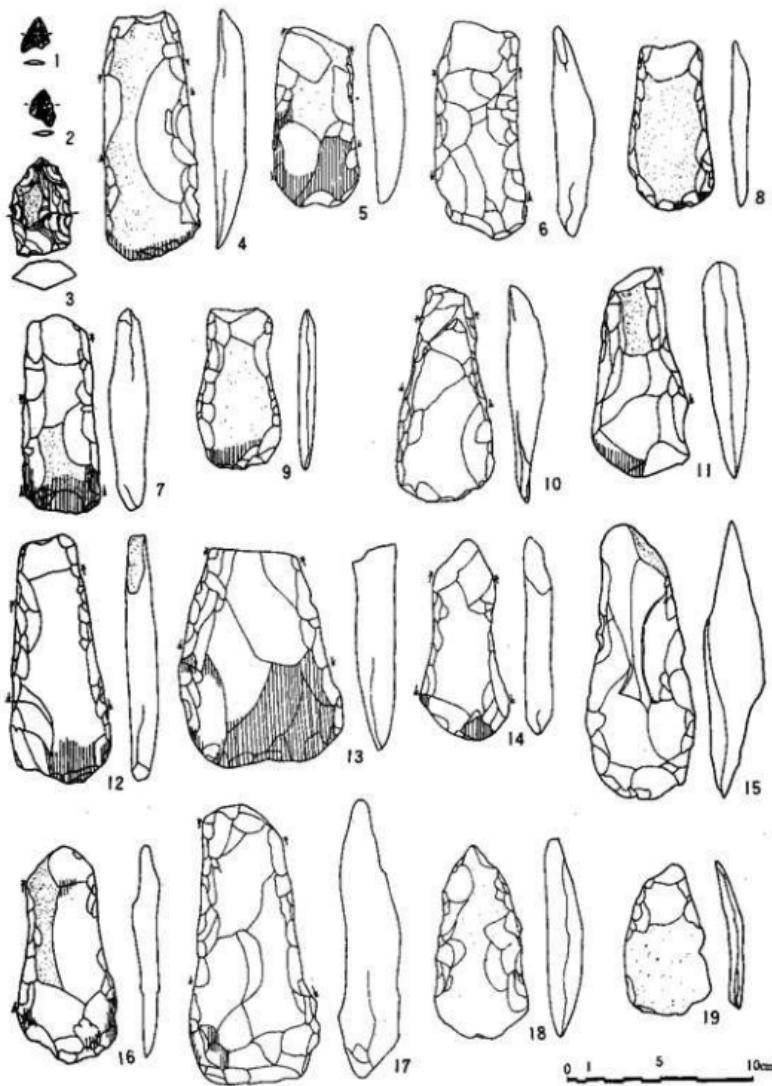
磨石(16)は球形を呈し、その全面がくまなく研磨され、ツルツルしている。重量感のある磨石である。(安山岩製)

第3号住居址(第19図)

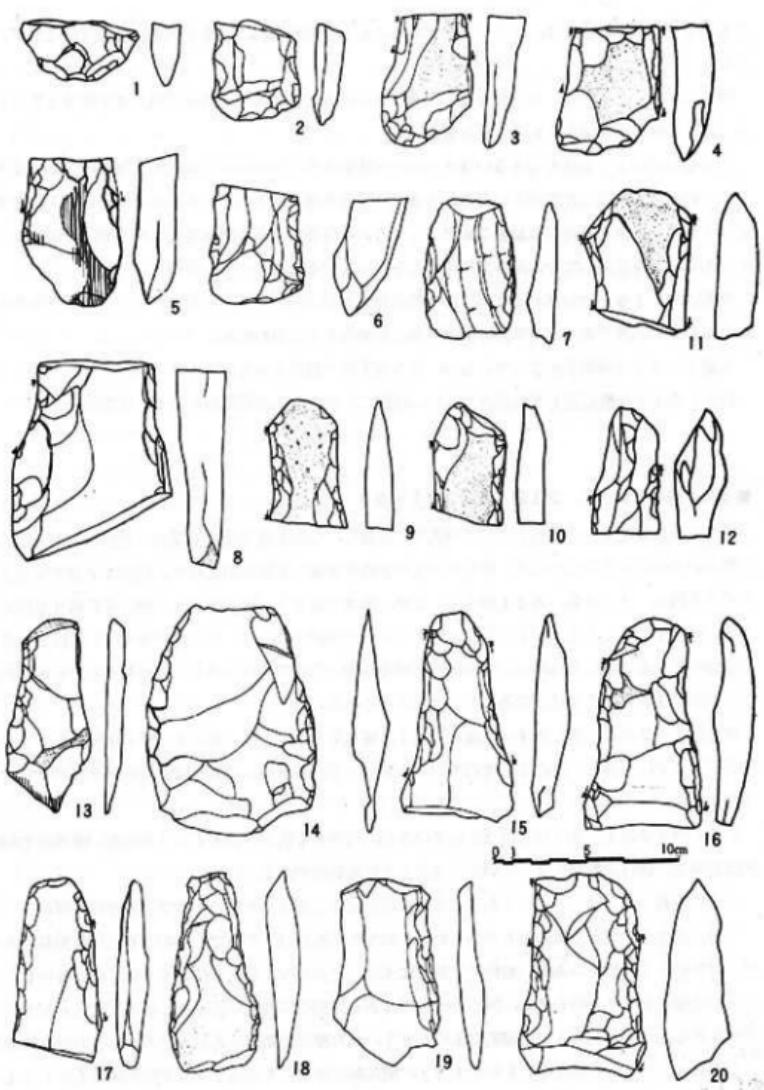
1、2号址同様、台地縁辺に位置する住居であるが、1、2号とは異なり敷石の遺存状態は比較的良好であった。このことを反映して多くの石器が出土している。出土総数21点で、その内床面上のものが10点、敷石上部の集石内3点(7、10、14)、覆土8点(3、4、5、6、11、12、15、16)である。敷石上からは石鎚2、打製石斧3、磨製石斧1、石錐1、横刃型石器あるいはスクレバー2、石棒1、集石中からは打製石斧3、覆土からは打製石斧6、石鎚1、横刃形石器1がそれぞれ出土した。

石鎚1は柳葉形状で完形品。黒曜石の薄い剝片を使用し、非常に鋭利に作られている。2はチャート製で石脚を欠き、また3は同じくチャート製で脚部を欠いている。

打製石斧は計12本あるが、完形品は7本、破損品は5本である。完形品をみると短間形で刃部が直線状で側面にえぐりのないもの(4)、側面にえぐりがあり刃部が丸味をもつもの(5、6)と刃部が直線の(7)、楔形で側面にえぐりをもち、刃部が直線のもの(8)。それから頭部が尖頭状に尖がっているもの(9)および11のように分厚く、刃は丸味を帯び粗雑なものなどがある。側面に磨耗痕をもつものは(4、6、7)の3本で、(6)は刃部に磨痕が見られる。ほとんどのものが表面に原石面を残している。破損品では頭部のみのもの(11、12)、刃部のみのもの(13)、刃部だ



第20図 4号住居址出土石器 (1:3)



第21図 第4号住居址出土石器 (1 : 3)

け欠損しているもの(14. 15)などがある。(5)が粘板岩、(9)が硬砂岩のほかは全てヒン岩製。

横刃型石器(16)は、カマ状をなし。原石から打ち欠いた剝片を殆んど加工せず使用している。刃は鋭く、磨耗度が認められる。ヒン岩製。

この他(17)のような横刃型あるいはスクレバー状のもの、(18)のような打製石斧というよりはスクレバーの機能を推定した方がよい石器がある。(17)は表面に残されている原石面は何ら加工を施すことなく使用し、裏面右側には顯著な研磨痕があり、この部分は磨き減ったように若干凹んでいる。また(18)は左刃を使用したものか非常に鋭い刃を持っている。ともにヒン岩製。

磨製石斧(19)は頭部および側辺の一部にわずかの破損があるだけの完形品で、全面が丹念に磨かれた美しい石斧である。頭部の破損は打痕のためのものと思われる。

石錐(20)は両端を失っているが、作りは丁寧・精巧である。チャート製。

石棒(21)は敷石面上部から出土した。頭部にくびれのある有頭のもので、半欠品。

第4号住居址(第20. 21図 第22図1~5)

4号址は、前記1~3号址より若干内奥部に位置し、しかも掘り込みも深かったこと、上面に分厚い集石があったことなどのため、敷石住居址中で最も多量の石器が出土した。総計47点で床面上7、(第20図3. 4. 10. 第21図14. 20. 第22図2)、集石中34、覆土6(第20図6. 19. 第21図6. 12. 15. 第22図7)という内訳であった。この集石出土の石器は34点という数の多さもさることながら、その出土状態をみると石の間にはさまり、あたかも石とともに無造作に投げ込まれたような状態であったことは注意される。

床面出土の7点は打製石斧4、尖頭状石器1、横刃型石器1、蜂ノ巣石1。集石中出土の34点は打製石斧28、石錐2、凹石2、磨石1、スクレバー1。覆土からの6点は打製石斧5、スクレバー1であった。

石錐(第20図1. 2)は2点出土しているが、両方とも底辺へのえぐり込みの深い優秀品である。
①は右脚、②は左脚を失っている。2点とも黒曜石製である。

尖頭状石器(3)は、チャート製で、表面に原石面を1部に残す粗い作りで、器厚は分厚い。

打製石斧は37点と多量の出土があった。このうち完形品は17点で、他の20点は破損品であった。完形品から形態をみると、短冊形で側辺にえぐり込みがなく刃部が丸味をもつもの(4~6)と刃部が直線状をなすもの(7)、同じ短冊形ではあるが側辺に強弱の差はあるがえぐり込みがあり刃部が丸味をもつもの(8)と直線的なもの(9)、また撥形で側辺にえぐり込みがあり刃部丸味のもの(10~12)と刃部直線のもの(13)、更に側辺にえぐり込みがあり刃部丸味のもの(14~

16)と刃部直線のもの(17)があり、尖頭状に先端が がるもの(18, 19)がある。側辺に磨耗痕がみられるのは(4~7, 10~14, 16~17)の11点。刃部に磨痕があるもの(4~14, 16, 17)の13点である。

破損品では 刀部のごく一部のみ残存するもの(第21図1)が1点。刃部のもの(2~6)の5点、頭部(7, 8)の2点、頭部のみ残っているもの(9~12)の4点、刃部の部分だけ欠損するもの(13~20)の8点。肩部付近のもの(第22図1)である。(第20図7)が粘板岩、(第21図9)が安山岩、(第20図18, 第21図1, 11)が硬砂岩の他は全てヒン岩製。

横刃型石器(第22図2)は、表面に原石面を大きく残し、周辺に粗い加工を施す。下辺と左辺に磨耗痕がある。

磨石(3)は、ほぼ円形の花崗岩を用いたもので、火にあつたためかボロボロしていて磨痕の範囲は明確でない。

凹石の(4)は円形の安山岩を使用し、表面に5ヶ所、裏面に不鮮明ではあるが2ヶ所の凹孔をもつ。(5)は精円形の花崗岩で表面に4孔、裏面に1孔をもつ。

蜂ノ巣石(第28図2)は、北隅立石の脇から出土したもので、28cm×22cmのほぼ精円形を呈し、凹孔は表面にのみ5孔存す。凹孔はロート状で、深さは約1cmであった。

スクレバー(第22図6)は裏面上端にバルブを有するチャート製のスクレバーで、縁辺は鋭利な刃部になっている。製作は急入りに行なわれている。(7)もチャート製のスクレバーで、右辺にゆるやかな円を描く刃を作り出し、左辺下部にはノツチ状のえぐり込みをもつていて、加工はこの刃の部分のみわずかに施され、他は第1次加工面を残している。

以上が縄文期の遺構に付属して出土した石器の概要であるが、これ以外にも多量の出土石器がある。以下この遺構外出土の石器について触れたい。

階段状遺構からの出土石器 [D, E, F, G-104~107] (第22図8~21)

D・E・F・G-107~104グリット(中世遺構の階段状地城)から出土した石器は石鎌2、尖頭状石器1、打製石斧7、石錐1、スクレバー2、砥石1、石皿1の計15点である。

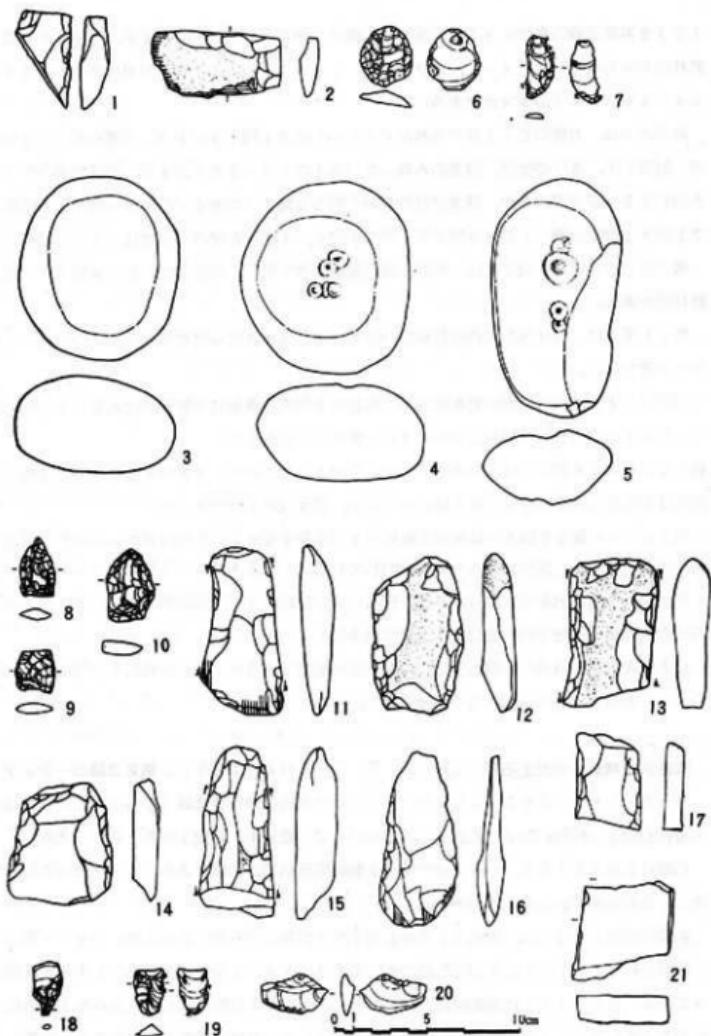
石鎌は2点とも大形で、(8)はチャート製の完形品で三角鎌である。(9)は頁岩製で先端を欠除し、底辺にわずかのえぐりがある。

尖頭状石器(10)は、裏面に1部原石面を残す粗雑な作りで、長さ4cm。チャート製。

打製石斧は(11, 12)が完形品の他、(13, 14, 15)は刃部を、(16)は頭部を失なっている。また(17)は頭部付近の破片である。(11)は頭部にえぐり込みをもち刃は丸く、磨痕をもつていて、(12)は側辺がややふくらみをもち、刃は直線をなす。全てヒン岩製。

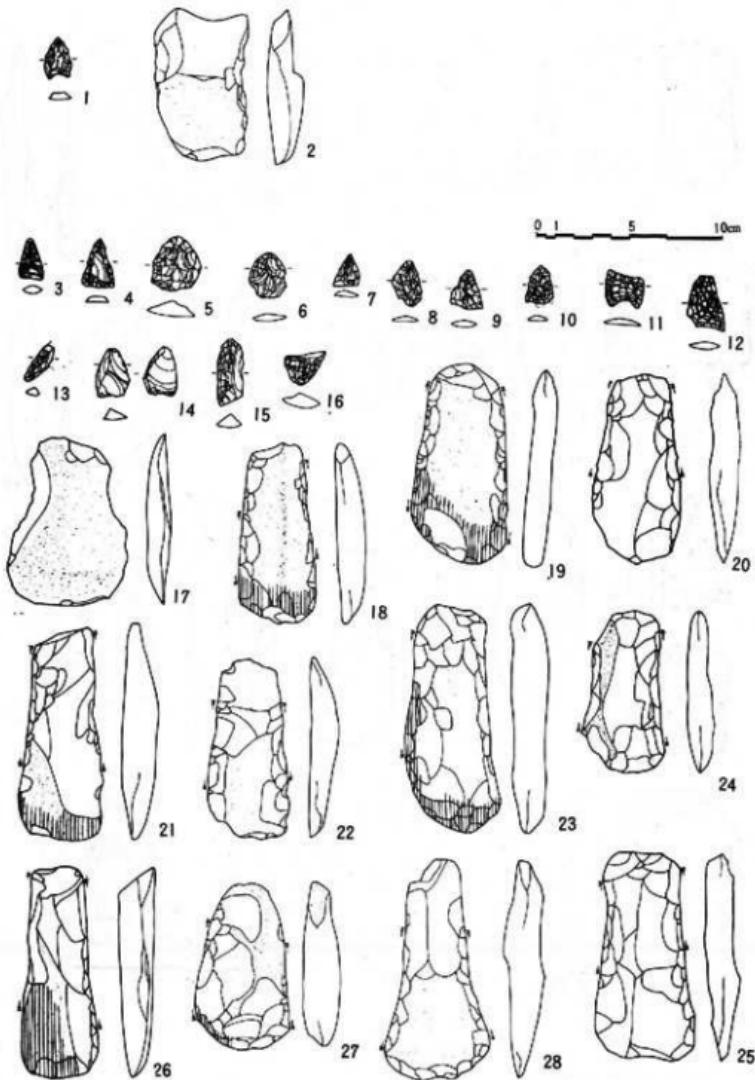
石錐(18)はつまみ部分をもつ完形品で、錐部は短い。チャート製。

スクレバー(19)は、黒曜石製。下先端に丸味をおびた刃が、右肩部分に弱いえぐりをもつ部分がある。(20)は下辺に直線状をなす長さ2.2cmの刃部がある。チャート製。



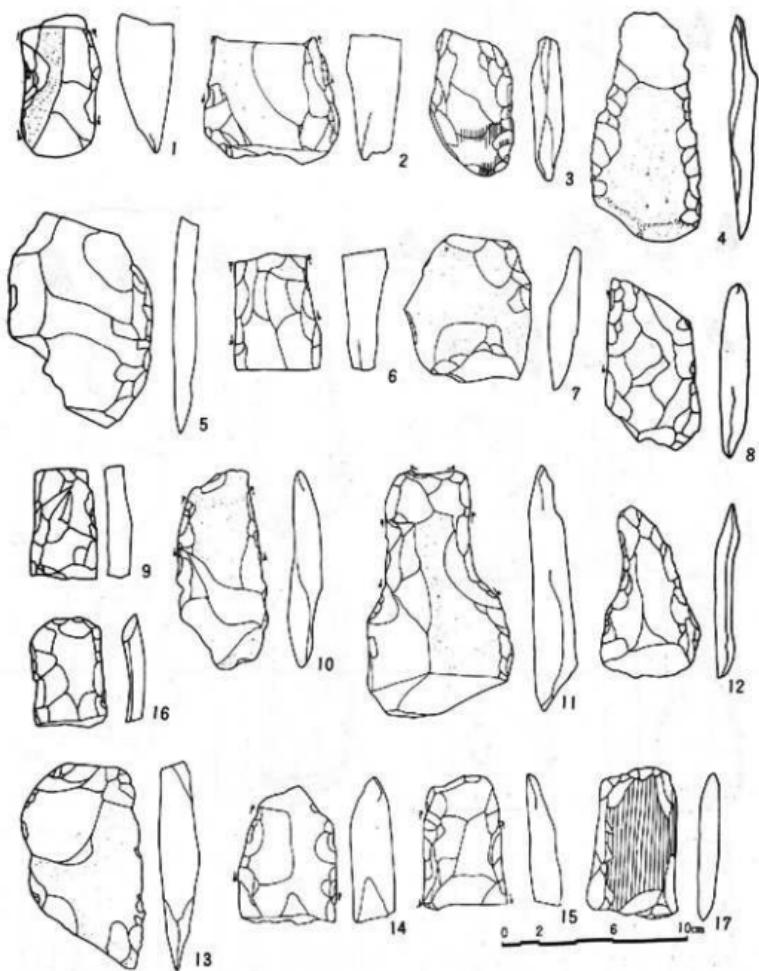
第22図 第4号住居址・階段状造構付近出土石器（1：3）

（1～5・4号住、8～21・階段状造構付近）

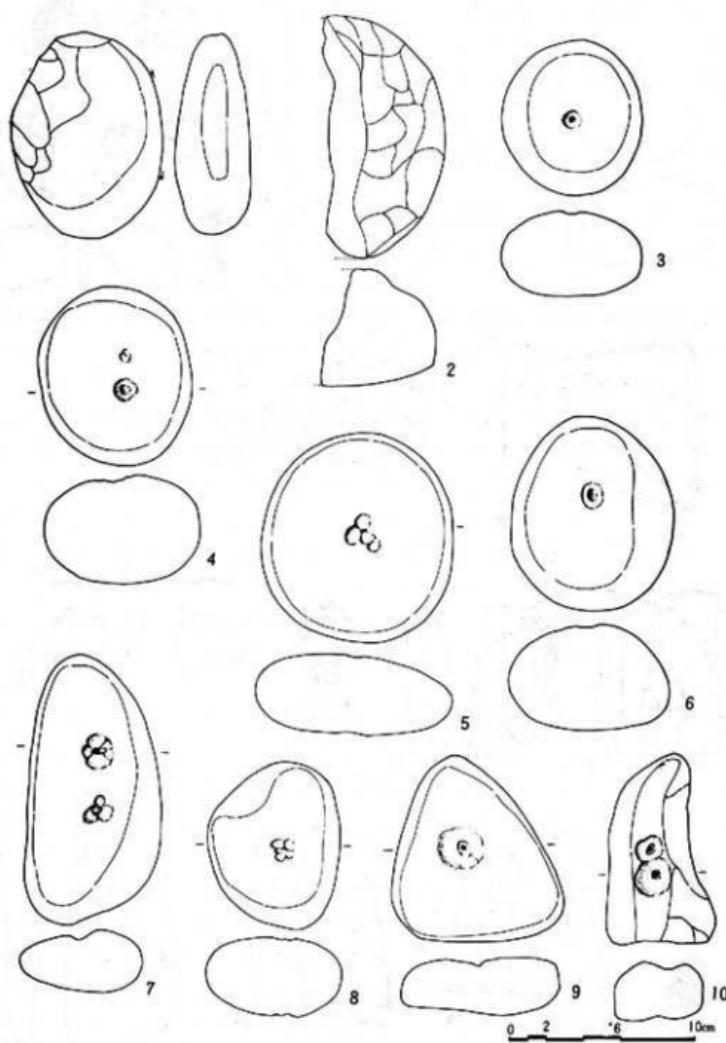


第23図 D-101・L~P-2~6グリット出土石器 (1:3)

(1・2・D-101, 3~28・L~P-2~6)



第24図 L～P-2～6グリット出土石器 (1 : 3)



第25図 L~P-2~6グリット出土石器 (1:3)



第26図 L～P-2～6・各住居址周辺グリット出土石器 (1 : 3)
(1～7・L～P-2～6, 8・9・1号周辺, 10～13・2・3号周辺, 14～18・4号周辺)

砥石(21)は小型で板状を呈し、表裏および両側面のほぼ全面に平滑な磨面を残している。砂岩製。

石皿(第28図3)は、縦・横33cmを計る円形で、その中央部に凹みの余り顕著でない研磨面がある。磨面は23×26cmの円形である。

D-101グリット(第23図1・2)

前述の階段状造構のすぐ下の地区にあたるが、打製石斧の刀部破片(2)とチャート製完形の石鎌(1)の2点が出土している。

L. M. N. O. P-2~6グリット(第23図3~28、第24、25図、第26図1~7)

石鎌12点、ポイント2、大型石匙1、打製石斧28、石皿1、磨石2、凹石8、磨石兼凹石2、スクレバー3、石錐1、石包丁1、石棒様石器1の計62点が出土した。

石鎌12点中完形は3点のみで他の9点は欠損品である。完形の(第23図3~4)は三角形鎌(5、6)は脚部が不完形をなしたすんぐり形のものである。欠損品は、脚部を欠くもの(7~10)、先端を欠くもの(11)、先端および左脚を欠くもの(12)、先端および右脚を欠くもの(13)などがある。なお(10)は当遺跡唯一の有茎石鎌である。また(14)はスクレバーのようにも考えられるが形態および加工から石鎌の中に含めておきたい。(10、12)が黒曜石製で他はチャート使用。

ポイント(16)は先端を欠いている。チャート製で、加工は精巧である。

大型石匙(17)は、原石から剥取した剝片を殆んど加工することなくそのまま使用している。硬砂岩製。

打製石斧28点中完形は11点(18~28)、欠損品17点である。完形品中短冊形に属するものは(18~26)までの9点あり、そのうち側刃にえぐりのないものが(18~22)。えぐりがあるものが(23~26)であり、刃部をみると丸味をもつもの(18~20、23~24)と直線的なもの(21、22、25、26)がある。刃部付近に磨痕が認められるものは(18、19、21、23、26)があり、側刃に磨耗痕があるものは(18~26)までの全点であった。撥形には(27~28)の2点があるが、(27)は側刃にえぐり込みがなく、刃部は丸味をおび、(28)は、えぐりがあり刃部はゆるやかな丸味をもつ。两者とも側刃に磨耗痕を有する。欠損品は頭部を欠くもの(第24図1~4)、刃頭部を欠くもの(5~9)、刃部を欠くもの(10~13)、頭部付近だけ残存するもの(14~16)があり、(17)は表面に研磨面が顕著に残されているので或は磨製石斧の中に入れるべきものかもしれない。(9~12)が硬砂岩以外すべてヒン岩製。

磨石は(第25図1、2)の2点がある。(1)は左辺の1部が欠失しているが、ほぼ橢円形を呈し、表裏側面ともよく研磨されている。側面の磨面は平滑でややザラザラしている。打痕を磨痕の痕

跡のためであろうか。上端には巾3cmにわたる打撃痕がみられる。安山岩製。(2)は3分の2ほどが失なわれているが裏面は平滑に研磨され側面とは穢をなしている。表面は全面アバタ状の凹凸となっている。ヒン岩製。

凹山の円形のものには(3~6)の4点があり、大きさは(5)の径11cmのものから(3)の径8cmのものまである。凹孔は表面に1孔のもの(3)、表裏に2孔のもの(4)、表にし、裏に2孔のもの(6)そして(5)は表に4、裏に2孔をもつ。凹みはそれぞれ浅く、ロート状に深いものは見当らない。梢円形のものは(7、8)があり、(7)は表に2、裏に1孔の打痕の集中したような深い凹み孔をもっている。(8)は表に5、裏に2孔あり、打痕が集中して凹みが作られている。この他(9)は三角形をなし、その表面中心に大きな円形の凹み1孔をもつ。(10)は不定形を呈し、表裏をも深い凹みの2孔を有する。

磨石を凹石との兼用品は2点あり、(第26図1)は表面に深い2孔を有し、表裏および側面は非常によく研磨されている。側面は巾1.3cmの帯状に研磨面が1周している。(2)は表面に不規則な凹孔が数孔みられるが、その上面がよく研磨されている。

石皿(第28図4)は径28cmのほぼ円形を示し、磨面は13.5×20cmで、深さ3cmを計る。砂岩製で、全体に火を受けて赤褐色を呈し風化がはげしい。

スクリーパー、(第26図3)は黒曜石の剥片下辺および左右辺に使用痕がみられる。(4)も黒曜石製で、下辺の1部に使用痕が存する。(5)は頁岩製のエンドスクリーパーで、丸味をもった厚い刃部が丁寧に作り出されている。

石錐(6)は、平面形をみると石匙のようにも見受けられるが、断面形は石錐状に部厚く、一応石錐としての用途を考えておきたい。

石包丁(7)は本遺跡では唯一の出土品である。半欠品であるが、刃部は外彫し、背部は弓形を呈し、欠損部分に1孔がある。硬砂岩製。

石棒様石器(29図)は、長さ40cm、巾9.5cmで、先端付近は扁平となり、末端付近で次第に部厚くなる。末端は表裏両面から粗い剝離が行なわれており、そのため薄くなっている。上半部はよく研磨され平滑である。砂岩製。

次に各住居址周辺のグリットから出土した石器類をみておきたい。

1号址周辺〔P-8・9グリット〕(第26図8、9)

打製石斧1、横刃型石器1があり、打製石斧(8)は刃が斜めに作られている。横刃型石器(9)は刃部が噛齒状に加工されており、全体がゆるい丸味をもっている。ともにヒン岩製である。

2・3号址周辺〔S-8・Q-10、QU-9グリット〕(第26図10~13)

打製石斧2、尖頭状石器1、スクリーパー1が出土している。打製石斧(10)は完形品で短冊形、側面にゆるいえぐりを持ち刃部は直線状をなす。(11)は刃部を欠損している。(10)は砂岩。(11)はヒン岩製。

尖頭状石器(12)は部厚く、作りは稚拙。チャート製。スクリーパー(13)はチャートの原石か

ら剥取された剝片を何ら加工することなく使用し、下辺に使用痕がみられる。

4号址周辺〔Q・R・S-5、P・R-6・7グリット〕(第26図14~18 第27図1~10)

石鎚2、打製石斧8、横刃型石器1、磨製石斧1、凹石1、スクレバー2が出土している。

石鎚第26図(14)は右脚の1部を欠するが、底部へのえぐりの少ない三角形状を呈す。(15)も右脚を欠失するが、加工は粗く大づくりである。チャート製。

打製石斧の定形品(第26図16~18、第27図1)は短間形に属し、(16)が側面にえぐりがないだけで、(第26図17、18、第27図1)はえぐりがみられる。刀部はほぼ直線状を呈す。欠損品(第27図2~5)は、(2、3)が頭部を、(4)が刀部を、そして(5)は頭部のみが残されている。全てヒン岩製。

横刃型石器(6)は第1次剥離によって作られた剝片の鋭利な縁辺を刃として使用している。スレート製。

磨製石斧(7)は刀部を欠くが、定角式で作りは精巧丁寧である。

凹石(8)は四辺形をなし、表裏面に不鮮明な凹みが存す。砂岩製。

スクレバー(9)は右辺に直線状の刀部を、(10)はノツチ状えぐり込みと、丸味をもつ刀をもっている。ともに部厚い剝片を使用している。チャート製。

その他の地区からの出土石器(第27図11~13)

この他Q-3、D-4グリットから石鎚1、横刃型石器1、磨製石斧1が出土している。石鎚(11)は底辺にえぐりのみられる完形品。横刃型石器(12)は、刀部円形の薄形で、原石面を残す。磨製石斧(13)は刀部を欠するが、非常に丁寧な作りである。

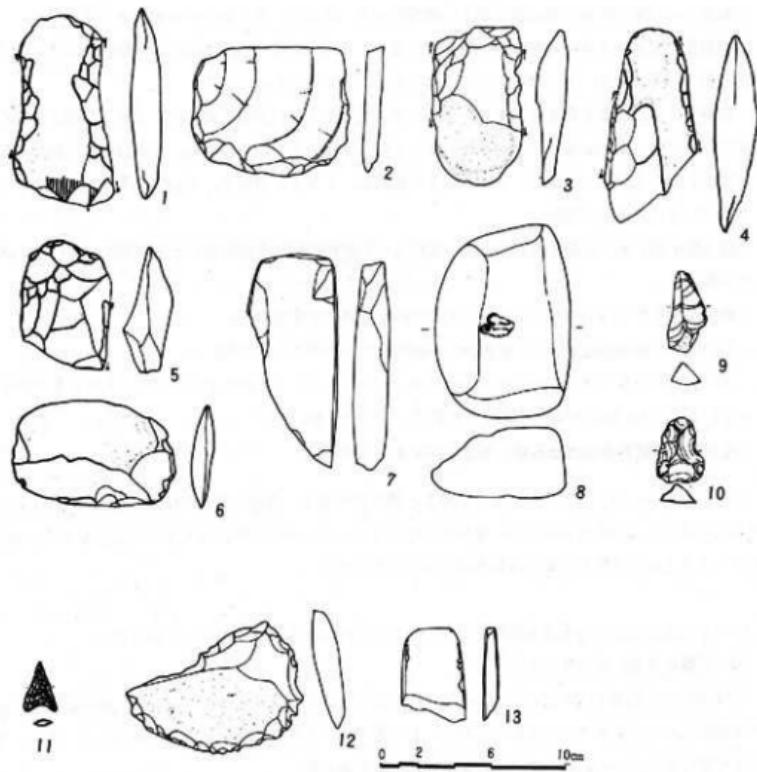
以上で本遺跡出土の全石器を概観したが、最後に石器のまとめを簡単にしおきたい。

(I) 石器の分布(第30図)

今回調査した範囲には粗密の差はある。全体的に石器の出土がみられた。しかし、傾斜の急な著段状遺構付近には余り多くの出土がみられず、L~Tグリットに石器出土が顕著であったといえる。特に4号址・3号址を中心とした地域に集中的に出土があった。

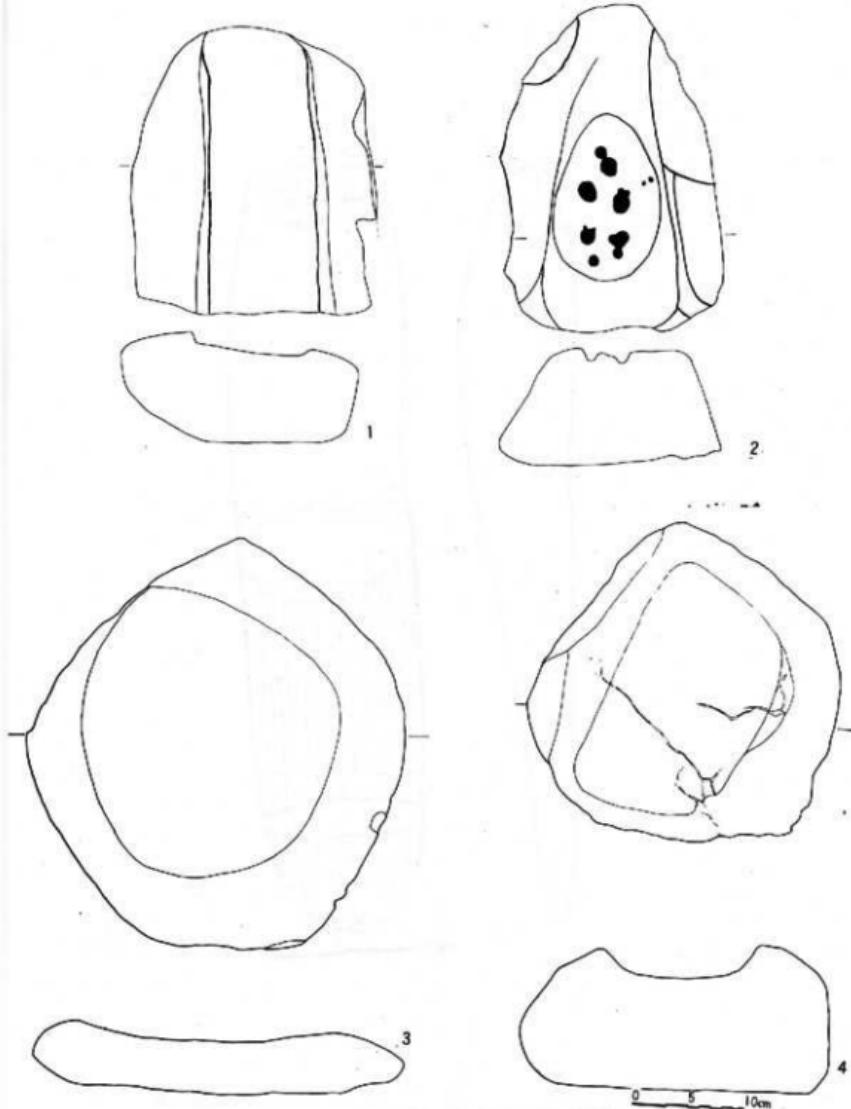
石器の器種別の分布状態をみると石鎚・尖頭型石器・石錐・スクレバーなどの剝片石器は別段集中地点もなくほぼ均一に分布している。しかし、打製石斧の分布をみると、3・4号址付近に集中出土し、他の地区にはそれ程集中する部分がない。一方磨石・凹石・石皿等の石器は、1~4号址およびL~Pの2~4グリットに出土があるが、量的に少量ということもあって集中出土はない。

このように打製石斧以外は偏在性がなく、打製石斧のみ集中性がみられる。しかもこの打製石斧が3・4号址の床面上および床面上層の集石中から多出したということは、1・2号址の僅少性を考え合わせて興味深い。

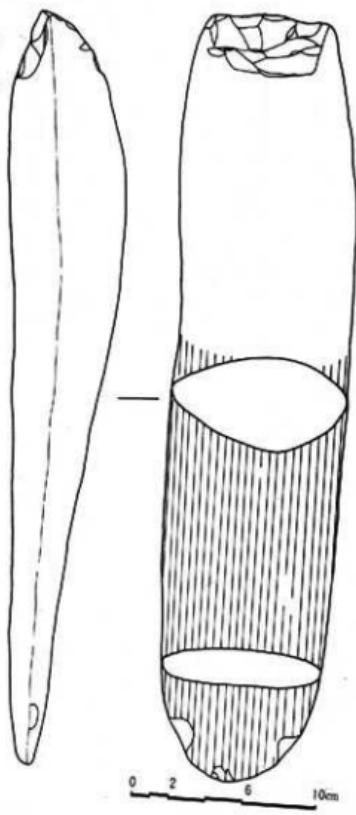


第27図 第4号住居址周辺・Q-3・D-4グリット出土石器 (1:3)

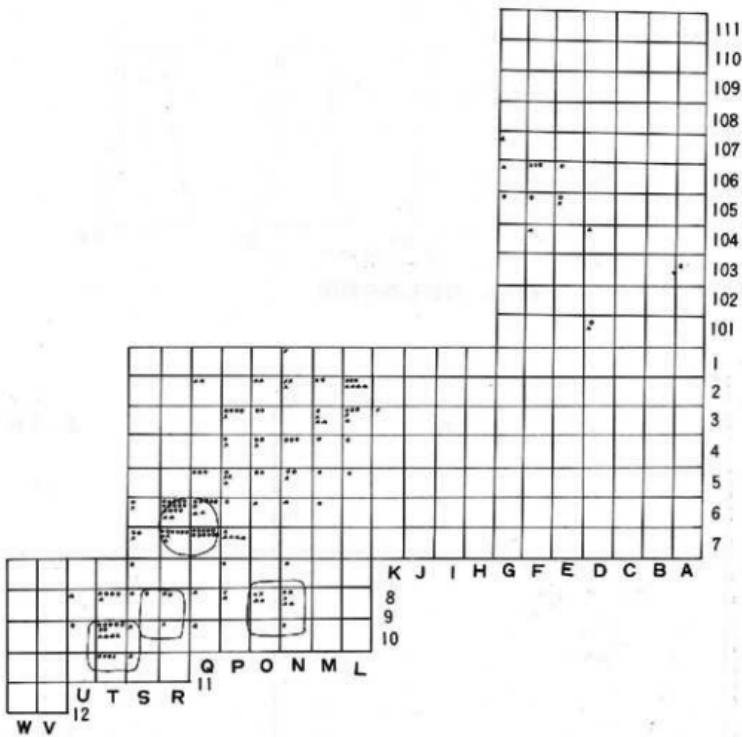
(1~10・4号住周辺, 11~13・Q-3・D-4)



第28図 石皿及び蜂ノ巣石 (1 : 5)



第29図 石棒様石器 (1 : 3)

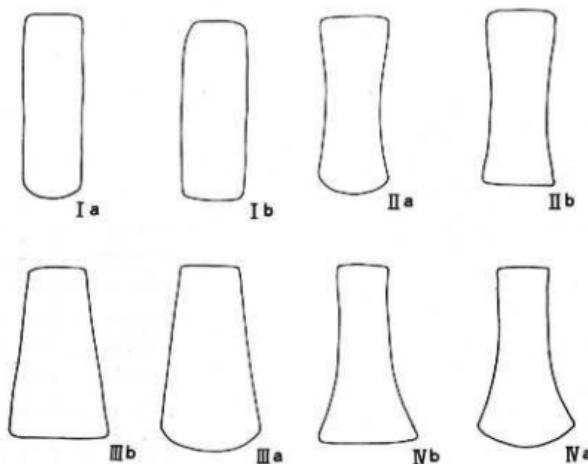


第30図 出土石器分布図

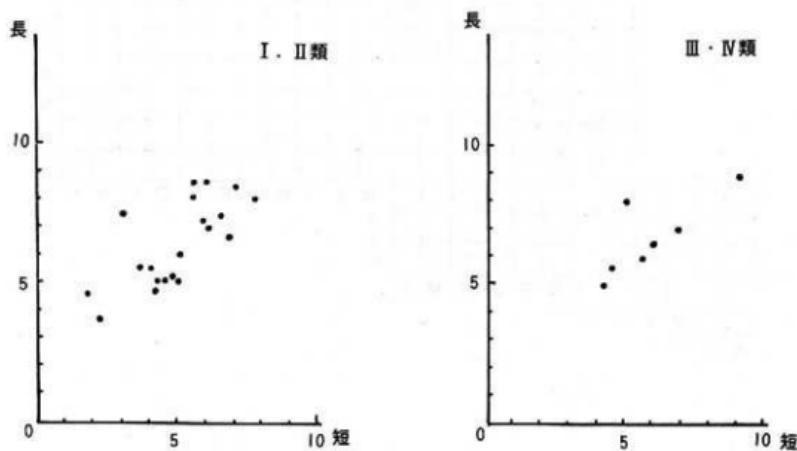
○ 打斧

× 石皿・凹石・磨石

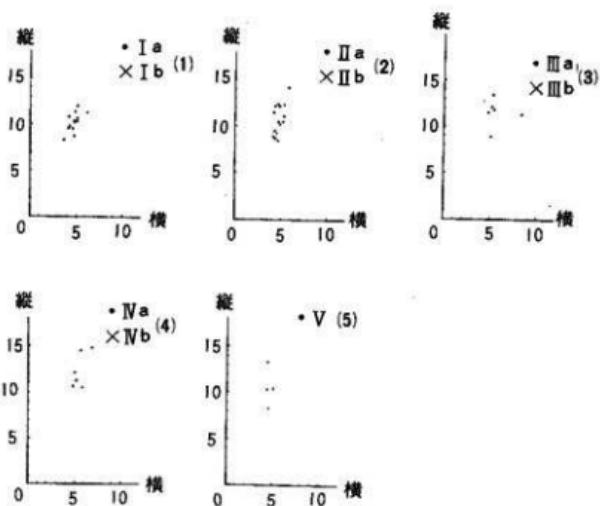
△ 石鎌・尖頭器・スクレイバ・石錐



第31図 打製石斧分類図

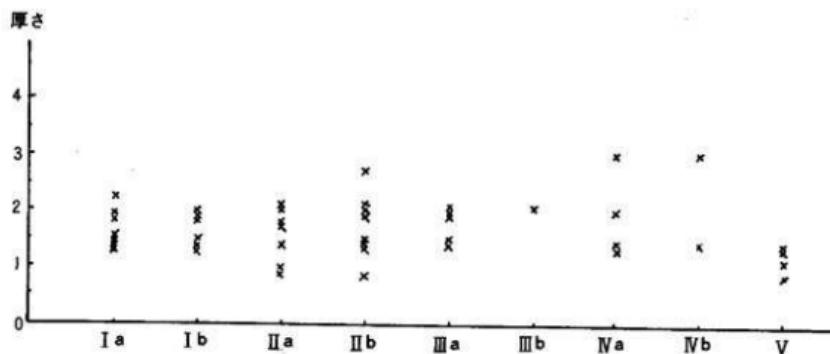


第32図 磨耗痕の範囲

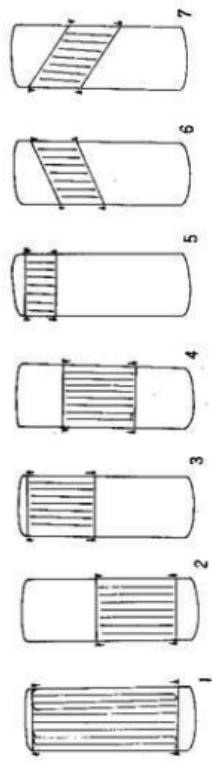


第33図 打製石斧の大きさ

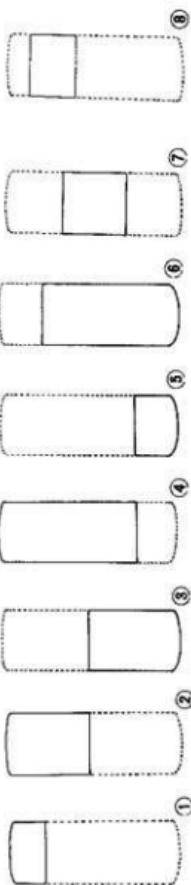
(1)I類 (2)II類 (3)III類 (4)IV類 (5)V類



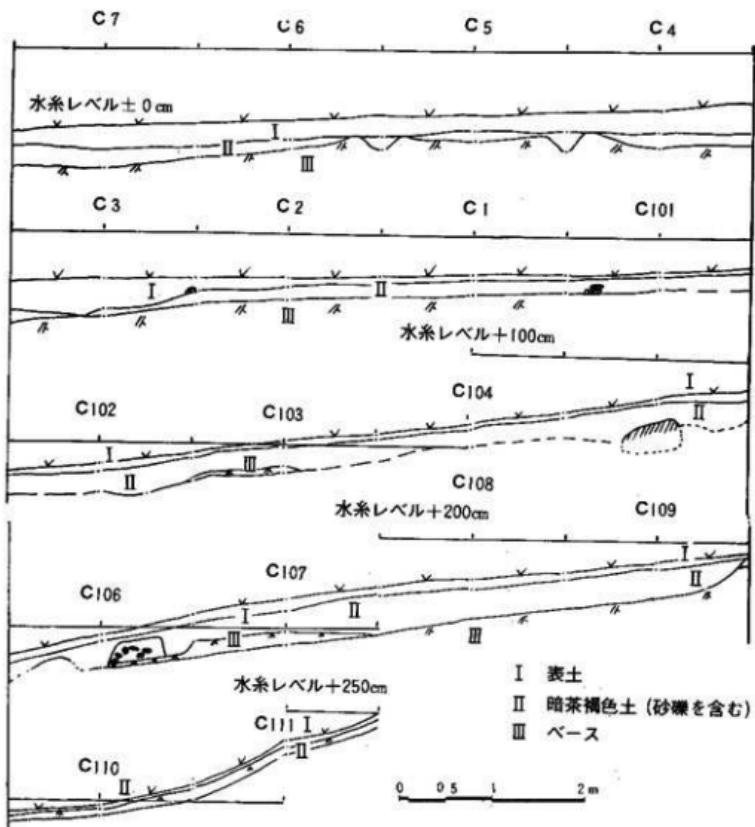
第34図 打製石斧の厚さ



第35図 打製石斧の側面磨耗模式図

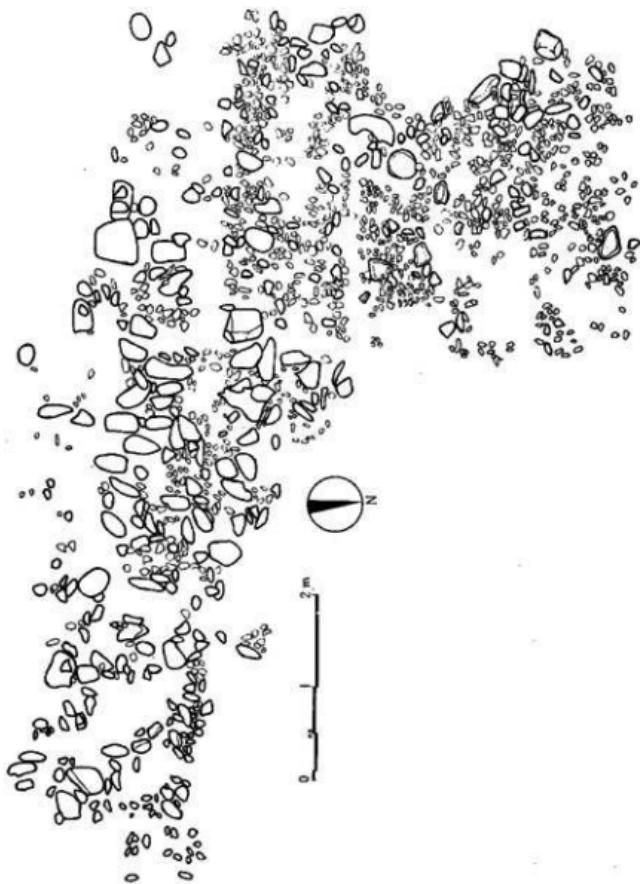


第36図 打製石斧欠損模式図



第37図 西地区Cトレングセクション (1:60)

第38圖 階段狀遺構 (1 : 60)



② 石器組成

今回の調査で出土した石器は総数 188 点で、その内訳は、石鎚 24、尖頭状石器およびポイント 5、石匙 2、打製石斧 102、横刃型石器 8、石皿 3、磨石 4、凹石 11、蜂ノ巣石 1、磨石兼凹石 3、凹石兼叩石 1、磨製石斧 3、石錐 4、スクレバー 11、石錐 1、石包丁 1、石棒 2、砥石 2 であった。

出土石器中最も多いものは打製石斧で全石器の 54% を占めている。また打製石斧の生産活動部門に属する石器、石皿、磨石、凹石の出土量をみると、12% を占め、植物採集活動に関する石器は実に全体の 7 割近くを占めることになる。このような打製石斧等を重視する石器組成は縄文中期中葉から末葉にかけて中部・関東地域に特徴的に認められている。本遺跡も同じ組成を示しているといえる。しかし、狩猟具である石鎚は全体の 12% を占め、他遺跡に比較し、多くの出土があり、当遺跡の特徴といえる。

③ 打製石斧について

本遺跡で最多量を示した打製石斧について簡単に触れておきたい。

④ 形態

形態をうかがえる完形品は 44 点あり、短冊形 28、撥形 12、そして頭部が尖頭状となすものが 4 点ある。短冊形、撥形はそれぞれ脛部のくびれ具合と刃部の状態で幾つかに分類することができる（第 31 図）。一応以下の 9 つに分けておきたい。

- { I a 短冊形で刃が丸味をもつ
- { I b 短冊形で刃が直線状をなす
- { II a 短冊形で脛部にえぐりをもち、刃部が丸味をもつ
- { II b 短冊形で脛部にえぐりをもち、刃部は直線状をなす
- { III a 撥形で刃部は丸味をもつ
- { III b 撥形で刃部は直線状をなす
- { IV a 撥形で脛部にえぐりをもち、刃部は丸味をおびる
- { IV b 撥形で脛部にえぐりをもち、刃部は直線状をなす
- V 頭部が尖頭状を呈すもの

なお、刃部の形状は使用度合によっても変化する性質のものであることを付記しておきたい。

I a に含まれるものは（第 20 図-4、第 23 図-18）など 6 点、I b は（第 20 図-7、第 23 図-19）など 7 点、II a は（第 19 図-6、第 22 図-11）など 7 点、II b は（第 19 図-7、第 20 図-4）など 8 点、III b は（第 20 図-14）の 1 点、IV a は（第 23 図-27、28）など 4 点、IV b は（第 19 図-8、第 20 図-17）の 2 点、V は（第 20 図-18、19）の 4 点である。短冊形に属する【、】類ではえぐりの有無を問題にすれば有るもの 15 点、無いもの 13 点とほぼ同量を示し、また刃部の形態をみると丸味をおびるもの 14 点、直線状を呈すもの 14 点と同数を示している。これに反し、撥形ではえぐりのあるもの 6 点、ないもの 6 点で同数であるが、刃部は丸味をお

びたものが9点、直線状のものが3点で、丸味をおびたものが圧倒的に多い。

④ 大きさ

打製石斧の大きさを(第33図)によってみてみたい。

【a】では長さ10~12cm、巾4~5cm。【b】は長さ8~11cm、巾4~6cmで【a】がやや縦長であるのに対し、【b】は巾広のものがあるといえる。【a】は長さ8~13cm、巾4~5cm、【b】では長さ9~13cm、巾4~6cmで【類】に比較し、全般的にやや長目である。

【a】では長さ9~13cmの間で、中心は12cmで、巾5cm、【b】は1点のみであるが、長さ11cm、巾8cmである。【a】では長さ11~12cm、巾5~6cm、【b】では長さ12~15cm、巾5~7cmである。短冊形の【】・【類】と撥形の【】、【類】とを比較してみると、短冊形より撥形の方が若干縱長傾向にあることが分かる。

厚さはどうであろうか。【a】、【b】は1.5cmを中心にして、統一感が感じられるが、【a】、【b】は1~2cmとやや厚目となり、しかもバラツキ傾向となる。撥形では【a】、【b】、【a】、【b】とも2cm前後が中心となり、短冊形より若干厚い。(第34図)

以上のように短冊形は、撥形に比較し、薄手、小ぶりな形態を中心とするのに対し、撥形は厚手、大ぶりで頑丈な作りであるといえよう。

⑤ 側縁の磨耗度

打製石斧の縁辺を観察してみると、第1次側離時の鋭利な縁辺を2次調整し、刃剥しを行ない、その部分が磨耗していることがある。磨耗の状態は第35図のように7つに類別できる。【a】では7本すべてに磨耗度がみられ、①が2、③が1、④が2、⑥が2、【b】では①が1、③が2、④が1、⑦が1で、片側にのみ認められるものが1点あった。【類】ではa、b合せて①③④が主体を占め、⑥⑦がそれに次ぐといえよう。次に【類】があるが、【a】では①が1、④が1、⑥が1で、片面のみのもの2、磨耗がないものが2点あり、【b】では①が3、④が1、⑥が1で片側のものが1。他の2点には磨耗が認められなかった。【類】ではa、bとともに①④⑥が中心となり、【類】にみられた③は見当らなかつた。また磨耗度のないものも多かったことは注意しなければならない。このように側辺にえぐり込みのある【類】は、えぐりのない【類】に比べ予想に反して側辺の磨耗度は顕著でないことが指摘でき、えぐりが作出されていれば、殊更着柄部の作出は不用であったといえようか。

【a】では②が1、③が1、④が1、片面のみが1。磨耗がないもの1、【b】では③が1、【a】では①が1、②が1、片面のみが1。ないもの1、【b】では③が1、ないもの1である。撥形の【】、【類】では、②③および片面のものが多く、更に磨痕のないものも多い。撥形は全側面にあるというより、その1部分に磨耗があるものが主体を占めている。

このように短冊形でえぐりのないものに磨耗は顕著で、全側面と脚・上半部に多く認められ、えぐりのあるものになると磨耗をもつものは次第に少量となり。撥形では更に少なることがわかる。着柄方法の相異つまり使用方法の相異を表わしているのかもしれない。

磨耗痕の範囲はどうであろうか。短冊形、撥形を大きく分けて図にしてみた(第32図)。

短冊形では長い方が5~6cm、短が4~5cmの範囲に含まれるものと、長7~9cm、短5~7cmに含まれるものとに分けられる。撥形にはこうした統一性はみられない。このことから、もし磨耗の範囲が着柄部分を表わしていると考えれば、短冊形では径5~6cm前後のものと、径7cm前後の太さのものが着柄されていたといえるかもしれない。一方撥形に関しては統一的な太さの柄は使用されなかつたといえようか。

① 欠損（第36図）

打製石斧は総計102点出土し、そのうち56%にあたる58点が欠損品であった。実に半数以上が何らかの形で破損していたわけである。

破損部分を類型化すると、図のように8つに類別できる。①は頭部のみ残在するもので9点。②は頭部から胸部まではば2分の1を残すもので5点。③は刃部を欠くもので欠損品中最多数の16点。④は刃部のみ残っているもので4点。⑤は刃部を含めて下半部の2分の1があるもの5点。⑥は頭部のみ欠くもので7点。⑦は胸部のみのもの6点。⑧は首の部分のみで2点。この他部分不明が4点であった。

このような欠損状態を頭部・刃部に分けて考えた場合、①~③は刃部を欠くもの、④~⑥は頭部を欠くものと大別できる。すると刃部を欠くものは30点。頭部を欠くもの16点となり、刃部を欠くものが多いことが知られる。刃部欠損品が多いということは使用時の状態を示しているといえるが、このような状態で出土することが顕著であることに關して、小田静夫氏は「縄文中期の打製石斧」（どるめん10）の中で「柄に付けられて持ち出された打製石斧は、集落外のどこかで使用され刃部の欠損をひきおこす。欠損した刃部は当然その場所に捨てられ、頭、胸部分は柄に結わかれているので、柄を持ち帰り、新しい打製石斧をと取り換え作業をする場所、つまり集落内に捨てられる訳である」という見解を示されている。現在の所、否定も肯定もできないが興味深い見解である。

以上打製石斧について、その特徴について幾つか観察してきたが、資料が少ないとともあり充分意を尽くせなかった。打製石斧は最近、多方面からの発明が行なわれつつあり、それらの研究成果の再確認にとどまった点多い。

（小林康男）

3. 古代・中世遺構

明科町に、中世末期を中心として存在したであろう、こや城の消息については、信府統紀、第十八、松本領古城記目録に、下記の如く記されている。

一、明科小谷山古城地、明科村高札場ヨリ寅ノ方、七町五十四間、本城ノ平、南北十七間、東西六間、二ノ曲輪、東西六十七間、南北三十三間、城主知レス。

と書かれている。長年月の歴史を経た現在では、その城址遺構として、主郭、郭、堀割等が残存している。ここではそれらの中、発掘調査の対象となった、城址北部地帯の一部について、明らかにされた遺構、遺物等を、別項により順次取り上げて報告にかえたい。

西地区概観(第7図)

本遺跡の古代、中世に所属すべき遺物、遺構は、縄文期のそれに比し稀薄となるが、位置的には、発掘調査箇所の西部台地上の縁辺に、まとまった感をいだかしめる。現場は、南より北に向けてゆるやかな傾斜地となっていて、南接して一段と高いこや城の本丸主郭に通じ、西及び北面は、垂涯を形成する台地の縁辺に位置していて、眺望をよくしながら、平地部や会田川に通じている。発見された遺構としては、主郭北直下の商に仕組まれた、階段状を示す石組の列。その前面の溝状遺構、設営址とみられる方形堅穴遺構、不整方形の堅穴遺構等があげられる。

これらの遺構が発見された西部地区の37図。南北に亘る代表的な層序は、第37図に示すCトレシテ西側断面によって、知ることができる。これによれば、北端のCトレシテ7区より、同1区、同101区までは、南に向けてほぼ平坦に近い、ゆるやかな上り勾配を示しているが、同102区より同111区までは、平均10分の1.4mと云う強い勾配を示して立ち上っている。又、第1層は、表土(黒色土)、第2層は、砂利及至は砂礫を含む暗茶褐色土となり、第1・2層共、遺物、遺構の内包がみられ、第3層は基盤に至っている。第1層は、Cトレシテ7区より同3区までが20~40cmと厚く、第2層は0~20cmとうくなる。Cトレシテ2区より同111区までは、第1層が10cm前後とうくなるが、第2層は逆に15~40cmと厚くなる傾向をみせている。

階段状石組遺構(第38図)

本遺構上は、発掘前特別な起伏をもたない傾斜地であったが、発掘後確認されたもので、南接する主郭の商を、東西方向に走る階段状の土槽を、施設した遺構の一部かとみられるものである。発掘箇所より未開地帯への伸長が予測されるものであるが、その全容を把握するまでには至らなかった。従って、その遺構の用役や、主郭との関連については、明確な結論を引き出し得なかった。階段状の石組は、土槽設営の際、芯を強固にするため埋め込まれた感があり、石の大きさは、大は30×50×50cm、20×30×45cm程度、小は、こぶし程度で粒は撒わらず、どちらかと云えば、こぶし大から人頭大のものが主体をしめていた。石の材質は、砂岩、安山岩、砂岩等、こや城下を大きく宇曲する、会田川水系の転石が用いられていた。

土を除去された石組は、整然さに欠け、全体的に崩れをみせている。これは階段状の土槽が、主郭より急直下の商に設けられ、更に下方に向けて傾斜する悪条件下におかれためで、おそらくは設営後改修されず、今日にいたるまで放置されたことに起因するものであろう。石組内やその上層土からは、中世の内耳土器片が頗著に出土し、これに陶器類の破片や、縄文中期土器片・石器等が、量的には少く混在していた。

遺構は、第38図に示す如く、二段構の土槽であったらしく、その上面巾は各段共約150cmであり、高さは、両段共約30cmとなっていて、主郭への取つけに通じていた。確認された範囲では、上段の長さは約950cm、下段の長さ約600cmである。考えられることは、主郭直下の基部をかためた施設で、それが土崩れ防止と、引いては警護をねらってのものかと推測される。又、この階段状施設の前面に平行して、発見された溝状遺構も、おそらく関連性をもつものであろう。

溝状遺構(第7図参照)は、E・F・G各トレンチの、各104区に亘り、-42~-48cmの黄褐色土上面に検出される。この遺構は、東西方向に長く410cmを記録し、上面径の巾は約32~35cm、深さは約30~40cmであった。溝内より中世陶器片2個、縄文土器細片微量の検出があったが、溝を性格づける資料は出土しなかった。

堅穴・落込遺構(第39図・第40図)

それぞれ性格の異なる堅穴と落込遺構が、地点を別にして二箇所より検出される。

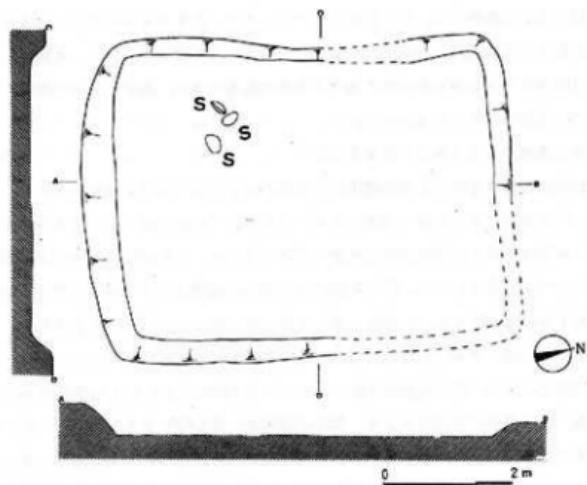
その1。第39図にみられる堅穴は、C・D各トレンチの各1区、101区、102区に亘る、表土下約15cm面の砂礫を含む暗茶褐色土層中に発見される。方形の堅穴の規模は、東西方向約300cm、南北方向約410cmであり、床面平坦にして固く、南壁は約34cm、東壁約23cm、西壁約15cm、北壁約15cmを記録する。いづれも垂直に近い壁を形成していた。該遺構上は、-28~-50cmに亘る第1・2層中より、おびただしい中世の内耳土器の破片が出土し、炭化した穀粒がまとまって、各所に検出される。内耳土器の破片は、いづれも土師時代のそれとは様相を異にするものであり、胎土、色調、器の表面の塗料等により、容易に識別され得る類である。炭化した麦とみられる穀粒は、Cトレンチ101区の1事例を示すと、-45cm面に南北方向40cm、東西方向35cmの、ほぼ円形の範囲にまとまり、その堆積は約5cmであった。これらの穀粒に混じて、中世内耳土器の破片が14片検出される。(トレンチ102区からは、25cmあるいは100cm円形の範囲にわたって分布し、ことに床面に密着して、45×110cmの広範囲に、約10cmに及ぶ堆積を示す穀粒炭化物が、内耳土器片の散在と共に認められた。

又、この堅穴遺構内には、その床面上5~25cmにかけて、顯著な木材・茅などの炭化物が堆積充満していた。これらの中には、長さ90cm、横巾27cm、厚さ7cmの厚い板材や、上屋に葺かれたと思われる、茅の厚い炭化層が確認される。

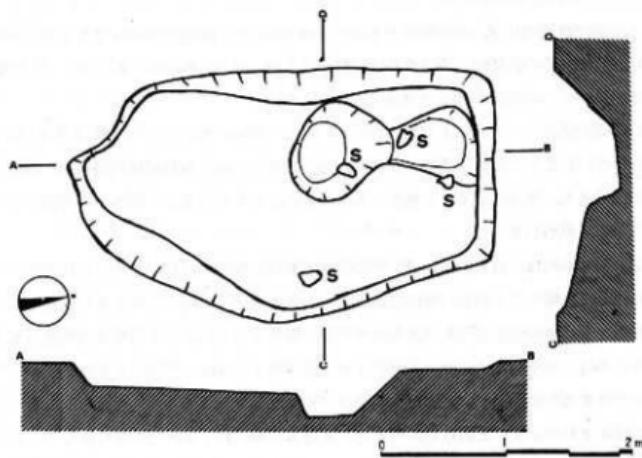
この方形堅穴遺構は、遺構内よりおびただしい穀粒が認められたこと、多量の内耳土器片と共に石臼が混在していたこと、などの遺物遺存状態から、おそらくは中世城郭に附隨した、穀倉的な機能をもつ建造物であり、戰時に備えての施設であったものと考えられるが、何等かの事情で火災にあって焼失したものと思われる。

その2。第40図は、M・N各トレンチの各5・6区に検出された、不正方形の落込みである。-30cm面の第二層中に出現し、規模は南北方向約340cm、東西方向約160~200cmである。第1層の黒色土より褐色土層に落込みをみせたが、黒色土部分の落込みの深さは明確を欠き、褐色部分の落込みは、南壁約17.3cm、東壁約9cm、北壁約12.3cm、西壁約27cmを記録した。落込み内は、黒光りする土に混じて、木炭粉末が多量に充てんしているのが認められ、中世の内耳土器片が目立って検出された。又、この落込み内には、北壁より南へ約7.5cmの西壁に接して、更に円形の瘤状のビットが認められた。このビットは、約70×80cmの円形で、深さ26cmの規模であり、内部より焼灰と共に、中世内耳土器の底部破片が若干出土する。これらの落込み内の遺物出土や、覆土の状況から、露天に設けられた中世の炉址ではないかと推測される。

(大久保知巳)



第39図 C, Dトレーニチ101, 102区方形堅穴遺構 (1:60)



第40図 M, Nトレーニチ5~6区不定形堅穴遺構 (1:40)

4. 古代・中世遺物

ここに報告する遺物は、古代・中世に所属するものを取扱った。完形品は鉄釘、墓石を除きすべて破片で、採用された資料は、いづれも図上復元されたものである。土器、陶磁器類のうち、量的に最も多いのは中世内耳土器片であり、総数67片を数え、それに少量の須恵器6片、灰釉陶器4片、青磁5片、磁器3片、鉄釘4本、石臼2個、墓石1個等等が含まれる。整理上、資料には一連番号を附し、以下、遺物を分類し種目別に報告したい。

イ. 土 器 須恵器(第41図1~2)

須恵器6片の内、採用された資料は2片である。1は小谷城址北西部の、郭の石垣清掃中に発見されたもので、須恵器杯の口縁部破片である。この種のものでは唯一の出土例であるが、平出の土器編年様式からいえば、第2様式に属し、須恵器編年からいえば、須恵器第1様式に含まれる。関東の鬼高式期でも比較的古い位置に比定され得るもので、年代的にも6世紀前半に含まれるものと思われる。口径は約16cm、杯立ち上りの蓋受け上の壁高は1.3cmで、調整のよい仕上げである。2は、Dトレント104区の第2層集石内より検出された、須恵器大形甕の頸部破片であり、口縁部への立ち上りを欠いている。頸部の直径は約21cm、内面に青海波文、外面上には格子状文が残され、器肉は0.8cmと中厚手である。須恵器様式から10世紀前半に含まれるものであろう。

青 磁 (第41図3~5)

活用できる資料は3片であった。3は、F・Gトレント2区の第1層出土で、高台外壁の直径は約7cmである。底部の器厚1.5cm、器壁0.7cmの、どっしりした椀形を示し、内外に草色の色調をもつ釉薬で草花が描出されている。4は、Mトレント2区の第1層出土の青磁で、おそらくは底部に近い腰部の破片であろう。3と同じく厚い釉薬がかけられ、その色調は鮮明な青磁色をとり、ガラス質被膜には細かなはしづれがみられる。5は、Eトレント103区の、-34cm出土の底部を欠いた椀形青磁の破片であり、口径は約10.5cm、器厚は0.5cmとうすく、口縁に細まりながら集約し、色調はうすい水色となっている。

中世土器(第41・42・43図6~36)

中世所属の土器類を一括した。内耳土器がその主体をしめており、杯、小形土器がこれに含まれる。

a 内耳土器(6~18・20・23~36)

6~18までは、中世内耳土器の口縁部破片であり、6・7・12・13がRトレント5、6区の集石中、8~11・14~17が遺跡西南部の階段状石組内、18がMトレント6区の検出である。
○いづれも口唇上に0.3~0.5cmの面取りがあり、器厚は0.8cm前後となるものが多い。色調は暗褐色系をとり、外壁の黒い6などがある。又、その殆んどに輪廓整形痕を残し、8・15・17などは、その痕跡を強くして有段状ともなる。口縁部はその殆んどが直立気味の成形をなすが、7・17の如くやや外傾して開くものもある。口径は6・8・13が約29cm、9・10が約26cmとなっている。20は石垣内より出土する。大形内耳土器の、底部に近い脚部破片で、中央部附近の脚直径は約31cmである。器厚は1cmで厚く、壁調整はよく、外壁は赤褐色、内壁は暗褐色となっている。

23～36は、いづれも内耳土器底部破片の復元図である。この中、23・26～34・36までが、遺跡西南部地帯の、階段状石組造構内よりの出土であった。縁じて外側壁は黒色、内壁は暗褐色、系が多く、稀に赤褐色を呈するものもある。器厚は壁が0.8cm前後を示し、底部は0.5cm程度にうすくなるのが大部分であるが、26～28の如く0.9cmと厚手の底を示すものもある。底部径は、23～25・27までが2.04cm、28～34までが2.16cmで主体をしめ、26が2.48cm、35が2.5cmを記録する。器形はその基部に加修がなされるものと、なされないものとがあり、26・29・32～35は、いづれも加修されており、特に34は明瞭である。これは底部の補強と、体級を良くしてのもので、器の立ち上りの基部側面を1cm前後肉厚とし、外見的には高台的な感じを与えている。壁の立ち上りは、やや外傾しながら開き、腹部から口縁に向い直立するものの如くである。

b 杯 (21)

Gトレンチ107区の石組内より出土する。中世の祭祀用の小形杯とみられるものであり、焼成よく黄褐色を呈する。糸切底の径は約8cm、器の高さ3.2cm、口径は1.2cmである。内面には細かに平行する調整痕が整然と残り、外面は、離壇調整による凹帶が二段横歩している。底部器厚は0.5cm、器の立ちあがりは波をうちらながら外反し、口唇は丸味をもって細まる。

c その他土器 (19・22)

19は、階段状石組内より出土した土器口縁部で、内耳土器とは異なる土器である。口唇上に1.3cmの巾広い面取りがあり、直線的な下降を示し、上縁より4cmの下部に、器内に貫通する直径0.3cmの小穴が1箇所ある。口径は約2.26cmで、焼成よく内外褐色を呈し、内壁の調整はよいか、外壁は調整痕が残る。

22は、Rトレンチ5区の集石中より出土し、内外暗褐色を呈する小形土器の底部破片である。底径8.8cm、器厚は底部が0.5cm、立ちあがりは1cmである。

その他遺物 (第43図37～41、第44図42・43。)

その他の遺物をまとめて取扱った。以下、種類別に説明したい。

a 鉄釘類 (37～40)

37～40は鉄釘の類である。P・Qトレンチの10区周辺出土であり、共に腐蝕がみられるが、いづれも角形を示し、37が 0.5×0.5 cm角で長さ約1.05cm、38が 0.4×1.3 cm角、長さ約7.8cm、39が 0.3×0.6 cm角、長さ4.5cm、40が 0.4×0.5 cm角、長さ約1.1cmとなっている。山城の附属施設に使用されたものであろう。

b 莖石 (41)

41はFトレンチ106区、-39cmの集石上より出土した莖石で、直径2.1cmの円形、厚さ0.35cmの黒色である。

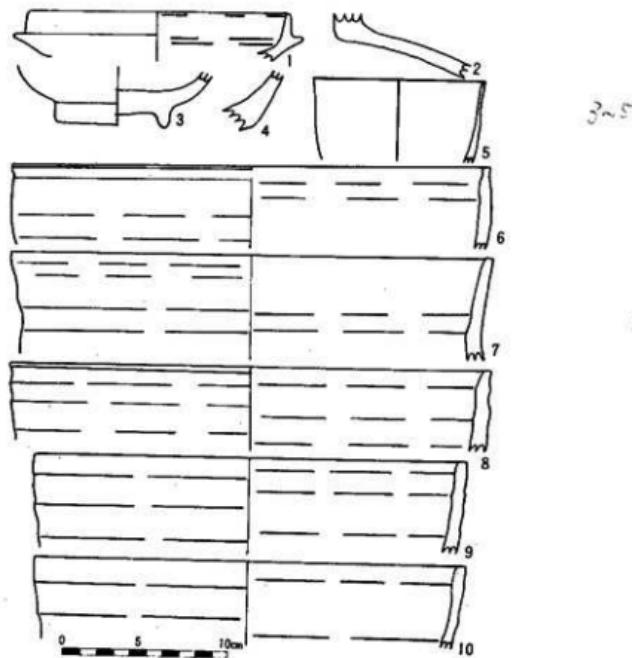
c 石臼 (42・43)

42はCトレンチ102区出土、43はこや城の大手にあたる、西北下の郭の石垣に使用されていて検出された。出土地点を異にしていて、材質は共に安山岩。いづれも欠損品である。42は破損度

が著るしいものの、中央部附近に高さ約3cm、巾約8.5cmの凸出部がみられ。縁辺には高さ1cm、巾2cmの縁どりが設けられる。直径は約31cm余、最大肥厚は約11cmを数え。擔當面には、0.2cm程度の細かな溝が、密に平行して刻まれている。

4 3はその直径が約32cm、最大肥厚約12.5cmである。その中央部に深さ約3cm、直径約3cmの円形の凹みがあり、中心部と片側の端との中間に、表裏に通する穴が貫通している。穀物を擔當面に落込むための穴で、その規模は直径2~3.5cm、長さ約1.05cmである。又、反対側の側面には、石臼を回転させるための、把手差込用の約2~4.5cmの穴があけられている。擔當面には0.3~0.5cm巾、長さ6~10cmの溝が、10cm余毎に平行する方向を変えて、密に刻み込まれている。中世の山城には、石臼の伴出する事例が多いと云われる。

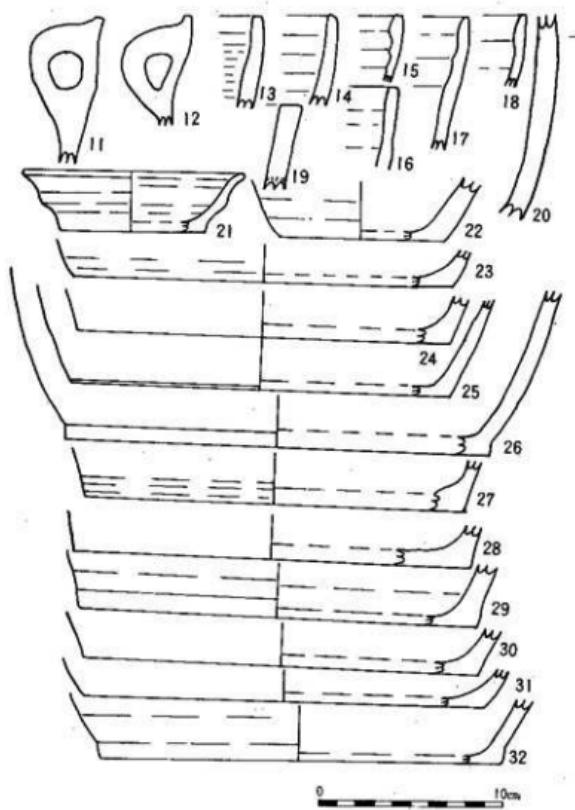
(大久保知巳)



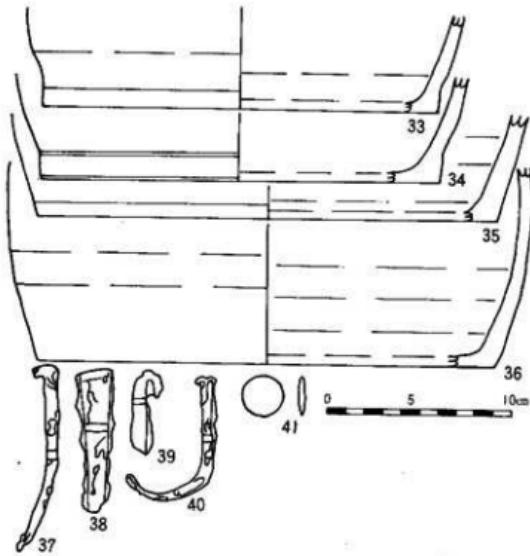
第41図 中世土器（その1）(1:3)

3~5 脱石盤

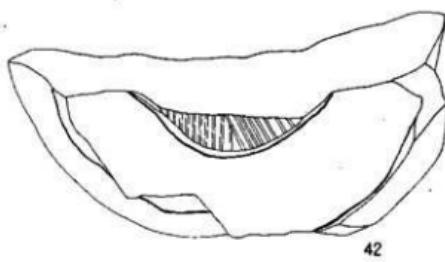
6~10 内耳大器



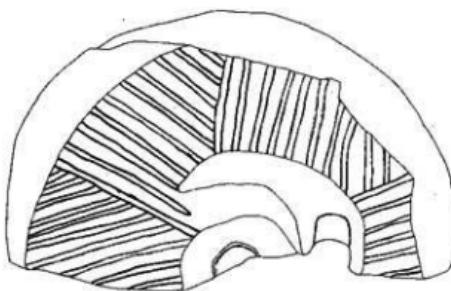
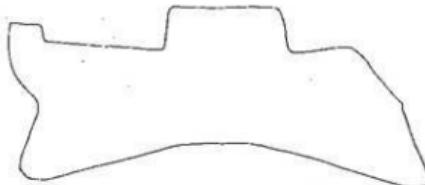
第42図 中世土器 (その2) (1:3)
21 杯 他は片耳土器



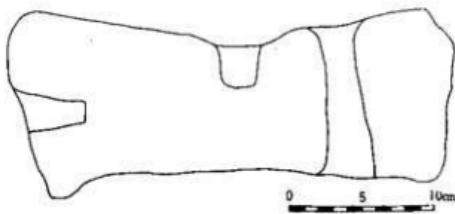
第43図 中世土器（その3）、鉄釘類、墓石（1：3）
33～36 内耳土器 37～40、41



42



43



第44図 石臼 (1:4)

第4章 調査の総括

第1節 遺跡調査の総括

すでに述べられたような経過で、調査の委嘱をうけた筆者は、調査団の結成についてはつきのような配慮をした。

即ちこの遺跡が縄文時代中期の遺跡であることは、昭和25年から行われた「東筑摩郡・松本市・塙尻市郷土資料編纂会」（略称郡市誌編纂会）の考古班の諸調査、及び同年次を中心に行われた「信濃史料刊行会」「長野県教育委員会」の埋蔵文化財の分布調査により明白であった。

しかし、その調査は表面採集を中心とする分布調査であるので、その本体は全く不明であった。また古墳砦については、同じく郡・市史編纂会の歴史部の調査を経ているが、これは小規模な城館跡であるので、一応の現地調査にとどまり、その所在を知った程度であった。今回の行動上の緊急発掘調査は、一部この地を破壊するところから、大きな期待のないまま、手頃な調査として発足したのである。

しかし、この調査の対象地は、明らかに原始・古代・中世を経て、現在明科町の公園となっていることにおいて各時代各様の複合遺跡であることは間違いない。これを総合調査とし扱うことは意義深いことであり、しかも町当局計画中の町誌編集に対しても、一資料を加えることであるので、それをも考慮して着手したのである。

1. 自然的調査

こうした複合遺跡の展開する茶盤となる自然調査については、まず地形・地質・岩石を対象とするので、郡誌編纂時の自然部地学班長をつとめた太田守夫氏に依頼した。

その結果、この台地の成因・地形の構造を明らかにすることができ、また地表土壤の厚さ、疊の堆積、基盤となっている第三紀層の岩石・地層についてあきらかにされ、また遺跡の住居跡・出土の石器・城砦の石垣に使われた岩石の本体について、専門的な知識を得た。その詳細について第2章において太田氏の述べているとおりである。

2. 考古学調査

考古班の調査として、この小台地上の $\frac{1}{3}$ の地帯を全面発掘することであったが、主体が縄文時代中期であることを見越して調査の重点をここにおき、平出遺跡考古博物館の学芸員小林康男氏・中信考古学会の代表役員である中島豊晴・大久保知巳・松本市教育委員会の神沢昌二郎氏らをえらんだが、

特に地元明科町の住人では大沢哲氏を起用し、小林康男氏とともに調査主任を依頼した。

中世城館跡の調査は原が分担し、文書古記録・伝承・地名と当時の歴史的事情を勘案し、発掘の面では大久保氏がこれに当った。

その結果を総括すると、考古学的な調査の面では、当地方に例の少い、敷石住居跡四軒を検出し、それに伴う土器・石器を多量に発見した。敷石住居跡は、東筑摩波田町の葛原遺跡、南安曇郡梓川村の上野遺跡、塙尻市宗賀牧野に調査例をみると、本遺跡のように四軒の住居址と多量な遺物の出土ははじめてであった。なかでも第4号住居址の場合は、ほぼ東西南北に石柱をもつなど、全く異例のものが発見されている。住居跡の配列からみて、この台地上にはなお多くの同様住民跡が発掘される可能性は大きいが、今次の発掘の対象地が、それに及ばず、なお $\frac{2}{3}$ を残したことは残念であった。町当局独自による学術的発掘調査が、今後行われることを期待したい。

この住居跡に伴う遺物は大別して石器・土器であるが、別に第4号住居跡からの獣骨即ち鹿の骨の出土、西部地区からの麦粒の出土は珍しかった。

石器は小林康男氏による詳細な報告があるが、その種類も多く、その量も系統・分類のできる程数多く出た石斧などもあり、生活遺跡として考察に耐える程のものであった。そうした中で弥生時代の石包丁の発見が1例あるが、これは縄文・弥生との複合を語るものでこの台地が長年にわたり継続して人々に使用されたことを語るものであるが、弥生住居跡の発見がなかったことは残念であった。

石器の総出土数は188件と集計され、うち打製石斧が最も多いが、第4号住居跡からの37個は異例であり、小量ながら漁捕用の網の出たのも珍しい。なお詳細については後の報文を参照されたい。

土器の出土は縄文中期のものを中心に多量に出土し、完形または完形に近いもので、住居跡の床面および床面下に発見されたものが多かった。

敷石住居址の全国的分布は、西関東地方から、中部地方東部にわたり、一部福島県下に及んでいる。江坂尋氏は『日本考古学辞典』で述べているが、本県の場合、千曲川水系に最も分布が多く、犀川水系・木曾川水系に非常に少なく、天竜川水系では、ここ10年来の中央道遺跡の調査により多くの遺跡が発掘調査されたが、その発見例は多くない。本遺跡の調査は、この様に数少ない敷石住居址であって研究上あらたに一例を加えることになるので、以下参考のため県下の調査例をあげてみる。

○千曲川水系では

- ① 南佐久郡佐久町 三本木遺跡
- ② 北佐久郡望月町 下吹上遺跡
- ③ " 駒井沢町 南石堂遺跡
- ④ " 御代田町 宮下遺跡
- ⑤ 小諸市 寺の浦遺跡
- ⑥ " 郷戸遺跡
- ⑦ 小県郡東部町 成立遺跡
- ⑧ " " 桜井戸遺跡

- ⑨ 埼科郡坂城町 辻山遺跡
- ⑩ ハ 戸倉町 幅田遺跡
- ⑪ 上水内郡中條村 宮遺跡
- ⑫ 上高井郡高山村 坂井遺跡
- 犀川水系では
 - ① 塩尻市宗賀牧野 牧野遺跡
 - ② 東筑摩郡波田町 萩原遺跡
 - ③ 東筑摩郡明科町 こや城山遺跡
- 天竜川水系では
 - ① 諏訪郡原村 上前尾根遺跡
 - ② ハ ハ 大山祇神社遺跡
 - ③ 関谷市 十二の后遺跡
 - ④ 下伊那郡高森町 瑞濃寺前遺跡
- 木曽川水系では
 - ① 木曾郡南木曾町 戸場遺跡

以上の如く本県内の敷石住居址の分布は、東北信すなわち千曲川水系に集中した感がある。それらの遺跡と比較考察すべきであるが、本報告にはこれを省いた。後日の調査研究に期待したい。

本遺跡中とくに第4号住居址は、以上の住居址の中でも特別な構造をもつものである。

土製品では、土偶も出土している。遺跡地帯は、中世に城砦及び館として使用されており、その埋没も浅く、現在でも地表下10cm余で遺物包含層に達する程であり、近世以後はまた耕作となり、柔軟が植えられたりして、農耕の為何度もかく乱されているので、土器・石器等遺物の破片は思いのほか広く散布しており、その量も多かったのである。

したがって、そうした遺物や住居址出土の遺物の復元と実測は大変な作業で、主として小林康男氏、と大沢哲氏がこれにあたり、苦心の末漸くこれを完成了。

また、本調査で発見された遺構のうち敷石住居址については、研究者の間に特別な关心を呼んでいるので、県下既調査のものについて、その件名をあげて参考とする。

3. 中世城砦部の調査

大久保知巳氏の分担した西部地区は、その出土の遺物・遺構からして、中世の城館遺跡に關係のあるもののが多かったが、遺物からみると、古代末の須恵器片や灰陶陶器・中世の陶・磁器片など発見されたが、この地域付近の城館跡から多く発見されている土製内耳鍋の破片を出している。

これは俗称内耳土器と云っているがはっきりと歴史時代のもので用途の判明しているものであるから、土製内耳鍋と呼ぶが正しい。それはこの時代に使われた内耳の鉄鍋を内耳鉄器と呼ばないに類するものである。

その出土状況は、大久保氏の報文のとおりであるが、この出土は28件に及んでいる。内耳鍋が多く出ているのは、この附近では明科町塔の原の明科中学校の建設の際、塔の原氏の居館跡と推定されている殿村地籍から、また隣村東筑摩郡四賀村会田の会田新町殿村地籍からも出ており、居館・住居跡と関係あるところに発見される。完形は平底のバケツ本来の形となり、煮沸用のもので、いわゆる考古学でいう土器の仲間に入らず、民俗学的・歴史学的には、土製内耳鍋というが正しく、中世末においては鉄製内耳鍋の出土した例は東筑摩郡朝日村草ノ崖上条城山の例にもある。さてこの遺跡の場合、この土製内耳鍋がまとめて多く発見された附近には、麦の炭化物、庫とおぼしい建物の遺存物が火災による炭化物とし発見されており、粉食用の石臼も出ていることから、この地に居住がおこなわれたことは疑いない。しかし、この地域は主郭部直上に副郭部から登るか所にあたるので、台地の中央部にも、このような遺構があると思われるが、今回の調査では発見できなかった。鉄釘・鉄くさび・小柄もこの地帯から出ており、碁石の黒石が発見されたのも、包含層中からであるので注意しておきたい。城館跡からの将棋の駒の出土は、富山県の朝倉谷の城址からも、上田市の塩田城跡からも発見されているが、碁石の出土はまだ聞いていない。

ここで便宜この遺跡における城館跡のことについて若干言及したい。記録の上で最古で信用のおけるものは、江戸時代の元禄11年に、明科町（当時東筑摩郡中川手村）から松本藩水野家に対し報告した書上帳が初見である。それによると「こや山古城、本城北南十四間、東西六間。二のくるわ、北南三十三間西東六十七間、城主存じ奉らず候」とある。その他寧保年間松本藩水野家編纂の『信府統記』にもほぼ同様の記事があるが、ともにこの城砦の創始、歴史等についての記事はない。他は俗書に小笠原氏の部将、篠代の居城との説があるが信じがたい。最近では明治9年（1872）中川手村から筑摩県に報告した村誌の中に、次のような記事がある。

（前略）古城の郭（中略）古屋の城城、本村ノ丑ノ方、明科耕地ノ東北部ニシテ、長峯ノ山脈北に向テ鋭角ヲナシタル北端ニアリ。風東西五十間、南北モ亦四十余間ナリ。數段ノ石壁尚各所ニ現存スト。食モ一小岩址ノミ。築造ノ年号及び、興廢旧記更ニ伝ハラズ。右之通り地誌調査仕候ニ付上申仕候。以上、明治九年一月第三大区、十小区、筑摩郡中川手村副戸長瀧沢栄一、同石田実、戸長石田基内、筑摩県參事高木惟矩殿。」とあり、ともにそ由緒を明らかにしない。

この城砦跡は中世鎌倉時代のはじめに筑摩郡に進出した小県郡の海野氏の一族である塔ノ原氏が、その本城（要害城）を長峯山中の塔ノ原城に、その居館を長峯山脈の西麓にある塔ノ原部落の殿村に営み、中世末までこの地方に繁衍して、府中（松本）小笠原氏の幕下となり、戦国時代を迎える。甲斐の武田信玄の侵略に逢って、小笠原長時にそむいて武田氏に降参し、天正10年（1582）3月武田氏の滅亡後、旧領を回復した小笠原貞慶に亡ぼされるまで、その本城とともにこや城も築造したのであろう。即ちこの城館はこの地方の部将の本城でなく、塔ノ原・大足・明科の地帯を領知した塔ノ原三河守の一支砦であり、同時にその部将の居館も置かれたと推察される。この地点は会田口の抑えであるばかりでなく、生坂谷への抑えであり、同時に監視哨または番所的役割りをもって作られたものであろう。海野氏が小県郡から筑摩郡に侵出してきた時期は、鎌倉時代の初期で、義仲に味方した安達

郡の仁科氏。筑摩郡の岡田氏が源頼朝によって抑えられたとき、頼朝の親任を得た海野小太郎幸氏子孫が鎌倉幕府の後押しで会田盆地に地頭として進出。その一党の塔ノ原氏が、塔ノ原城を本拠として、ここに城館を置き、それに伴って、ここに支砦がおかれたもので、その部将の居館兼支砦と考えられるのである。「こや」の地名は、「小屋」が正しく、しっかりした本城に対し戦時体勢における臨時の城館をさすもので、塙尻市の大小屋、松本市村井の小屋等いずれも史上に明らかである。この小屋城が小谷城と書かれ、また古屋城などと書き誤られてきたのである。前記元禄11年(1698)の書上げに「城主存じ奉らず候」とあるのは、この間の事情を間接に語るもので、この地が塔ノ原城氏の支砦で、城というには余りにも小さく、本城でないため、守将の名が忘れ去られたものであろう。

この城砦を概見すると、主郭部は狭小であるが、最も高所にあり、これは近世城郭の天守台にあたり、一応望楼的な建造物もあったと思われる。下段の副郭は今次発掘調査の中心のか所で、ここに守将の居館もおかれて、防備のための施設も設けられたものであろう。

発掘調査による遺構の調査・遺物の発見は、大久保知巳氏の報文にくわしいが、城砦跡として発掘調査されたのは、台地西方の一部分にすぎず、本調査において階段状石積郭と短い溝跡があり、別記遺物が出土した。とに角籠倉時代以来この地域に進出した海野(塔ノ原)氏の一小砦跡が破壊を僅少にして、その一角を発掘調査され、貴重な資料を得たのである。

(原 嘉藤)

あとがき

本調査は、国鉄篠ノ井線の複線化に伴う、路線変更により、止むなく、遺物の包含地かつ、遺構の登録地である明科町立城山公園の地のこの地域が工事のため破壊されるに先だち、文化財保護法の示すところにより、事前の緊急発掘をするため行われたものである。

実施に先だち、国鉄当局・長野県教育委員会当局、及び地元明科町当局とは何度も打合せ、合意を得て調査日程をきめ、発掘調査の予算を計上し、明科町教育委員会と国鉄岐阜工事局との委託契約により、筆者も調査の団長を引受けたのである。地元当局と町民の理解を深め協力を得るということであるので、町当局に調査会を組織していただき、その会の委嘱をうけて調査を実施したのである。

調査は天候にめぐまれ予定通り行われたがその過程において、国鉄当局と談じ当初の線を変更し、城跡の主郭部、また西部副郭部の石垣を損わないよう変更していただくことは遺跡の保存上有難いことである。

また町教育委員会当局が、事務局を担当して庶務・雑役に至るまで連日・連夜の協力を得たこと、また、この種の調査でもっとも苦心する発掘調査員が、この町内から必要数得られ、誠実に協力頼ったことは誠に耐えられない次第である。

また調査団構成の調査委員の各位には、当時各地で発掘調査がおこなわれ、かつ公職にあるなどして、公私繁忙の中にあったのに、率先参加願ったことなどこれまた感謝に耐えない。また、現地の測量について、人手不足で苦心したが、大沢哲委員の交渉により京都佛教大学の学生諸君、また地元の信州大学の学生諸君、及び近郷同好各位の臨時の協力を得たのは有難いことであった。

発掘の範囲の比較的狭小であったにかかわらず、本書報告のとおり、思いの外の多様・多量の遺物が出たので、その処理に手間だったが、特別塙尻市立平出遺跡考古物館の協力を得、小林康男委員を通じ、遺物の処理を願ったことは、明科町公民館が同様便宜の処置をとっていたことにともに感謝に耐えない。

報告書刊行は、予定より遅れてしまったが、これは前記の如く予想外の遺物の出土による。このことについては国鉄当局の寛容を得たことを謝したい。

本調査は、遺跡地帯の一部分にすぎず、かかる緊急な行政発掘とは別に、町当局による本格的な調査が行われることを望みたい。当町では目下町史の編纂を企画しているが、そのためにもこの遺跡の完全な調査を望むものである。

出土遺物は文化庁からの無償譲渡をうけて町資料館に保存公開する予定ときくがつい発掘例のない、特異な住居址の移転復元がされなかつたが、これは残念なことであった。

(原)

編集を終わって

今、ここにようやく本報告書の編集を終わることができた。〆切を延長につぐ延長でここまで延ばしてもらひながら、2晩も徹夜という有様である。本当に申し訳なく思っている。

考古学に取りつかれて10年、こうした報告書の作成に係わったことの殆んど無い私には荷が重過ぎたと思う。そうした私が、ここまでたどり着けたのも、幾晩もつき合ってくれた山本君をはじめ、多くの先輩友人、後輩諸君のお陰であると、心から感謝している。私はやっぱり無力であると思う。明日から一から出直すことにしておいた。

今回の調査で、できなかったこと、わからなかったこと、また不備な事は、この放鄭明科にこれからも住むであろう私が、ずっと背負って行こうと思う。そしてきっといつかは今日の無念を晴らそうと思う。

とにかく本日、編集を終えることができたのは、1年前の発掘、測量調査をはじめ、遺物整理等に専門的な犠牲を払い協力してくれた多くの後輩諸君のお陰であると、心から感謝し、編集の終わりとしたい。本当にありがとう！

(1979.2.9 大沢)

図版1 遺跡全景

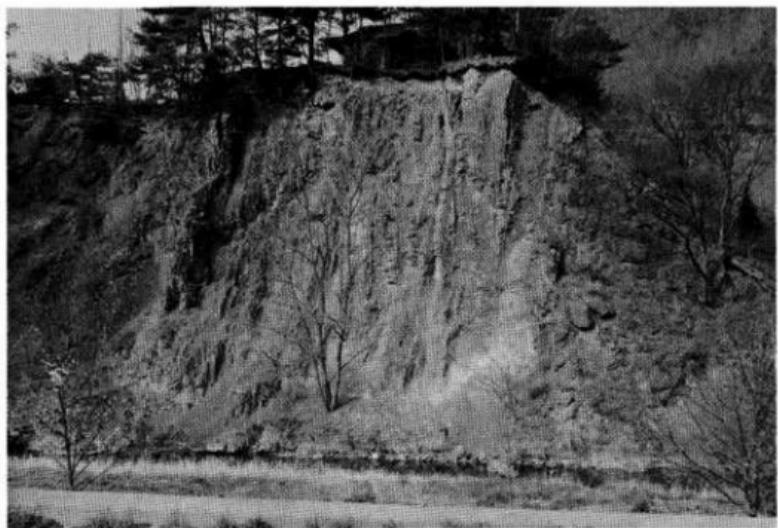


遺跡北方雷山より



遺跡西側 会田橋より

図版2 遺跡近景及び塔ノ原城址遠景



遺跡東側、施行田より



塔ノ原城址遠景（大足より）

図版3 東地区遺構及び1号址

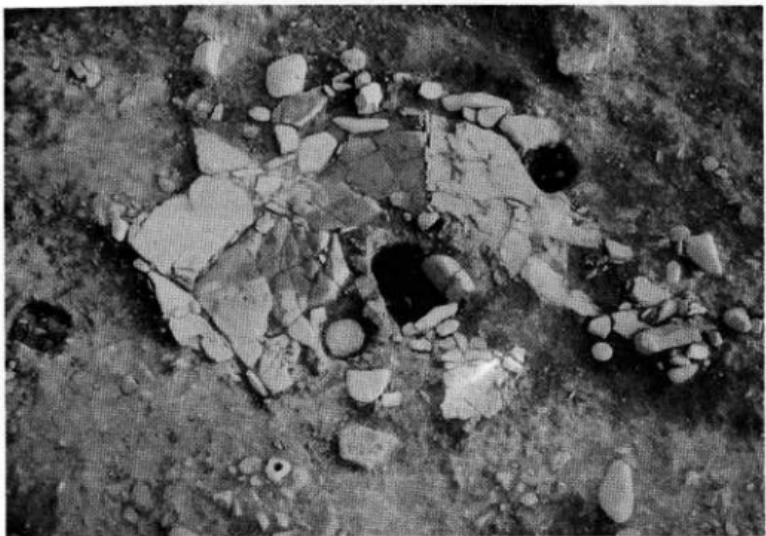


上 東地区遺構全景（手前左より 1号、2号、3号址
右奥4号址）

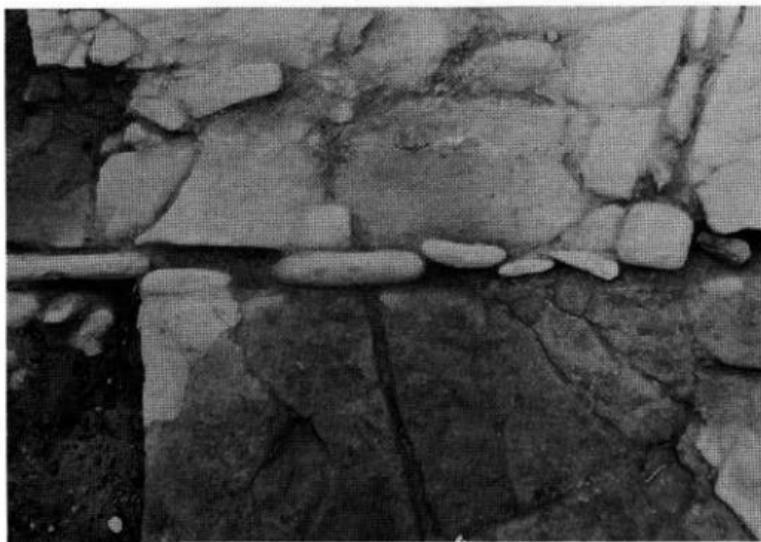
中 1号址

下 1号址埋甕

図版 4
2号址

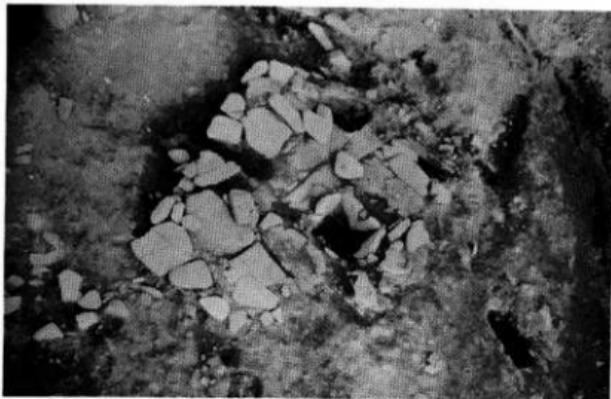


2号址



2号址集石間の石づめ状態

圖版 5
3號址



上 3號址全景
中 3號址爐
下 3號址埋甕



4号址全景



4号址炉

図版7 4号址立石



図版8
4号址上部集石



集石全景



集石中よりの遺物出土状況

図版9 西地区遺構



階段状遺構全景



石組み遺構群

図版10 西地区縁辺部石垣



石垣残存状況



石垣乱石積み状態

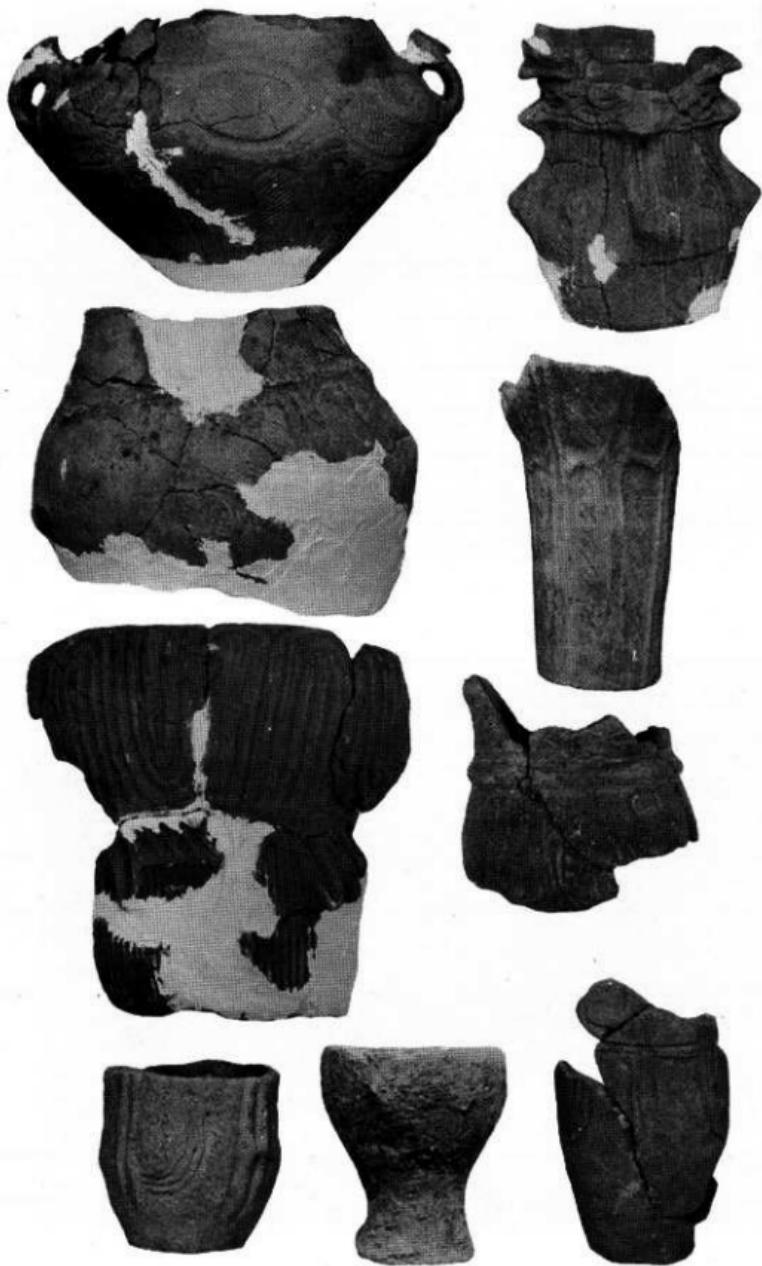
図版 11 東地区中世落ち込み



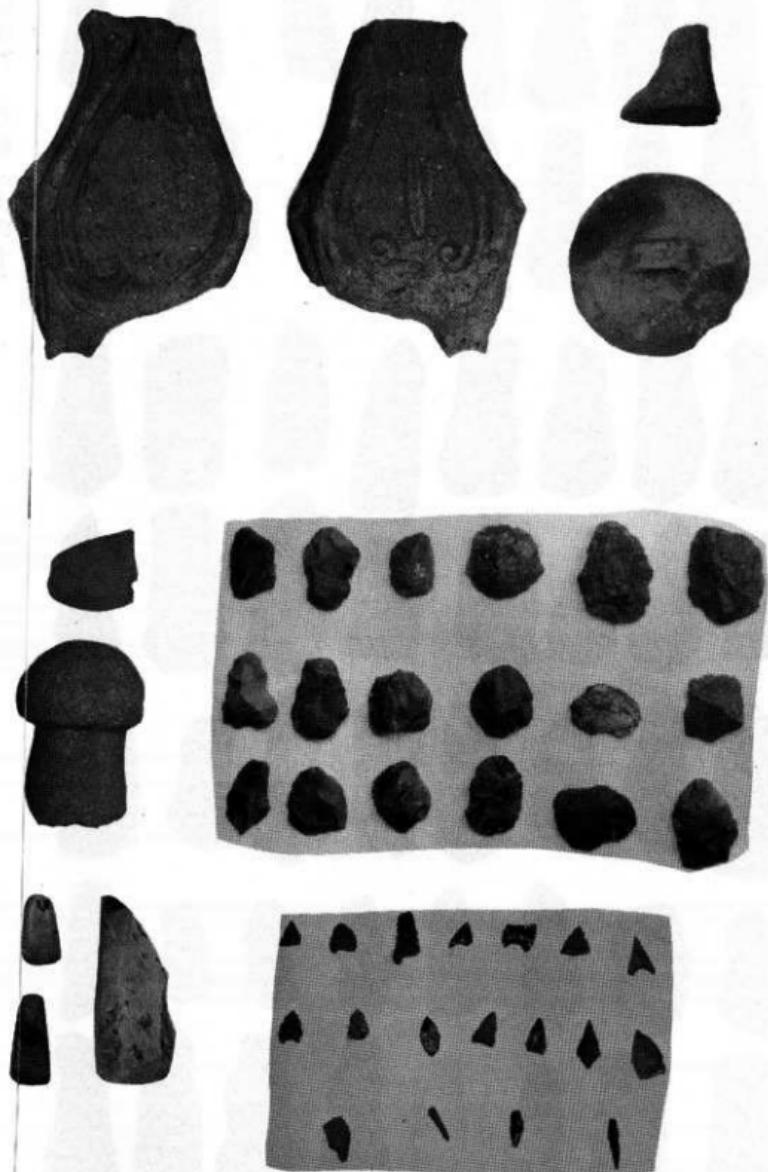
東地区落ち込み



図版 12 各遺構出土土器



図版13 土製品及び石器（その一）



図版14 石器（その2）





こや城址全体測量図 (1:455)

